

さん じょう し  
山城志 第12集

備陽史探訪の会機関誌

1994・12

目 次

備後渋川氏の盛衰	田口義之……………1
人恋うる柿本人麻呂を追って	柿本光明……………10
東広島市に平賀氏の事跡を探る —— 神辺城、弓矢の対決の真偽 ——	小島袈裟春……………18
温羅伝説を推理する	松岡 正……………23
箕島二千年史	小林定市……………27
野次馬根性のゆくえ	熊谷操子……………34
追跡/幻の備後国大神神社 <sup>おおみわ</sup>	平田恵彦……………48
国史跡 小早川氏城跡 沼田高山城——その遺構	末森清司……………67

## 初志を忘れずに

名誉会長 神谷和孝

この『山城志』12号の巻頭にあたる文を記すにあたっては、時々書かせていただくものよりは少々感慨深く、また改った気持ちで記しております。

会員の皆様も、この「山城志」第12号が備陽史探訪の会にとって大変意義ある時期に発行されたことを心にとめていただきたいと思います。

当会にとって今年は広島文化賞の受賞と会員200人を突破するという大きな喜びが重なりました。

特に広島文化賞の受賞は私にとっては感慨深いものがありました。私にしても、田口会長にしても、また志を同じうして会の発展に努力してきた人達も、決して受賞することを目的に頑張ってきた訳ではありません。歴史を探訪を通して学んでいこう、学ぶ喜びを少しでも多くの方と共有していこうという共通理解の上になって活動してきた15年間の積み上げが、世に認められた証しが、広島文化賞受賞という形であらわされたと思っています。受賞の審議の中で夫衆への働きかけ、啓蒙への活動が審議員の満場一致で決定されたと知らされて、この上ない喜びを感じました。

会員200人を擁する現在にいたるまでには色々と曲折もあったけれども、とにかく会員一致協力の継続があったからこそその受賞と感激、感慨が一入（ひとしお）です。

前にも記しましたが会誌はその発行する会の顔であると思います。当会の会誌を初めて発行する時に会誌の名をどのような誌名にするか熱い思いで長時間かけて激論を交しました。誌名に志という一文字を入れることは共通の願いだったと思います。志という一文字に象徴される熱い思いが会の今の現状を生み出す大きなエネルギーであったことは間違いありません。来年15周年を迎え大きな行動で会員同志祝いあいたいと思いますが、山城志発行の初志を忘れずに頑張りあいましょう。

# 備後渋川氏の盛衰

田口義之

## 一、名門の余光

『天文日記』「渋川（蓬雲軒、義陸）より一札を以て、尼子事大内と参会致さしめ、同時に上洛すべき由沙汰候」（天文九年四月二十日の条）

戦国時代、備後南部で活躍した国人衆には、古志氏、渡辺氏、杉原氏、宮氏、渋川氏などがある。このうち古志・渡辺氏については、それぞれ『古志家文書』・『渡辺先祖覚書』などの良質な史料を残し、研究も活発である。また、備後の雄族として聞こえた宮・杉原の両氏に関しては、戦前からの長い研究の蓄積もあり、最近では『広島県史』通史編中世で取り上げられ、次第にその全貌が明らかにされつつある。しかし、最後に挙げた渋川氏については、識者の関心も低く、研究者も少ないようである。これには色んな理由が考えられるが、やはり同氏の備後土着が比較的遅く、また、百年に満たぬうちに消え去って行った、在地性の希薄さにその原因が求められよう。

数ある備後の有力武士団の内、渋川氏は容易ならぬ家である。中世史の研究者でも、渋川氏については、足利氏の一族であること、室町時代、九州探題を世襲したこと、本拠を三原市八幡町に置いたことなど位を思



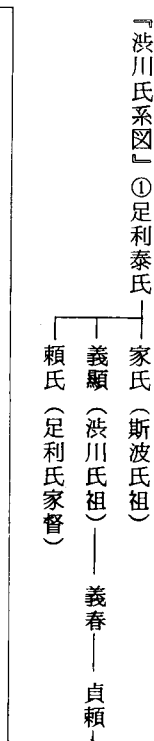
備後渋川氏の本拠  
小童山城跡（三原市八幡町美生）

い浮かべるだけであろう。

しかし、身分、格式のやかましかった時代、実は、この「九州探題」という家格は、どうしてどうして、大したものだったのである。

例えば冒頭に掲げた一文である。これは当時大坂石山本願寺の法主として聖俗両界に巨大な勢力をもっていた証如上人の日記の一節であるが、このなかで渋川義陸は、なんと、尼子と大内を参会させ上落させる、と証如に報じたとあるではないか。たかが三原の奥の一領主にしては笑止の沙汰だ、と思われるであろう。しかし、これが室町武家の格式というものなのである。いかに力があっても毛利元就にはできない芸当なのである。しからばその渋川氏とは如何なる武門であったか、以下その概要を述べてみたい。

## 二、將軍の室家



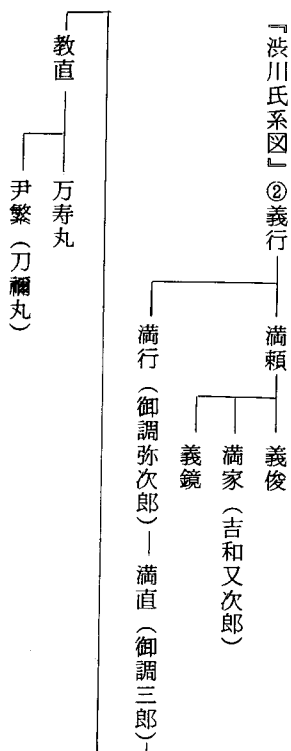
渋川氏は足利氏の一族で、上野国群馬郡渋川保を名字の地とする関東武士である。系図にあるように、渋川氏の祖義顯は、足利泰氏の次男にあたり、兄家氏は斯波氏を起こし、弟の頼氏が足利氏の家督を継いでいる。これは、頼家の生母が北条得宗家の出身だったため、父泰氏が北条

氏に遠慮して三男ながら頼氏に家を継がせたためといわれる。そのため、長男、次男の系統である斯波・渋川両氏の一族中に於ける家格は高く、斯波氏などは南北朝期に入っても「足利」姓を名乗っている程である。このように渋川氏の特徴は、まず、足利本家に最も近い家筋の一つであった事が挙げられる。

そして、渋川一族の発展に一期を画したのは、またもや本家足利氏との関わりにおいてであった。すなわち、義顯の曾孫義季の妹は室町幕府初代將軍尊氏の実弟直義に嫁し、さらに義季の娘幸子は、二代將軍義詮の正室となり、渋川氏は將軍足利氏の姻族として新たな飛躍の時期を迎えるのである。残念ながら幸子は実子に恵まれず、渋川氏は將軍の外戚となることはなかったが、幸子は三代將軍義満の准母として遇され、幕府内に隠然たる勢力を持った。このことが渋川氏の発展にとってどんな意味を持ったか、言を待たないであろう。

(参考) 森茂暁「渋川氏」(新人物往来社刊『室町幕府守護職家辞典』)

## 三、九州探題渋川氏

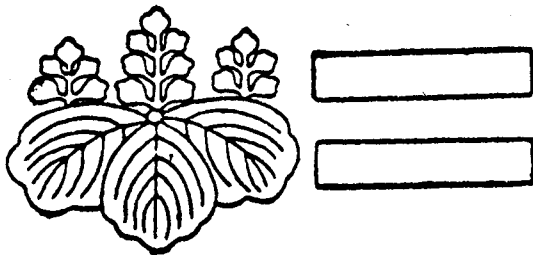


渋川氏がこの後、室町時代を通して九州探題を世襲できたのも、この  
 ような同氏の家格閥閥関係と無縁ではない。足利幕府は当初一色氏を九  
 州探題として派遣していたが、懐良親王を奉じた「征西府」の勢力が博  
 多に伸びて来ると、抗し得ず京都に引き上げてしまう。そして、その後  
 貞治四年（一三六五）九州探題に補任されたのが直頼の子義行であった。  
 この任命劇の背後に幸子の陰があったのは勿論である。だが、当時弱冠  
 一八才に過ぎない義行にとってこれは重荷であった。丁度、九州南軍の  
 最盛期にあたり、義行は九州の地を踏むことなく、五年後には解任され  
 てしまうのである。しかし、この出来事は渋川氏にとって全く無意味な  
 ことではなかった。義行は九州探題の任命と同時に備後・備中の守護職  
 に任ぜられており、このうち備後地方を拠点とする大きな契機となった。  
 渋川氏が本格的に九州探題を世襲するのは、応永三年（一三九六）、  
 同職として九州の統治に成功した有名な今川了俊が將軍義満の忌避に触  
 れ、解任された後のことである。これには又、幕府内での閥閥、派閥の  
 暗闘がその裏にあった。すなわち、今川了俊は斯波氏のライバルであっ  
 た細川頼之の後援を得て探題に任ぜられ、その統治に成功したのである  
 が、その死去後は支援者を失い孤立していた。これに乗じたのが当時九  
 州に野心を抱いていた周防の大内義弘である。義弘は將軍に了俊を讒し、  
 將軍も了俊の権勢の増大に危惧していただけに、この讒言に簡単に乗り、  
 彼を解任してしまったのである。そして、その後任に任ぜられたのが義  
 行の子満頼であった。満頼の背後には幕府管領斯波義将がおり、この人  
 事を強行したのである。先に述べたように渋川氏と斯波氏はその先祖が

同母兄弟に出、互いに庇護しあう関係にあったのである。ここにも渋川  
 氏とその力量ではなく、血統と縁故によって世に出るといふ性格がよく  
 現れている。

九州探題としての渋川氏は、満頼、その子義俊まではなんとかその体  
 面を保ったものの、応永三十年（一四二三）、義俊が少弐満貞と戦って  
 敗れて以後は衰退の一途をたどることになる。すなわち、義俊の後は満  
 頼の弟満行が継ぎ、以後満直、教直、万寿丸、尹繁と探題職を継承して  
 行くが、殆ど虚名を擁するのみで、万寿丸などは長享元年（一四八七）  
 二月十一日、家来の足助・森戸・斎藤氏によって害される始末であった。

（参考）川添昭二「九州探題の衰滅過程」



足利一門の家紋（桐紋と二引両）

## 一、備後と渋川氏

『渋川古文書』渋川直頼讓状（「御調郡誌」所収）

- 一所 信濃国有阪郷
- 一所 同 国長土呂郷
- 一所 陸奥国酒谷村
- 一所 同 国小紫村
- 一所 同 国沼木郷
- 一所 同 国赤阪郷
- 一所 備後国御調別宮
- 一所 同 国山南郷
- 一所 同 国山田村
- 一所 同国福代村 但大光明寺寄進
- 一所 佐渡国守護職

右所々、本御下文以下手継状等を相副、金王丸に讓與する所なり、依つて讓状件の如し

観応三年（一一三五）六月二十九日

直頼（花押）

先に掲げた『渋川系図』②の満行、満直のところに「御調弥次郎」

「御調三郎」とあるのは、渋川氏の所領が備後に有り、彼らが元々備後御調郡に本拠を構えていたからである。そのことを示すのがこの章の冒頭に掲げた『渋川直頼讓状』である。この文書によると渋川直頼は、信濃国有阪郷以下の所領を証文を添えて金王丸（義行）に讓っているが、

この中に「御調別宮」以下の備後の所領が見え、既にこの時期、渋川氏は備後地方に所領を獲得していたことが判明する。ただし、その獲得の経緯などは不明である。思うに直頼の父義季は、建武二年（一一三五）七月、中先代の乱に際し武蔵女影原で打死しており、その恩賞として尊氏より与えられたものであるうか。しかし、所領を讓られた義行は始め武蔵国足立郡に居城しており、現実に御調別宮以下を支配していたかどうかは判然としない。

渋川氏が実際に備後に影響力を及ぼしてくるのは、先に述べたように、義行が貞治四年（一一三五）、九州探題に任せられ、備後の守護としてこちらに赴任して来て以来のことである。義行は探題として殆ど何もなし得なかったが、九州赴任の前提として備後の所領を有効に利用したことは疑い無く、ここに渋川氏と備後との関わりが本格的に生まれるのである。

九州探題渋川氏一族のうち、備後を本拠とした可能性があるのは、満家・満頼・満行・満直の四人である。このうち満家・満行・満直の三人は系図にそれぞれ「吉和」「御調」を号したとあり、その由来は吉和（尾道市）御調別宮（三原市八幡町）という備後の在名に因むことは間違いない、彼らが備後に本拠を構えていたことは事実と思われる。また、満頼も「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳宮内村」（『三原市史所収』）によると三原市八幡町宮内の勝山城に居城したとあり、前後の事情から九州探題となる前に同地に居住していたとしても不思議ではない。

また、九州探題としての渋川氏が備後に拠点を構えていたことは次の

史料からも推定される。すなわち、『満濟准后日記』永享二年（一四三〇）閏十一月三日の条に、九州探題（満直）の使者板倉が上落し、探題の備後の所領のことについて内々嘆き申し入れた、とあり渋川氏は九州にあつても備後の所領の経営に強い関心をもっていたことが知れるのである。

そして、以上述べた室町時代の九州探題渋川氏の存在を前提にして、次に述べる、義陸・義正・義満と続く、戦国期の備後渋川氏の活躍があつたのである。

## 五、渋川義陸

『渋川氏系図』（『御調郡誌』をもとに筆者作成）

尹繁 — 義陸 — 義正 — 義満（陸景）  
右兵衛佐 王寿丸 今探題  
蓬雲軒等祇 右兵衛佐 天正元年死  
室宮上野介女 実小早川扶平男  
室毛利弘元女

今日、『御調郡誌』などで伝えるところによると、備後の国人衆としての渋川氏は、戦国時代初頭の義陸に始まるようである。義陸は同書によると最後の九州探題尹繁の子と伝えるが、このことは他の良質な史料に見えず、不詳と言うはかない。ただし、『天文日記』の記述などによると、義陸、義正、義満と続く備後渋川氏は、当時「渋川武衛」、或い

は「今探題」と敬称されており、彼らが九州探題渋川氏の正当な後継者と見なされていたのは事実である。

義陸が備後に本拠を構えたのは、言うまでもなく、九州に於ける渋川氏の権勢が全く地に落ちたからである。先に述べたように、探題としては七代目にあたる万寿丸は長享元年、家来によって害されているが、跡を継いだ尹繁も全く虚名を擁するのみで、その活動はほとんど知られていない。義陸がこのような九州に於ける自家の現状に見切りをつけ、先祖以来勢力を培って来た備後に居を構えようとしたのは当然と言えは当然であろう。

その移住の時期は判然としない。もし、義陸が尹繁の子とすれば、尹繁の成人は明応年間（一四九〇年代）と考えられているから、その頃の生まれとして永正十年（一五一三）前後であろうか、その直後永正十四年（一五一七）を史料上の初見として、備後に於ける義陸の活躍が知られるのである。

戦国初頭の備後は、周防山口を本拠とした大内氏と、出雲から南下する尼子氏の角逐の場であつたと言えるが、史料を見る限り、義陸は初め大内氏に属していたようである。すなわち、永正十四年八月、備後で尼子氏の軍勢が動き、世羅郡赤屋や沼隈郡山南の大内方の拠点で攻撃されたが、大内方の中心となつて尼子勢の撃退を図つたのが義陸であつた。

『萩藩閩閩録』六七 高須惣左衛門書出 渋川義陸書状

山南表の儀に就いて、山中所へ懇書披見候了、入心せられ候、時宜申

され喜び入り候、然る間彼の後巻事方々調候、高山より先勢として、昨日眞田備中守その外各々罷出候、相残る者共明日悉く罷出るべく候由申し候、内郡よりは三吉舎弟平次郎、吉舎より越中守昨夕赤屋に至り出張由申し候、今日御調木栗辺り迄着陣あるべく候哉、諸口調候間、今太山へも今朝人遣わし候、明日宮上自身出らるべき事肝要の通申し遣わし候、定て別儀あるべからず候哉、その表の儀、毎事一馳走喜悅たるべく候、沼田・竹原警固、明日罷上るべく候由相定め候、將又此の間要害より教順出候、頓て又籠り候、爰元の趣具さに申し遣わし候、恐々謹言

九月七日

義陸判

高須右馬助殿

ここで「山南表」云々とあるのは、渋川氏の所領が沼隈郡沼隈町山南にもあったことによる。備後渋川氏の所領としては三原市八幡町周辺の「八幡庄（御調別宮）」が有名であるが、沼隈郡山南地方の経営も義陸以下渋川三代が力を入れた所で、現在でも渋川氏の位牌を伝える悟慎寺など多くの史跡や文化財が残っている。

また、義陸は九州探題の権威を利用して周辺の国人衆を傘下に収めたようである。渋川氏の本拠御調郡八幡庄の南に接する三原浦（現三原市）は室町時代、杉原氏の一族高須杉原氏によって支配されていたが、この高須杉原氏は、戦国時代にはいると渋川氏の傘下に入ったようで、永正八年（一五一一）一〇月、渋川氏の老臣板倉三勝は高須彦次郎に山南郷内の地を与えている（関関録遺漏）。また、尾道市北部に力をもった木

梨杉原氏も一時渋川氏の勢力下に入ったようで、戦国初頭の当主は義陸の一字を受けて「陸恒」と名乗っている（同上）。

しかし、大永から天文初年（一五三〇頃）にかけて尼子氏の勢力が高潮に達すると、義陸は一転して同氏に属し、その手先となって活動することになる。すなわち、本稿の最初に掲げた『天文日記』によると天文六年（一五三八）十二月十四日の条から尼子方として見え、その関係も密接で、同日記によると本願寺から尼子氏に送る書状は渋川氏が取り次いでおり、その姿勢は強者に圧迫された弱者というよりも、より積極的に尼子氏を利用して自家の勢力を挽回しようとした意図が窮える（同上など）。なお、義陸のこの姿勢は、その室家である宮氏の意向も多分にあったようである。今まで知られていなかったことであるが、『天文日記』によると義陸の妻は宮上野介の娘であって、宮氏が尼子に一味して家を滅ぼしたことはよく知られており、このことが考えられるのである。また、義陸で特筆すべきことは、『天文日記』の筆者証如上人との交友である。同日記によると証如上人との交渉は天文五年（一五三六）十二月七日、義陸が本願寺の坊官下間上野に書状を送ったことに始まり、以後天文二十年（一五五一）に及んでいる。義陸が本願寺と交渉を持ったのは、渋川氏の所領が本願寺の領国加賀国にあったためである。加賀国に於ける渋川氏の所領は野代庄で、同所は野代村とも呼ばれ、『御調郡誌』所収の直頼讓状（前掲のものとは別。年月日不詳）に見える、同氏としては由緒のある所領であった。しかし、この地は永く不知行であったようで、義陸は本願寺の力でその回復をはかったのである。同日記



によると義陸は、証如の了承を得て家臣内海四郎左衛門を代官として加賀国に派遣したが、結局、義陸のこの企ては在地の反発を受け失敗に終わっている。なお、義陸が本願寺と交渉を持つことが出来たのは、その所領山南に真宗の有力寺院光照寺があったからである。同寺は中国地方に於ける浄土真宗の最初の布教拠点で、当時中国地方全域にわたり数百ヶ寺の末寺を持つ大寺であった。

## 六、探題宗蓮公

『小早川家文書』九一号 渋川義陸書状

備州八幡三ヶ村の内、三戸佐渡守知行分十二名（巨細別紙有り）事、人躰此方契約に就いて、彼地これを進らせ候、諸役等は、先規の如く仰せ付け、知行有るべく候 恐々謹言

八月六日

義陸（花押）

小早川掃部頭殿

義陸の嗣子、義正の出自に関して注目されるのは、『小早川系図』と右の義陸書状である。『御調郡誌』に渋川系図を載せて以来、義正は義陸の実子と信じられて来た。しかし、どうもそうではないらしいのである。

小早川家の系図によると、戦国初頭に活躍した扶平の三男に『義氏』という人物がいる。そして、同系図によると、この人物は『探題宗蓮公』



小童城中に残る渋川義正の墓石  
（右端は筆者）

と号したとあるのである。『探題』とは何を意味するのか、九州探題を世襲した渋川氏以外に考えられない、というのがその理由である。そこで改めて右の義陸書状を読み直してみると、この文書は義陸が義正を小早川家から養子として迎えるにあたり、その「結納」として八幡庄内の十二名を小早川氏に与えたものであることに気付くのである。勿論、同文書中の「人躰」とあるのが義正のことである。同書状に就いては『三原市史』などで義陸が小早川氏に援助を請うために土地を割譲したものとされてきた。しかし、それでは「人躰」の意味が通らない。養子契約の文書と考えれば意味が通るのである。系図では「義氏」とあるが、これは「義正」の誤りであろう、「氏」と「正」の草書体は酷似しており、転写の際の誤記と考えられる。

義正が小早川家の出身と考えれば、永正十四年の尼子氏の攻撃の際に、何故義陸の要請に対して小早川氏が援軍を出したかよく理解出来る。それは小早川氏にとって姻家の危機であったのであり、義陸にとっても養子の実家に援助を乞うのは理由のあることだったのである。

また、「毛利家文書」などによると、義正は、その妻に毛利元就の妹を迎えているが、このことも戦国期の渋川氏の動静を考える上で見過ごすことは出来ない事項である。

前節で述べたように、義陸は天文年間、出雲の尼子氏との関係を深めていたが、天文十年（一五四一）一月の吉田郡山城に於ける尼子氏の敗北は、渋川氏の存続にとって大きな脅威となった出来事であった。しかし、ここで義正の妻に毛利氏の女を迎えていたことが大きな意味を持つのである。つまり、この尼子氏の敗北後、義陸が身を引き、義正が渋川氏の当主として振る舞うことによって、渋川氏はその危機を脱することになるのである。

義正の文書としては、天文十年一月二十二日付安藤又七充てのもの（『御調郡誌』所収）が知られるが、この文書こそ義正が尼子氏に深入りし過ぎた義陸にかわって、渋川氏の全面に出たことを示す注目すべき文書なのである。

しかし、このことは別の面から言えば、渋川氏がその独自性を喪失する端緒ともなった。尼子氏の攻撃を撃退した毛利氏は、以後戦国大名としての道をひた走ることになるが、渋川氏は同氏の庇護下で次第にその独自性を失い、「今探題」或いは「八幡様」と敬称されるだけの名目的

な存在となって行くのである。



渋川義正花押  
(桑田家文書)

## 七、渋川氏の滅亡

毛利氏が戦国大名化するにあたって、九州探題の家格をもつ渋川氏の存才は、一定の利用価値を有していたに違いない。しかし、中国地方に於ける毛利氏の覇権が確定すると、その存在は次第に疎ましくなってきたと考えられる。彼の織田信長は足利義昭を奉じて上洛を果たすと、一転して義昭の活動を封じ込めようとしたが、実力者にとって権威は、それが存在するのみで良く、それ以上であってはならないのである。

渋川氏の場合も同様であろう。「御調郡誌」などによると、渋川氏は三代義満（陸景とも）の代、天正元年（一五七三）二月、その死去によって断絶の非運に見舞われたと伝える。同書によれば、断絶の原因は義陸に嗣子なきためとあるが、如何であろうか。というのは「芸藩通志」によれば、御調郡本庄村の里正一介は渋川義満の子孫で、系図・讓状などをもち伝えていたとあり、また「毛利家八箇国時代分限帳」によれば、天正一九年頃、渋川源次郎という者が御調郡の内で四九四石余の給地を有しているのである。勿論、「芸藩通志」の伝える里正一介や「八箇国

時代分限帳』の渋川源次郎は、渋川氏の庶流であって、嫡流はこの時断絶したと考えても良い。しかし、『萩藩閥閥録』巻七六村上権右衛門書出などによれば、義正の妻毛利氏は天正五年まで生存しており、毛利氏から養子を迎えるという手段も残っていた筈である。

結局、毛利氏は渋川氏を存続させる気持ちは毛頭なかったということである。ということは、この時期渋川氏は、既に毛利氏にとって利用価値がなかったということ、裏返せばかえって邪魔になる存在であったことを意味しよう。

天正元年と言えば、あの信長が義昭を京都から追放した、所謂室町幕府滅亡の年である。同じ年に備後でも室町の名門渋川氏が史上から消えて行った。偶然とは言え、歴史の流れを感じさせる出来事である。



渋川氏が九州との連絡用に築いたと考えられる鳴滝山城（尾道市吉和町）

# 人恋うる柿本人麻呂を追つて

柿 本 光 明

鴨山の岩根し枕ける

われをかも知らにと妹が待ちつつあらむ

(二二三)

「歌の聖」と称えられた万葉歌人、柿本人麻呂の辞世の歌である。

『万葉集』には、古くは仁徳天皇の時代から、近くは八世紀半ばに至る約四〇〇年間の歌が収められている。しかし、舒明期（六二九年即位）以前の作品は、いずれも伝誦性が濃厚で、実質的にそれぞれの時代の作品とは認めがたい。

歌の種類には、長歌・短歌・旋頭歌（五・七・七・五・七・七の六句体の歌）があり、総数四五一六首全二〇巻に及ぶ大歌集である。そのためすでに編集されていた歌集をもとに大伴家持が光仁朝に再編集したといわれている。この時代はまだ仮名文字が創り出されていなかったため、漢字を用いた複雑な表記法が考案された。その中で、漢字を表音文字として用いたものを「万葉仮名」とよび、後代の仮名文字の基礎となった。『万葉集』の時代を第一期Ⅱ六七二年（壬申の乱）以前、第二期Ⅱ六七三〜七一〇年（平城遷都）、第三期Ⅱ七一一〜七三三年（山上憶良の死）、第四期Ⅱ七三四〜七五九の四期に分けてみた。

斉明朝前後の代表歌人のなかで最大の作者は額田王であるが、ここで

はそれよりも、もっと専門歌人らしい性格をもった万葉歌人たちの群像をさぐる。万葉の第二期藤原京時代を代表するものは柿本人麻呂と高市黒人、第三期の和銅・養老時代を代表するものは山辺赤人、大伴旅人、山上憶良、第四期の天平時代を代表するものは大伴家持である。

古代最大の歌人が柿本人麻呂であることは多くの衆口の一致するところである。だが人麻呂の人物、伝記について知ることのできるのはあまりにわずかである。したがって人麻呂の人間像を描くことはきわめて困難であるが、なおかつ人麻呂をさぐろうとすれば、どのような手がかりがあるだろうか。

## ◎万葉の大和

大和には群山あれどとりよるふ天香久山

登り立ち国見をすれば 国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つ

うまし国ぞ蜻蛉島大和の国は (舒明天皇、二)

この国見の歌は大和の象徴的な讃歌となっている。いまならまだこの

古代の風土に思いをはせることができる。

大君は神にしませば

あまぐものいかづちの上にいほらせるかも

(二三五)

天皇、雷岳においでました時の柿本人麻呂の作れる一首である。

### ◎万葉の山背・近江

何処にかわれは宿らむ

高島の勝野の原にこの日暮れなば

(高市黒人、二七五)

琵琶湖の西、高島のあたり、寒々とした静寂と漂泊感が漂う。ましてや極官にあり、栄華を誇った藤原仲麻呂がこの地で斬られたことを想起すれば、世の無情をさえ感じる。

恭仁・紫香楽・大津と山背や近江の方の万葉時代の都は、湖の岸辺に打ち寄せる波の雫にも似て、いずれも長つづきしなかった。

### ◎万葉の摂河原

摂河原(摂津、河内、和泉)の歴史は古く、難波の地の殷賑も長くつづいた。大伴の御津の浜辺や鶴が妻呼ぶ難波潟まで来ると、生駒山が見え、その向こうは大和の国。帰朝の遣唐使や築紫帰りの官人も、安堵した気持ちになる。

住吉の岸の松が根うちさらし  
寄せ来る波の音のさやけさ

(一一五九)

また、摂河原には中国・朝鮮半島から渡来した人々が多く定住し、その周辺に生産技術の発展や仏教文化の華が咲いた。

### ◎万葉の越の国

越の国の万葉を語る時、越中国守時代の大伴家持をさしおくことはできない。越中守になるまえの約一五年間に一六五首、越中守時代の約五年間に二一四首、それ以後の八年間に一〇〇首を作るその余裕が大仏建立の宮廷讃歌を生み出す。

天皇の御代さかえんと

東なるみちのくの山にこがね花咲く

(四〇九七)

### ◎万葉の瀬戸内

山陽沿海の歌の大部分は、定住者のそれでなく、中央派遣の人々のものである。

瀬戸内の船旅はひと月にも及んだ。舟底の浅い木船の身を委ね、人力で潮流の変化に抗して進まねばならなかった。遣唐使も、遣新羅使人も、太宰府へ赴く官人や防人も、望郷や妻恋いの情をつのらせながら、みなこの苦勞を味わった。

吾のみや夜船を傍ぐと思へれば  
沖辺の方に楫のおとすなり

(三六二四)

### ◎万葉の遺つ朝廷太宰府

太宰府は政庁の正殿・中門・南門を結ぶ延長線上の大路を中心とする、左郭・右郭の府域にそれぞれ東西一二坊、南北二二条の号坊をもつていた。防備設備として、椽城・大野城を左右に配し、前面に水城をおく。

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が  
袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

(上総国市原郡上丁刑部直千国、四三五七)

東国からはるばると召されて太宰府防衛の任に就いた防人の歌である。人麻呂の伝記に関しては、天武・持統・文武の三代にわたって活躍したことは確かであるが、天武九年(六八〇)には、宮廷に出仕していらしい。人麻呂の長歌は同期における他の歌人たちの作に比べ、きわだつて字余り字足らずの不整音句は少なく、五七の音数律による定型確定に果たした役割は大きいといわれる。そうした長歌の定型を活用して、人麻呂は天皇讃歌や皇族の挽歌を多数作つたし、旧都の荒廃を悲しむ歌や妻と別れる時の歌、そして妻の死を哀傷する挽歌などに多くの佳作を残した。もちろん短歌においてもみるべきものが多い。

私が柿本人麻呂に興味をもちはじめたのは中等学校の三年生頃だつたと思う。当時、高山樗牛の『瀧口入道』、それに昭和一〇年頃から朝日

新聞に連載された『宮本武蔵』などと同時に『万葉集』なども読みあさるうち、柿本人麻呂の名前に気付き、わが柿本家とのつながりを探るようになった。

柿本氏の本拠について古来より大和地方に二つの候補地があげられる。一つは大和添上郡標本付近(現在の天理市)である。もう一つは大和国北葛城郡新庄町柿本である。新庄町は古くから柿本神社が存在することから由来するからである。

明石市に正一位柿本大名神の扁額のかかった拜殿がうつつそうとした松林に囲まれている。参道の石畳の両側には文学歌碑が点在し、万葉の歌聖に詣でる喜びがこみあげる。拜殿前の狛犬は、台に宝曆四年(一七五四)銘が刻まれており、播磨では最も古いとされている。

人麻呂は、天武・持統天皇に仕えていた頃、石見から都へ帰る途中、必ずここに立寄り、この道の風景を愛したそうだ。

前述、万葉の瀬戸内で遣唐使も、遣新羅使人らも、太宰府へ赴く宮人や防人の『万葉集』の歌の中にこの船旅の歌がある。その瀬戸内の中で人麻呂は次のように詠んでいる。

武庫の海にはよくあらし漁する

海人の釣船波の上ゆ見ゆ

(二五六、三六〇九)

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の

野島が崎に船近づきぬ

(二五〇)

淡路の野鳥が崎の濱風に  
妹が結びし紐吹きかへす

(二五一)

ともし火の明石大門あかしに入らむ日や  
こぎ別れなむ家のあたり見す

(二五四)

天さかる夷ひんの長路ゆ恋来れば  
明日の門かどより大和島見ゆ

(二五五)

『万葉集』に詠まれた明石は歴史的な見所が一杯ある。なかでも山陽  
電鉄「人丸前」駅北へ徒歩数分、人丸山頂に旧県社、柿本神社がある。  
土地の人は「人丸さん」と呼ぶ。祭神は柿本朝臣人麻呂。古来、わが国  
に於いて、歌聖人麻呂を神と仰ぐ社はあるが、この明石でも早くから祀  
られてきたようだ。

弘仁二年（八一二）各地を巡錫じゆんせき中の弘法大師が明石に来て、人麻呂山  
（現明石城）に揚柳寺（月照寺）を建立した。その後、和歌を好んだ寺  
僧覚証は、人麻呂の霊の明石に留まるのを感じたとして、寺の背後に  
小祠を建てた。これが柿本神社の起りりと伝えられている。仁和二年  
（八八七）だったという。

一七世紀初期の元和の頃、神社（月照寺も）を藩主の小笠原忠真が明  
石城を築くに際し現在の場所に遷し、社殿を新築した。のち、人麻呂一  
千年祭の享保八年（一七二三）には「正一位柿本大明神」の神位神号を

宣下されて、女房奉書を賜わった。以後、人々から崇敬され、寄進も多  
く、後桜町天皇（一八世紀中期）宸翰しんかん短籍と仁孝天皇（一九世紀前期）  
宸翰及び一座短籍、各数十葉は、国の重要文化財に、森狙仙筆「猿の絵」  
（一八一四）は市の文化財に指定されている。

人麻呂のすばらしい万葉歌は数多く残されている。その中には宮廷御  
用歌人として作った儀礼的な歌もあるにせよ、大きく美しく、激しい抒  
情の歌の数かずは千年の歳月を越えて、今なお人を魅了してやまない。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に

島かくれゆく舟をしぞ思ふ

（『古今和歌集』羈旅・四〇九）

しきたえの袖かえし君

玉垂の越野に過ぎぬ またも逢はめやも

（一九五）

『万葉集』を代表する歌人・柿本人麻呂は日本人の魂をやさぶるミス  
テリアスな人物として知られている。人麻呂の生涯をたどるとき出誕の  
地として有力な石見（島根県）を忘れることはできない。

益田市には柿本人麻呂神社が二社ある。一つは益田市戸田にあり、い  
ま一つは益田市高津にある。前者は人麻呂の出生を記念して建立され、  
後者は人麻呂の死後、鎮魂のために建立したものである。出生と死没に  
当って両方とも神社が建立されたのはたいへん珍しいことであり、この  
二つの柿本神社はいずれも大規模な社やしろで、道端に勧請されているような

小祠ではない。それだけに地元民の人麻呂に対する尊崇の度合いは高いものがあり、語り継がれ、人麻呂伝承が明らかに住民の間に生きている証でもある。

安政六年（一八五九）生れの私の祖父（昭和一三年没）が柿本家の先祖は大和の国だといっていた。私が仕事の関係で大阪にいたときそのルーツをたどってみた。「古事記」によれば、柿本族は孝昭天皇の皇子天押帯日子命を始祖とし、和珥族、小野族、櫛代族、春日族を同族としてゐる。小野族は大和國小野の地を、櫛代族は和泉国櫛代を、春日族は大和国春日の地を本拠とし、仁徳天皇の御幸の際、糟を積んで垣としたほどに栄えたので糟垣臣の姓を賜わり、後年これを春日に改めたという。

春日、小野、櫛代の三族は次第繁栄し、石見国美濃郡にはるばると上陸したのである。小野族は小野に上陸し、小野天ノ多祀阿豆委居命神社を建立してその祖神を祀った。同様に春日族は春日の地に拠って天石勝神社を建立し、櫛代族は久代に移住して櫛代賀姫神社を建立している。これらの種族は移住後もたえず中央の大和国との連携を計り、石見国に文化の灯をともした。益田市内にある須久茂塚、小丸山古墳や鶺ノ鼻古墳群はこうした種族の発展を如実に物語るものである。

須久茂塚は櫛代賀姫をまつる神社がある久城台地の中央部にある。江戸時代の『石見名跡考』『石見古事談』にみられるように、昔長者がすくもを盛り上げて築いた小山であると思われ、円墳と方墳が両方から前庭を築いた五世紀に造られたものと思われ、円墳と方墳が両方から前庭を築いたのべた形の巨大で珍しい未発掘の前方後円墳である。主墳の後円部

は二段構えで丘頂は九m、基底の径は五八mに及び、陪塚（径四m、高さ二m）を備えている。

小丸山古墳は、附近の宅地造成地から三角縁神獸鏡が昭和四七年に出土した。この古鏡は三世紀に中国（魏、晋時代）で制作されたもので、文様などその技法が優れている。これは古代大和朝廷が全国を統一する過程で同盟・従属関係を結んだ地方豪族に与えられたものとみられる。

鶺ノ鼻古墳群は益田市の東海岸の日本海に突出した岬にあつて眺望がすばらしい。数十基の古墳群でいずれも小型の墳丘古墳であるが、その数においては他にひけをとらない。

山陰本線を浜田より益田に向かって走る時、車窓に映る海浜の風景は素晴らしいの一語につきる。天下一品といってもよからう。石見一帯の海岸は山が海に押し出していて、その山がまさに海に落ち込む崖縁をうねうねと線路が続く。砂浜、浦、奇岩、岬と風景は目まぐるしく展開し、人の眼を楽しませてくれるが、益田平野にはいると風景は一変し、暢びやかな田野に、また、遠望される薄青の山脈に石見野のもつほのかな艶が、海の景とは違った穏やかな解放感を投げしてくれる。

益田平野の西部は平野を迂回した山脈が低く滑らかな稜線を引いて海に落ち込んでいる。高津川畔から望む景はまた格別で、広大な河原を渡ってくる微風に吹かれながら水豊かな川面に映るそうした山々の色は何んともいえず好ましい。益田平野はその昔海であつたという。益田川、高津川の両河川の暴威は益田平野をあばれまくり、海から吹き寄せて来る風のため吹上げの砂丘となつているので、日本海に注ぐ川は例外なく



川の流砂と卓越風が運ぶ漂砂とで河口は埋没し、西から東にのびる砂州のために河口は極めて狭くなり、一步内にはいると滴々とした水量を誇る河口湖となっている。この河口湖は広く、特に高津川の場合は柿本人麻呂の「石川に雲立ち渡れ」という和歌がうなずける広大さである。

山陰本線益田駅の西隣、戸田小浜駅で降りると「柿本人麻呂生誕の地」とかいた説明板がある。その前を歩いて国道九号線に出て、しばらく東に向かつて進むと、今度は南に向う小径に沿って山ふところにはいる。そこが柿本人麻呂の出生地であり、これが益田市の郊外の戸田にある柿本神社である。のどかな田園風景のなか小高い丘の中腹にある社殿は、うっそうとした森に囲まれ、樹々から漏れる光を受けて一種神秘的な雰囲気漂わせている。「語家（語り部）綾部氏家系」によると、

綾部氏家其先、出づる所詳ならず。初め大和に住し、柿本氏に仕え、氏の石見に下らるるに際し、陪従して美濃部小野に住し、世々語部と称し、柿本氏仕う。柿本其語家の女を嬖幸して、一男を挙げられ、其児幼にして父を喪へるを以て、語家これを養育したりき。これ柿本朝臣人麻呂なり

とある。つまり、大和に住んでいた綾部家は柿本氏に仕えていたが、後年柿本氏の支族が石見に下った時、これに従って下向し、美濃郡小野に代々語家として住みついた。のち柿本某は語家の女を寵愛して柿本人麻呂が生まれたという。また、語家伝説として『人丸秘密抄』には、

人丸は天武天皇の御時三年八月三日に、石見戸田郷山里という所に、語ノ家命という民の家の柿本に出現する人なり。其歳二十余。家名尋問に答云、我家なし。来る所もなし。父母もなし。知行もなし。只和歌の道のみ知れりといふ。

とあるように、神化された感じがあつて、このまま受け入れることは難しい。このように歌人としての人麻呂が神化されたことで、平安時代以降、室町時代にわたる歌人がいかに人麻呂を崇拜していたかがわかる。それはやがて人麻呂の懸供となり、超現実的なものとして象徴化されるのである。また、『戸田柿本神社旧記』に、

人麻呂おひおひ成人なし給ふに従ひ芸術の道おろかなく御名中国に高く聞えおはしましぬ。その頃嘉多良比の許へ七十許りの老翁日毎に来り人麻呂に書を授けまた互に歌をよみ詩を作り或は弓馬の術を教へ、日傾けば何処ともなく帰り去りける。

と少年時代に嘉多良比の下で文武に励んだと記してある。「嘉多良比」は語家綾部氏を指している。

綾部家では語家の代りに、可多良比、賀多羅為、加多羅井という文字を使っている。もともと、小野臣、和理臣から猿女を祖とする語部を出したという伝説がある。この両氏よりこうした語家を本職とするものが出たのも一重に両氏が発民して来たことを意味するもので、かねて鎮魂

を主とし、天語（神語）を職とした猿女と同じように、これら小野、和理両氏も種族の繁栄ぶりを語り継いだものであろう。人麻呂の作った壮大な歌群から推しても、そこには先祖の、いや累代にわたった苦闘の経験が伝承されていて、それが人麻呂の血脈に浸透し、例え即興的に歌ったものであっても、ちょっとした風物に触れた場合でも、嘗々として受け継いだ種族の血潮があふれて表現されるのである。

大体、語部は巫女をもつて代々世襲されてきた。「古語拾遺」に猿女が天鈿女の後継者として神楽を奉仕したとあるのをみても、これが神事への語りとして女性の職分となったと思われる。人麻呂はこのような巫女の伝統的な語りを聞かされて少年期を過ごしたものであろう。

柿本人麻呂が生まれたのは、おそらく大化年間（六四五―六四九）と思われる。私は、青年期に柿本人麻呂は石見から近江朝廷に出仕したものと考えるが、有間皇子の変や百済の役は、年少だった人麻呂にとつてはさほど実感はなかったであろうが、壬申の乱（六七二）は青年期に達していたとみられるので衝撃だったと思われる。

壬申の乱が終り、律令国家の基盤が確立されるころ、人麻呂はすでに都で、持統・文武両朝の宮廷歌人として次第に頭角を現わし、天皇の御幸にもしばしば同行し、旅先の叙景を雄渾に歌いあげた。

ささなみの志賀の辛崎幸くあれど

大官人の船待ちかねつ

(三〇)

山川もよりて奉ふる神ながら  
たぎつ河内に船出するかも

(三九)

英虞の浦に船乗りすらむおとめらが  
珠裳の淵に潮満つらむか

(三六〇)

妻もあらば探みてたげまし佐美の  
山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

(二二一)

特に長歌で傑出しており、高市皇子の死を悼んだ挽歌、石見の国から上京するおり妻を思つて作った作品など、長歌の芸術性を完成させたといわれる傑作を数多く残している。慶雲二年（七〇五）国司として石見国高津に赴任、死の年まで京と石見を行き来した。

君がため浮沼の池の菱採むと  
わが染めし袖ぬれにけるかも

(一二四九)

国引きの神話で知られる三瓶山。その山麓には伝説を秘めた浮布池があり、旧名佐比売山のなだらかなスロープと女性的な稜線のこの山を、人麻呂は優しく見つめていたのであろう。江津市の南三キロ、江の川の鉄橋上流にみえる島の星山（四七〇m）は、人麻呂の歌った高角山といわれ、眺望のよいところで、ここは人麻呂が歩いたと伝えられる万葉の

古道もある。

石見のや高角山の木の間より

わが振る袖を妹見つらむか

(一三二)

人麻呂は旅先の景を情熱を持って歌い上げた「雑歌」や、皇子、皇女の死を氣宇壮大に詠んだ「挽歌」から、万葉の息吹きを感じる事ができる。また、愛する妻との別れを痛切に歌う「相聞」には、人麻呂の内奥が感動的に盛り上がり、妻を残していくせつなさが表現されている。これからも人麻呂の歌は、万葉をひもとく人々の心を魅了し続けていくことだろう。

和銅元年（七〇八）ごろ、鴨山で冒頭の歌を詠み没した。死の直前に人間の限らない哀感がよく表現されている。鴨山には諸説あり、斎藤茂吉の鴨山説（邑智町）をはじめ、江津、浜田亀山、益田説と論が分かれている。

歌人斎藤茂吉は、人麻呂終焉の地々鴨山々を求め続け、苦心研究の末、湯抱温泉にある鴨山をその地とした。近くの丘には「人麻呂がつひの命ををはりたる鴨山をしもこと定む」と刻まれた歌碑が立っている。

万寿三年（一〇二六）に発生した大地震と、それに伴う大津波で沈んだと伝えられる高津川河口沖の鴨島。人麻呂辞世歌にある鴨山はここではないかといわれている。昭和五二年には海底調査が行われ、梅原猛は『水底の歌』を発表した余勢を駆って、この暗礁は地震より海底に消え

た鴨島であることは間違いないといっている。

この秋のあとに四首の挽歌群がついている。これらの歌によって、人麻呂は晩年大和国から生まれ故郷とみられる石見国に帰って死んだことがわかる。

でも鴨山はどこであろうと

空が広い

それは地球の丸さを感じさせてくれる

抜けるような青さを競うように

海は青い、はてしなく青い

それは人の心貫き通すような青さだ――

人恋うる人麻呂を追って

海岸線に立つと、懐かしい風が頬をなでる

日本海の匂いだ

気がつけばこぼれるほどの夕焼けだ

透きとおるほど洗われた心に

かの万葉歌人の感傷がじわりと染みていく

時はまた悠久の流れを復唱しはじめた――

――益田の海岸にて――

(注) 歌の下の番号は『万葉集』の番号。

「はのぼのと明石の浦のく」だけは『古今和歌集』から採った。

# 東広島市に平賀氏の事跡を探る

## ——神辺城、弓矢の対決の真偽—— 小島 袈 袈 春

平賀氏の歴代の中で、私が知っているのは平賀隆宗だけである。知っている、といっても、天文一八年（一五四九）大内方の武將として、敵の尼子氏に味方した山名理興（たてなま）の守る備後国の神辺城を攻略し、大内氏とそれに続く毛利氏の備後・備中制覇に大きく道を開いた事跡についてのみであって、隆宗一族の所領や系図等については余り知識はないのである。

そこです、私が関心を持った神辺城の攻防戦から記してみる。

事は天文一一年（一五四二）、大内義隆が大挙して敵の尼子氏の本拠地、出雲の富田城（とけ）を攻撃した時から始まった。それは前々年の天文九年（一五四〇）、尼子晴久が三万の大軍を以て大内方の毛利氏の本拠地、郡山城（こがねやま）を攻撃したが、遂に破れて出雲に逃げ戻った時、それまで日和見（ひよりみ）をしていた石見（いしみ）、出雲、安芸、備後の中小豪族、十三氏が大内氏に味方して「尼子氏撃滅の好機会」と、大内氏の重臣達に進言したからであった。

ところが、天の時未だ到らず、攻めあぐむうち、先の十三氏が今度は尼子方に寝返ってしまった。この辺りが戦国武士の本領なのである。大内軍は散々に破れ、義孝の後継予定者、晴持を始め、小早川家当主の正

平等々多くの犠牲者を出したのであった。天文一二年（一五四三）五月の事である。

その上、寝返りの首謀者、山名理興はさっそく尼子方として動き始め、翌六月には安芸の小早川氏の領地にまで攻め込んできた。そこで、大内氏は弘中・毛利・小早川・平賀の各氏に命じて防戦し、進んで山名理興の本拠、備後の神辺城を囲み攻撃したが、落城せず、戦線は膠着したまま六年間が過ぎて天文一八年（一五四九）を迎えたのであった。

その四月、平賀隆宗は大内氏に「山名理興には宿怨（しゆくゑん）があるので、我が一党に攻撃を任せて頂きたい」と願い出て許しを受け、同九月遂に攻略に成功したのである（『大内氏実録』）。

しかし、この榮譽を受くべき平賀隆宗は『平賀家家譜』によると、七月頃すでに病死していた、というのである。

『福山市史』を始め現代の諸書は、その所を「家臣たちが遺志を継いで激しく攻撃したので……」と常識的に記しているが、私はもうひとつの説『陰徳太平記』及び『西備名區』等の記述が心に浮かび上がるのである。それによると、

天文一八年（その年）、平賀隆宗は書を以て「血斗」を申し入れ「理興は矢二箭を射、隆宗は甲冑にてこれを受ける、隆宗死すれば我が軍兵を安芸に戻す。理興射外せば開城せよ」と宣誓した。弓の名手である理興はこれを受けて、月明りの夜、城の尾崎で六〇間（一〇〇m 余り）を隔て、二人は対峙した。理興の第一矢は見事隆宗の胴に命中したが、雁又の矢先が刀と当って軽傷で済んだ。第二矢は兜の頂きに当って跳ねてしまった。隆宗は勝利を宣言し、理興は約定に従って出雲に去った。

というのである。ここにもう一つ、目黒秋光という出雲武士の件がからむ。

秋光は尼子晴久から理興救援を命ぜられ、兵士五百人を連れて出雲を出発したが、途中で理興に出会い、事情を知ると憤懣に絶えず「主君に必ず勝つ、と広言したので出雲には戻れない。神辺城で武士の意地を示す」と、只一人平賀の陣に到って検使を頼み、城下の禅寺に入って切腹した。

とあり、その墓が今も神辺の龍泉寺に残っている、と記してある。

このふたつの挿話は何を物語るのであろうか……。余りにも講談じみた筋書からか、または『平賀家譜』を絶対視するためか（私もそうであったが）、現代の歴史書が俗説として無視するこの物語には、事実のか

けらもないのであろうか！。私にはどうしてもそうとは思えない所が出て来た。そこを少し掘り下げてみたい。

#### 一、目黒秋光の件である。

彼の墓と伝えられるものが神辺町の龍泉寺に現存する。こごめ石製で、幅約九〇cm、高さ約八〇cm、元は石屋根や石扉の付いた、「くど墓」といわれる形式の立派な墓である。出雲から特別供養に遣わされたという僧の碑もある。初め会下谷にあつたが、福島家の時、寺の移転と共に現在地に移したようだ。当時から秋光の墓として有名だったのであろう。目黒秋光は実在し、確かに切腹したのである。

#### 二、神辺城は堅城であつた。

各資料によれば、天文一二年（一五四三）以降、大内連合軍の数度の猛攻、総攻撃に六年間も耐え抜き、その間、天文一六年（一五四七）には坪生要害等の外部を失つた後も二年余も持ちこたえたのである。それが兵力激減した平賀一党相手に、簡単に落城したとは思えない。目黒秋光の来援情報もあつたであろう。むしろ悠々と城を出る理興軍に平賀一党は手も足も出なかつたのではな

いか、と推理できるふしがある。

#### 三、平賀隆宗は死亡したとはいえ、一党を以て六年間も抵抗した神辺城を攻略して尼子方の備南拠点を粉砕し、大内方の備中進出にも道を開いたのである。この抜群の功績に対して大内氏は恩賞を約

束したように思える。神辺城の管理権は確かに平賀家に与えた。

が、その代りに（？）隆宗の夷弟、新九郎に家督を許さず、義隆の寵臣で平賀氏とは血縁のない小早川隆保を養子として送り込んだ。これは不思議な事である。これが功績に対する恩賞といえるであろうか？当主が死して跡継ぎがなければともかくとして、立派に成人して兄と共に神辺城を攻めた夷弟の新九郎を差し置いての養子相続とは……。祖父弘保を始め一族は血統の断絶に騒然となった事であろう。だが、大内氏に反論は出来なかった……。それはこの戦いが正常のセオリーの勝利ではなく大内氏の心証を著しく害した、と推定できるからである。

私は隆宗が重傷を隠して勝利宣言を行い、旬日の内に死亡した、と考える。必ずしも系図や家譜が正しいとはいえぬ。これも又史家の実証する所である。

大内氏はこの重要な戦いで博奕のごとき方法を用いた平賀一党の軽率さを嫌ったのであろう。その理由は万一逆の結果になった場合の大内方のダメージの大きさを考えれば分かる。それに大内氏は都風の形式好みで、後年、武断派の陶隆房等の反感を得て亡んだ様に、勝つためには手段を選ばぬ、という戦国武士の心情は理解できなかつたと思うのである。

まだまだ論点は沢山あるが、ここは一応これで停めて、私が現代の説について以上の疑問を持つに到った。墓所の所でまた改めて述べてみ

たい。

とにかく、平賀隆宗は一族の期待を集めながら、その意に反した形で神辺陣中に二六歳の若き命を散らしたのであった。『平賀家譜』には隆宗の死亡の真相を勝利に結び付けて公表できない無念の涙が隠されている、と私は思うのである。

#### ◎頭崎城跡

東広島市高屋町、安芸の国分寺跡が残り、また、国府の跡の推定される西条盆地の北東部一帯が、その平賀氏一族の本貫の地とのことである。その高屋町の北部、河内町との境近く山なみの続く中の最峻峰（五〇四m）頭崎山がその城跡であった。

眺望良好で、高屋町全域はもちろん、遠く西条盆地全般、竹原方面も見渡せる。現在は公園として整備されて、三の丸まで車で登ることもできる。

頂上は逆台形で、広い甲の丸、帯曲輪を間に南に下って南北に長い二の丸、南東に十数m下って頭崎神社を祀った三の丸、この社は大永五年（一五二五）大内軍と戦って勝利したことを記念して招請した、との事である。たぶん先祖の藤原氏の守護神、春日神ではなからうか（平賀氏には源義光の系統で、小早川氏の事実上の先祖・信濃平賀氏もあるが、高屋平賀氏は藤原氏との事である）。

三の丸から南に一段上って太鼓丸、三の丸から今度は西南に下って煙硝場がある。その付近一帯は大巖壁が形良く露出して、古代の祭祀

場「巖座」を思わせ、エンシヨウ場は築城以前からあった山岳信仰に關係する「禪定」場の転化ではなからうか。この辺りはその様な雰因氣がある。また、郭の中央に累々と重なった岩石に明治神宮が祀られていたが、これは近代の事であって、昔の神は枯却されたのである。

なお、注目すべきは、この城は湧水豊富で井戸の必要はないとのことであった。

さて、資料によると、頭崎城は大永三年（一五二三）頃、第一五代平賀弘保が主城として築いたが、当時、尼子幕下にあったので前述の如く大内氏の攻撃を受けた、との事である。弘保はその後の城に長男の興貞を置いたが、大内、尼子と揺れ動く乱世の中で、白山城に残った弘保との間に「御父子御取合」と呼ばれた、骨肉の戦い五年間の後、天文九年（一五四〇）に至って、興貞が出家して竹林寺に隠棲し、興貞の長男隆宗を城主に立てたのである。だが、その隆宗が前述の様に、天文一八年（一五四九）、神辺陣中に死去し、大内義隆の意向で小早川隆保が養子として入城した。

ところが、天文二〇年（一五五一）陶隆房の謀反によって大内義隆が自殺すると、さっそく陶派の毛利氏に攻められ、平賀弘保の頭崎城は初めて落城したのであった。

同城は南を正面とし、東西とも堅固だが、西北は緩やかな鞍部を隔てて大将陣と呼ばれるピークがある。天文二〇年（一五五一）の戦いの毛利元就の陣所との伝承があるとの事だが、この辺りが同城の弱点と私にも思われるのであった。

さて、その後はめでたく隆宗の弟の新九郎が継いで、毛利氏の幕下に入り、以後この城での戦いは途絶えたのである。

「人間万事賽翁が馬」の格言を地で体験した祖父弘保は永禄元年（一五五八）、八四歳で没したそうだが、満了した事であろう。まるで内訌のための築城の様でもあるが…。

### ◎御園宇城跡

頭崎城跡の西南約三Km、高屋堀にその城跡はある。

北から張り出した低丘陵を切断し、南端に東西約一〇〇m、幅二〇m前後の第一郭、一段上って約六〇mぐらい、ほぼ方形の中心部、それを馬蹄形に高さ四〜五mぐらいの土塁で囲み、土塁の上幅も五〜一五mぐらいの長大な郭とした珍しい構造である。土塁の北、堀切に面した菱形の郭もあるらしい。比高は二〇mぐらいである。この特異な構造の故か早くから有名な城跡で、私なども平賀氏の事はほとんど知らないのに御園宇城の名称だけは知っていて、見学したいと常々思っていたのであった。

諸書の説明の中には、鎌倉時代の典型的城跡という向きもあるが、私の見学の感想を独断でいえば、この辺りの鎌倉期の城跡は丘の末尾を切断して削平した単純な構造が大部分なのに、当城は防備を十分に考慮し、相当の兵力が籠ることを前提にした縄張りで、戦いの経験を積んだ、南北朝頃の築城か、またはその頃の遺構に大改修を加えたものと考ええる。

果たして、室町期の初め応永の乱（一三九九年、大内義弘が堺で挙兵

し敗死)の後、安芸守護の交替を巡る戦いで、当城に拠る、第一〇代平賀弘章は反守護の大内盛見に味方し、応永一〇年(一四〇三年)から三箇年もの激戦・籠城に耐えたとの事である。見掛けによらぬ堅城なのであって、以後、文亀三年(一五〇五)第一五代弘保が、白市に白山城を築くまで百年余に渡る平賀氏の拠点となったのであった。

#### ◎伝平賀氏墓地

御園宇城の北西一〇〇m、平賀氏初期の居館の可能性が高いという、明道寺跡という所に数十基の五輪塔や宝篋印塔が整然と並ぶ様子は見事であって、平賀氏の歴史と由緒を物語るものでもある。

その西端近く一際大きく立派な宝篋印塔は「天巖」と陰刻してあって、前述の隆宗の墓との事である。その南のやや小振りの宝篋印塔は「眞岳」と陰刻があつて、隆宗の祖父弘保の墓との事。

隆宗より九年後の死去で、白山城及び頭崎城を築き、時代を的確に読み取つて、大内、毛利路線を揺るがず、当主の新九郎を盛り立てて平賀氏全盛につくした弘保の墓が前代より立派な事は頷ける。

しかし、弘保より九年前、神辺陣に死去した血統交替の元となった孫の隆宗の墓がさらに立派で、伏鉢等の形から建立年代も新しい事が何とも不思議で、眺めるうち、現代の史書が無視する『陰徳太平記』等の記述は相当の真実を持つのではないか、との疑問が湧いて来た。それが前段で提起した論点なのである。

そこで、最後に墓石について私の仮説を記してみたい。

本来なら血統の交替になった平賀隆宗の神辺陣中の死、一族の期待と伝統を裏切る結果となった事態と、大内氏や養子隆保への遠慮から墓は小さかったはずであるが、間もなく偶然ともいえる大内氏の没落と毛利氏の決断に助けられて、血統は回復された。やがて祖父弘保が死去し、十数年後、毛利元就もまたこの世を去った。

隆宗死して二十余年、当時を知る者も少なくなつた。毛利氏の中国制覇は着々と進み、平賀氏もまた全盛を迎えると、一転して神辺城攻略の意義が再評価されてきた。天文二〇年(一五五二)の志川瀧山城における毛利氏の勝利も、これなくしてはなかつたかも知れぬ。

武門の若き頭領隆宗が自らの命をかけて、戦線膠着の打開を計つた矢の対決が、武勇の物語りとして正答の評価を受ける時代となつたのである。一族は隆宗を誇りとしたであろう。毛利氏もまた異論は挟まなかつたであろう。立派な墓に建替えられても不思議な事ではない、墓石の様式が新しいこともまた当然の事なのである。

(注) 参考資料は『広島県の主要城跡』芸備友の会編記述及びバス例会

見学資料

一九九四年六月



# 温羅伝説を推理する

松岡 正

## ◎温羅伝説

むかし、異国から温羅と呼ばれる鬼神が、空を飛んで吉備へやって来た。彼は百濟の王子であったともいう。彼は鬼ノ城を造り、そこに住んだ。温羅は力が強く、凶暴であった。時々、ふもとの村を襲い、食物を略奪する。村人は都にその暴状を訴えた。朝廷は吉備津彦命を討伐に向かわせた。命は吉備の中山（吉備津彦神社から北東の小山）に陣を構え、進んで片岡山に石の楯を立てて戦鬪に備えた（楯築遺跡）。いよいよ戦いが始まって、お互いに矢を射かける。しかし、その両方の矢が空中でぶつかり、温羅に当たらない。空中で衝突した矢は地上に落ちる。その場所が矢喰神社の附近だという。そこで命は一計を案じて、一度に二本の矢をつがえて発射した。この作は見事に成功した。一本の矢は前のように空中でぶつかったが、もう一方の矢は温羅の左の目に突き刺った。目から大量の血が流れて川になる。それが血吸川である。

さすがの温羅もたまらず鯉に変身して血吸川に姿をくまますが、命は鵜になってこれを捕らえた。鯉喰神社は、その場所であるという。命は温羅の首を切った。温羅は首だけになっても、いつまでも大声を発

し、唸り響いて鳴りやまない。命は吉備津彦神社の釜殿の〴〵へついで〴〵の下に埋めさせたが、唸り声はやまなかった。ある夜、命は温羅の夢を見た。温羅は次のように告げる。「自分の事は釜殿で神饌（神への供物）を炊かせて欲しい。そうすれば、年中唸ることはやめる。もし世の中に何か起こったら〴〵へついで〴〵の前に来て欲しい。幸なら裕かに鳴り、禍なら荒らかに鳴ろう」と。

（末尾記載の引用文献①。以後、文献〳と略記する）

これが吉備津彦神社の釜鳴神事の由来であり、現在も総社市阿曾（鬼ノ城南東のふもと）出身の女性が、この神事を行っているという。

備陽史探訪の会は、二月（平成六年）に鬼ノ城と楯築遺跡を中心として吉備路を回って来た。バス例会「古代吉備王国の謎を探る旅」である。私も参加して遺跡のミステリーを満喫して帰ってきた。家に帰ってから、車中で配布された「例会資料」（文献②）を丁寧に読み始めた。七森・平田両氏の著述は克明である。

しかし、読了後の私には何かひっかかるものがあつた。やがて、それは楯築遺跡の〴〵木柵施設を伴う組み合わせ式木棺（文献②22頁）〴〵という記事であつたことに気がついた。以下これについて述べることにする。

## ◎ 楯築遺跡

(1) 一月の中頃、私は畏敬する八木敏乘先生（古代祭祀・積石塚の研究者。元会員）から、申敬澈教授（韓国の考古学者）の講演コピーを頂いた。それは、一九九〇年以降、釜山附近の古墳を申教授が発掘した結果をもとに発表したもので、その要旨は「伽耶の古墳は木槨墓である」ということである。

「木槨」とは棺を入れる空間（槨）が木材で作られたもので、発掘時点では腐食してほとんど原形はなく、痕跡からそれと判定される。注目すべき点は、楯築遺跡の木槨痕跡がわが国で初めて検出されたものだという点である。

申教授は釜山附近（朝鮮半島南部にあった古代の国「加耶」、『日本書紀』では任那日本府と称している）の古墳を木槨の特徴から年代別に区分している。その中で、楯築墳丘墓の木槨墓に対比される文を以下紹介する。

「Ⅰ類の木槨墓は床面に何も施していないⅠ類a型、床面に板石状の割石を敷いたⅠ類b型、床面に礫石を敷いたり等間隔に石を敷いて棺台にしたⅠ類c型にの三つに分けることができます。（中略）出土品から見ますとⅠ類a型は四世紀の前半、Ⅰ類b型は四世紀の後半、Ⅰ類c型は五世紀の前半だろうと推定されます。」（文献③6頁）

これを文献②28頁64図で見ると、楯築墳丘墓は教授のいうⅠ類a型に相当すると思う。また、教授は「考古学の資料の中で、他文化の影響の中に於いても最も変わらず、その伝統を強く保つのは墓制です」と述べて

いる。だとすると、楯築墳丘墓は加耶族が吉備へ移住して造ったと考えられることも可能であり、その年代は四世紀前半以降になる。

(2) 次に地名をみる。文献①によると、

「吉備津神社は古代の行政区分では備中の国賀夜郡に所在する。この賀夜郡地域に本拠をもつ伝統的有力氏族に賀夜氏（香屋・蚊屋・賀陽とも書く）がいる。その「カヤ」の氏名から朝鮮南部の加耶地域からの渡来氏族ではなかったかという説もある」  
とあり、さらに、次のような記述もある。

「寛平五年（八九三）の頃の賀陽郡の長官である大領の地位は賀陽豊仲であり、吉備津彦宮の神官は弟の豊恒であった」（文献①92頁）

(3) 以上から、足守川下流一帯は加耶からの渡来人が住んでいて、その氏族首長の一人の墓が楯築墳丘墓ではないかと、私は推測する。ここで、誤解のないように付記するが、この地域のすべてが、加耶人だとは考えていない。先住氏族がいて、その頂点に新技術をもった為政者としての加耶族がいたと考えるのである。後述の温羅も同様に理解してほしい。

## ◎ 鬼ノ城

私は、鬼ノ城の原形は神籠石系山城であり、のちに再構築したものと考えたい。その石垣は戒壇積み、重箱積み、布積み、牛蒡積み、神籠石状列石など様々な築城法をとる（文献①72頁）。多様な石積みがとられていることは、神籠石系山城を後年、再築・改築したものと考えるのが自然ではないかと思う。なぜなら、一部分ではあるが、神籠石状の列石

がはつきり残っているからである。

鬼ノ城について文献から判ったことを列記してみる。

1. 『和名抄』によると、古代の所在地名は備中国賀陽郡になる。

(文献④)

2. 「ウル」とは朝鮮語で包容式の山城の輪郭線を示すものであり、伝説の温羅はそれに由来するのではないか。

(文献①71頁)

3. 斯学の第一人者、向井教授によると、山城の出現時期は現段階では七世紀中葉とするしかない。

(文献⑤44頁)

などである。

#### ◎温羅

天智天皇二年(六六三)、日本の援軍はむなしく白村江で大敗する。

百済最後の王城・扶蘇山城は新羅・唐の連合軍に攻められ落城し、百済はついに滅んだ。三千人の官人は白馬江へ身を投じたという。そのあとについて『日本書記』は次のように記録を残している。

天智天皇四年(六六五) 百済の百姓男女四百余人を近江の国神前郡に居住させた。

天智天皇五年(六六六) 百済の男女二千余人を東国に居住させた。

この人々は、百済滅亡から三年の間、政府の食を賜わっていた。

私はこれ以外にも多くの百済人がいて、その中には東国行きを拒んで西国へ集団移住した者もいるのではないかと考える。その中のある百済



鬼ノ城を望む

集団の指導者の一人が、吉備の温羅ではなかったと想像するのである。彼らは吉備に着いたが、沿岸部には先住の賀陽（加耶）族がいた。やむなく、彼らは足守川上流の阿曾附近に住居を持ち、背後の新山に鬼ノ城を造った。それは、新羅・唐との戦いに破れた苦い経験から、いざという時を想定して造ったのだと考える。

### ◎吉備津彦命

吉備津彦について郷土史家、村上正名先生は、「吉備国の初現の統治者であり、この人物を天皇の皇族とする伝承を作ったと見られる」

（文献⑥22頁）

と述べられている。私も同様にみる。冒頭の温羅伝説では省略したが、この伝説は第一〇代崇神天皇の御代の四道將軍の一人、山陽道は派遣された吉備津彦（七代孝靈天皇の皇子、彦五十狹芹彦命）のこととされる。他方、百済が滅亡したのは三八代天智天皇の頃であり、年代がまったく合わない。私は伝説上の吉備津彦を賀陽（加耶）族の武將と考えたい。

### ◎榎築遺跡

温羅伝説に登場する主要人物・事物について、だいたい私の推理を語ってきた。したがって、私の考えるストーリーを再現することは省略して、榎築遺跡についての感想を述べて小論の終わりとしたい。

榎築遺跡でまず一目を引くのは、巨大な立石が墳丘上にある榎築神社を取り囲んでいることである。まさに神秘そのものである。しかし、古

墳の上に神社を置くのは福山附近でもよく見られるので、いつの頃か、神社信仰で石祠が置かれたものであろう。

問題は巨大な立石である。氏子代表の楠強氏はもとは二七本あったという。私も神域を示す磐境と考えたい。それにしても、まさに古代の神の依り代を思わせる磐境だと思う。

石祠の御神体には、もとの榎築神社の鳥居にあったと思われる、「榎衝神社」と記された石額があった。その書体は篆書体に近く、あるご婦人（お名前を存せず失礼）の判読である。おそらく以前は榎衝神社と記していたのであろう。

御神体の亀石（重要文化財）を収蔵庫で間近に拝観させて頂いた。以前ならば、国宝ともいわれるものである。「国宝」を今まで手に触れたこともなく、今後もないであろう。

例会を計画された七森・平田両氏に厚く謝意を表してこの推論を終わる。また、多くの文献を引用させていただいたが、末尾に記して謝意に代えたい。

### △引用文献▽

- ① 「図説 岡山県の歴史」近藤義郎編（河出書房新社）
- ② 例会資料「古代吉備王国の謎を探る旅」七森義人・平田恵彦編著
- ③ 「巨大古墳と加耶文化」西嶋定生他共著（角川選書）
- ④ 「日本城郭大系 十三」（新人物往來社）
- ⑤ 「古代学研究 第一二五号」向井一雄著
- ⑥ 「備後の社寺」村上正名著

# 箕島二千年史

小林 定 市

はじめに

箕島町は、福山城の南方約六Kmに位置し、東にNKK福山工場、南は瀬戸内海と鞆町、西は芦田川を介して水呑町に接する町で、江戸時代は水呑村に属し、島の周囲は約四七〇〇mであった。

芦田川より吐出された土砂が堆積して新開が増大したことから、福山市街地と陸続きとなり、島の周辺部は干拓が進み、埋立用土石の採取で山容は変形し、工業団地・宅地造成も進み、従来島の人々が漁場としてきた新涯町・鋼管町・箕沖町は臨海工業地帯となり、都市型産業は日々増している。

しかし、戦前迄は白砂青松の海岸で素晴しかった風景と、魚の宝庫であった海は破壊され、再び旧観を取戻すことはできないであろう。

## 弥生・古墳時代

箕島に何時頃から人が住み始めたのか定かでないが、縄文時代以前に人々が住んでいた痕跡は、まだ発見されていない。しかし、弥生時代に

なると、朝鮮半島より伝来したであろうと考えられている、弥生時代前期末の細形銅剣（軸部が折損、長一・五cm）が出土している。

また、水呑町から熊ヶ峰の山頂を越え、山を下った熊野町の熊野神社の裏山からは中期中頃以後の平形銅剣（全長四五cm）二本が出土している。

古墳時代になると、箕島には多くの古墳の築造がみられ、茶山の古墳群は一五基を数え、その中の主墳（釜屋一号墳）から、明治四十三年（一九一〇）に発見された市重文の金銅製単龍環状柄頭は、六世紀後半頃の作と推定されているものである。環頭の起源は中国で、龍は中国の戦国時代に、四方の守り神として生れた空想上の動物であって、環状柄頭の龍の装飾は、今にも天に昇るかのように雄々しいもので、環状の部分は龍の胴体を表現したものである。

戦前、箕島町の人による埋蔵文化財の調査と、その他の諸記録を総合すると、次のようになる。

1. 弥生時代・福禅寺谷、出土品細形銅剣。
2. 〃 福禅寺谷西、石棺・副葬品。1、鉄刀。2、石斧。
3. 古墳時代・五八mの茶山の主墳（一号墳）横穴式石室・高サ直径七尺

石室の間口・奥行三間、副葬品1、金銅製単龍環状柄頭。

2、須恵器。3、勾玉。4、鉄刀（金鏑）。

4. 古墳時代・古墳。福禅寺西、石室間口・高サ共六尺、奥行七尺。副葬

品鉄刀。

5. 古墳。釣ヶ端、石室間口一間、高サ四尺、奥行一間、副葬

品。1、須恵器十二ヶ。2、鉄刀。

6. 古墳。巢の脇、位置不詳。（古老の話）

7. 貝塚。釜屋東斜面の海岸、遺物須恵器。

8. 時代不祥・釈迦の端、大正九年頃石棺を発掘。遺物。1、人骨。2、

（弥生古墳）鉄刀。その後石塚を造り石棺を祀る。

9. 阿伽、石棺。明治四十年頃石棺を掘り出す、以後不明。

古墳時代から江戸時代迄の、箕島地方での推移を示す史料は、まだ明らかにはされていない。

### 長和庄と平教経陣屋伝説

田尻町の北半分に、本郷の地名が残されていたのであるが、本郷とは、沼隈半島東南部で最初に開け、付近の発展の源と土地に付けられる地名であることから、古墳が多く残されていた田尻町北部と箕島町は、古墳時代以後も引続いて繁栄したようである。

箕島は、長和庄内に含まれていたものと考えられるが、長和庄の領家悲

田院は、天正元年（一五七三）、織田信長の京都上京焼打で焼失し、長和庄東方地頭の田総庄長井氏にも長和庄支配文書が残されていないことから、水呑・箕島・田尻の中世の解明は進んでいない。

藤原北家正三位葉室顯頼は、保延の頃（一一三八―一一四〇）興善院を建立し、第七四代鳥羽天皇ゆかりの御願寺安楽寿院に寄進している。顯頼の二男、藤原惟方（当時勘解由次官）と、惟方の姉で藤原季成の妻であった民部卿三位局は、仁平元年（一一五一）に一七ヶ所の所領を興善院に寄進している。この一七ヶ所の所領群の中に長和庄が含まれていたことから、長和庄が成立するのは仁平元年のことである。

鳥羽天皇の第四王子である、第七七代後白河天皇に、第一王子の二條天皇が誕生したのが康治二年（一一四三）で、同年に顯頼は三ヶ所の所領している。

次いで、民部卿三位局の娘、藤原成子と後白河天皇との間に第二王子である、以仁王（八條院の猶子）が誕生したが、一七ヶ所の所領が寄進されたと同じ仁平である。この康治二年・仁平元年と二度に亘る興善院への所領の寄進は、何れも、後白河天皇の王子誕生年と一致することから、王子誕生を祝って行われた所領寄進であったと考えられる。

葉室藤原氏が所領を寄進した狙いは、引続いて貴族として権力を保持するための方策だったようで、以後、長和庄は八條院領として伝領され、歡喜光院領に寄進されたのは徳治元年（一一三〇六）のことで、延慶元年（一一三〇八）閏八月、後宇多法皇は所領（長和庄を含む）を東宮尊治親王（第九六代・後醍醐天皇）に譲与されるが、南北朝時代、南朝方が弱

体化したことで、歡喜光院領は失われて行くのである。

長和庄に地頭が設置されるのは、後鳥羽上皇が、北条氏追討の宣旨を全国に下した承久の乱（一二二一）後の出来ごとで、長和庄の庄官は、後鳥羽上皇方に味方し、討幕の企に参加したことで、乱後所領は幕府に没収され、戦功のあった御家人、長井時広に地頭職が与えられたようである。また、長和庄地頭職が東西に分割されるのは、蒙古襲来の前年文永十年（一二七三）のことで、幕府が蒙古の来襲に備え、応戦の準備をしていた時期であることから、幕府の鎮西・長門防備に関連して、長井氏も後方の拠点作りの分割と考えられる。

「平教経の陣屋が箕島にあった。」との通説が伝えられているが、もし、事実であるとなると、長和庄は平氏の所領であったことになる。

平氏の没落に際して、平家一門の所領や、平家与党人・謀叛人の所領は「平家没官領」と称して、鎌倉幕府に敵対した所領として、源頼朝は戦功のあった御家人に地頭職の名目で分与し、敵対者の土地を支配している。当時、長和庄は八条院関係領で、八条院の猶子、以仁王は治承四年（一一八〇）、源頼政に奉じられて平氏討滅の謀主となり、令旨を出す。すると、源行家は以仁王の令旨を東国の源氏に伝えるため八条院領を中心に動いていることから、長和庄は源氏系であって、断じて平氏関係の庄園でなかった筈である。

寿永三年（一一八四）二月七日、源義経が一の谷の合戦で平家を破ると、源頼朝は、十一日後の二月十八日に土肥実平を、備前・備中・備後の守護に補任する。翌三月二十五日には、実平は備中の国府で在庁の所

務をとっていることから、同日頃には備後でも実平は、備中同様支配権を保持したものと考えられる。

『平家物語』の「六ヶ度合戦」では、僅か十日間程の間に、平教経は西国各地で六回も戦って勝ったことになっているが、これはありえないことで、六回の戦闘を一つの時期に集めて書き全て教経の功績としたようで、実際に戦があったのは寿永三年七月ごろ、平氏が安芸国で土肥実平を相手に六回戦っている。

以上のことから平教経の軍勢が、屋島から箕島に押寄てみたもの、備後は源氏によって固められていたことから、備後での戦を中止し、安芸国沼田庄に転戦したと読むのが、物語の正確な読み方と思う。

#### 水野勝成の築城計画と福山城

戦国時代が終り、豊臣家から徳川氏に天下は移り、関ヶ原合戦後、芸備両国に福島正則が封ぜられるが、広島城修復の件で正則は改易となり、代って、大和郡山から水野勝成が備後南部一〇万石の領主として入部する。勝成は早速新城の適地を三ヶ所に絞り、第一候補地に水陸の軍事的要地箕島、第二候補地に野上村常興寺山として幕府の裁可を仰ぐ、勝成の計画は、大手を南部（水ヶ浦のあたり）とし、本丸を中央の高所に、搦手は（釣ヶ端新涯のあたり）埋立工事によって城下町を構成する計画であった。

幕府からは係官が出張吟味の末、「箕島は規模宏大なため、経営は容

易ならず」として不許可となったのである。その結果第二候補地の常興寺山の新城建設が確定し、築城は幕府の監督のもとに進められ、幕府は絵図面師として小幡勘兵衛、石垣奉行に花房志摩守と戸川土佐守を派遣している。また、幕府からの援助として、伏見城の遺構が下賜される。

従来、福山城に下賜された伏見城についての通説は、「文祿年間に、大閤秀吉の居城として築かれ、桃山文化の粋を集めた城」であったが、通説は疑問で、伏見城は文祿元年（一五九二）から、東山連峰の最南端指月の地に築城が進められた。ところが慶長元年（一五九六）閏七月十三日の京畿大地震で指月の城は崩壊し城中での死者は五〇〇人を教え、周辺の大名屋敷もほとんど倒壊したのである。

秀吉は早速城の再建に着手するのであるが、今度は場所を変え、指月より東北寄りの小幡山（伏見山）に慶長三年春完成。同年八月秀吉の死後は子頼秀が在城するが、翌年には徳川家康が入る。慶長五年関ヶ原合戦の勃発に伴い、家康の家臣が守る同城を西軍四方の大軍が猛攻し、激戦の後、同年七月三十日夜同城は、本丸・松之丸・名護屋丸・二之丸以下悉く焼失（言経卿記）『時慶卿記』『左大史孝亮記』して陥落した。戦に勝利した家康は、伏見城をそのまま放置せず、翌慶長六年、小堀政次を作事奉行に任じ再建に取りかかり、次いで、普請奉行に藤堂高虎を任命、大工棟梁中井正清も作事を指揮し、同年末には大規模な修復がなされ、慶長八年二月十二日、同城で家康の征夷大將軍の宜下式が行われた。

元和五年（一六一九）西国支配の拠点が大阪城と定まり、大阪城大修



箕島の初日の出（平成5年1月1日）



築が決定したことで、従来からの西国支配拠点であった伏見城は不要な城となったことで取壊され、本丸御殿は二条城に、隅櫓は大坂城・淀城・江戸城などに移される。

初代・二代と続いて將軍宜下式が取行われ、徳川幕府の権威の象徴であった伏見城は、二代將軍秀忠の命により、城郭の一部が福山城に移築され、幕府拜領の建造物群は福山城の南面大手門後方上の本丸に、東から月見櫓・湯殿（葵紋有）・本丸御殿（箱棟に葵紋有）鉄御門・伏見三階櫓の偉観が立並ぶのである。

## 箕島の山

村民の狩猟と伐木を禁止した領主の山を御立山と呼び、箕島の御立山は、一七二町八反（十八丁・八丁）藪一反（二〇間・十五間）があつて山番の給米として米三石がされていた。そのため楠等の大木が茂つていて大木の下にはしだが繁茂していたようで、水野勝俊は正保四年（一六四七）五月、深津沖新湟築堤の潮止工事に「箕島の羊歯しだ」を用いるよう命じている。

土手を築堤する際、干潟の軟泥の上に直接土砂を投入する工法では、軟泥は四散し土砂が埋没して効果が挙がらないことから、軟泥の上に羊歯を敷詰めその上に盛土をする工事のようで、特に潮止ともなると工事は難かしく大量の土砂を単時間に、軟弱な地盤に盛土する際は有効であった。

元禄十一年（一六九八）五月、水野家は継嗣断絶となったことから改易となった節、箕島の楠の大木や其の他の用木を、屋吹伝右衛門と三河屋勘藏等が伐採して売却したことで兩人は召捕えられている。

## 釈迦ヶ端

福山城西四町（現在の霞町）に、寺格が水野家の賢忠寺に次ぐ大淵山泉龍寺と称す曹洞宗の寺がある。

福山での開基は寛永七年（一六三〇）で、家老の中山將監重盛が願主となり、水野家の縁戚藤翁ふとう和尚が中山將監の請により同寺を建立する。

三代水野勝貞（明暦から万治の頃）は藤翁ふとうに帰依し、毎夜の如く呼出して話を聴いていたが、或る干魃の年、勝貞が「禪宗にも雨乞いの法あらば行え」と命じると、藤翁ふとうは海の難所箕島釈迦ヶ端岸下の前方二〇間先にあつた潜岩くろいわ（平俎まいたた・一之俎・長瀬俎の三ヶ所の暗礁）の上に結跏趺座して祈る。そのうち潮が次第に満ち唇に達しそうになった時、空は暗天となり落雷を伴つた豪雨となった。以後勝貞は益々帰依を深めていくのである。

藤翁の後任太白和尚と中山將監重盛の孫將監重澄・外の人が請を結んで、寛文九年（一六六九）春、釈迦ヶ端に釈迦の石仏を造立し、以後は、正・五・九月に般若経の転読が行われるようになるが、この転読が縁となり同地に、泉龍寺支配の金剛山般若院という庵室ができる。嘉永の頃（一八四八―一五三）寺社奉行に出された願書には次のように記されている。

恐れ乍ら書付を以て願上奉り候御事。

水呑村箕島の内釈迦ヶ端と申す処に、水野様御代に御家中並びに町場より、護穀成就並びに破船除けの為、釈迦の尊像を石仏にて御建立なされ、金剛山般若院と申す庵室を右の場所に御建立、御林の内四町（四三六m）四方を御添えなされ、当寺の支配に仰付けられ候。毎年二月十五日に御祈禱仕り候事に御座候。

近世初頭になると、福山湾内は、芦田川から流出した土砂が堆積し、次第に遠浅の海が拡がり、城下船入へ入港する大型帆船の航路が制限されて行く時期であった。

福山湾口の浅瀬の中に潮の干満時に潮が早く流れる底深い水路（漕筋）が箕島沖から福山船入に通じていた。釈迦ヶ端は丁度この漕筋に当り、干潮時に海上に頭を出していた潜岩も、満潮になると海中に没し魔の海難場所に変ることから事故防止のため、領主の大型船出入に際しては、水呑村は番船を出して暗礁の位置を知らせて安全を計っていた。

白石島沖に領主の船が帰って来ると、釈迦ヶ端に遠見番を置き、先觸れの船が帰ってくると烽火を上げて福山城に帰船を知らせ、箕島沖から福山座床迄水呑村の水先案内船が先達をする船役があった。

#### 箕島の鎮守楠神社

江戸時代の楠神社は、楠明神又は加茂明神と記載され、創建は明らか



箕島楠神社

にされていないが、天和三年（一六八三）には、神田三畝歩が認められており、明和の終頃（一七七二）になると、二間四面の社殿があり、神主は甚左衛門（小島）、禰宜は長和村の九太夫であった。また除地も増加し、社地二〇歩・神田三畝一〇歩・三林七反四畝十五歩であった。

以後、明治初年の頃になると栗ノ木谷に分霊が祀られ、その後、大正八・九年頃釜屋福禪寺西に続いて分霊を祀り、大正十一年になると地元南浦の氏神となる。

平成六年には、近代建築の立派な社殿が再建され、九月二十九日には、遷宮祭が行われている。

五〇余年前、私が登校する際観てきた箕島は、芦田川の沖合に浮く巨鯨（南が頭部で茶山が尻尾）で瀬戸内海の旭日に向かって力強く泳ぐ姿に似ている、と友達と話乍ら島を見ていると人生に対して希望もてた島であった。

その巨鯨も、開発によって満身創痍の島にと形を変えているが、確実に周辺部の重工業都市化は進み、限らない発展が約束されている。

# 野次馬根性のゆくえ

熊谷操子

どうにもならない心の苦しみに耐えかねて、社寺を片端から訪ねて、三年前のこと、ある日、枚方市にある日置神社に詣でた。二町歩という神域の広さにびっくりしながら、鳥居の側にある案内板を読んでいた。

祭神は天之御中主神と菅原道真。

惟喬親王が渚の院を中心として交野ヶ原で遊猟し給える時、ご自分の愛鷹の姿が見えなくなったので、日没を惜しんで、しばし日を止め置き給えと、神に祈願したという伝承から日置神社という。

とあった。私はこの神社名の由来を一応は素直に受けとりながらも、祭神が天之御中主神というから太陽祭祀の残映として、もともと日置をヘキと呼んでいたのでは……と思った。理屈はさておき、ご自分の愛する鳥のため、「もう少し暮れないで下さい」と神に祈る温かいお気持ちの惟喬親王とは、さて渚の院とは、と私の野次馬根性が頭をもたげ始めた。微かでもいいから、想像のよすがになりそうな事でも手繰り寄せることが出来たらと、そのときから気の遠くなりそうな詮索が始まった。

惟喬親王。号を小野宮、又は水無瀬宮。

五五代文徳天皇第一皇子（八四四〜八九七）であり、母は従四位下紀静子（三条院）正四位下紀名虎の女である。

親王帯劔年齢。一四歳。

天安元年（八五七）一五歳。

天安二年（八五八）太宰権師に任。

貞観五年（八六三）四品太宰師。彈正尹任。

貞観六年（八六四）四品彈正尹。常陸太守。離京。

貞観九年（八六七）四品彈正尹。常陸尹知故。

貞観一四年（八七二）四品彈正尹上野太处彈正知故。

貞観一四年（八七二）七月、四品守彈正疾頓出家為沙門。

貞観一六年（八七四）九月二一日、清和天皇から、封戸百戸を増給し、

衣鉢の費に当てさせる勅が出されている。

親王は承和一一年（八四四）、文徳天皇と紀静子（更衣）との間に生まれた第一皇子であったから、天皇の限らない鐘愛を受けていた。母を同じうする弟は第二子惟喬親王で、第三子惟彦親王の母は滋野貞主の女である。その後、嘉祥三年（八五〇）に天皇と藤原明子との間に、第四皇子の惟仁が生まれる（後の清和天皇）。

皇太子を定めるにあたって、文徳天皇は惟喬親王をこよなく愛していたので、当然皇太子にと当初は思っていたが、惟仁親王の背後に控える良房のことがあって決断出来なかった。古代の皇室では、次の天皇には別に長男でなければならぬという規則はなかった。

立太子をめぐって藤原氏と紀氏との間に当然競争が起こった。文徳天皇の母が藤原良房の妹という関係がある上に、紀氏の勢力は当時の藤原氏とは比べものならぬほど衰え始めていたので、終に勢力がものを言っている惟仁が皇太子に立てられた。生まれて僅か八ヶ月であるのに。この時惟喬は七歳であった。

当時の童謡に、「大枝を超え走超えて、騰がり躍どり超えて、我が護る国にや捜あさり食む志岐や、雄々伊志岐耶」とうたわれたという。大枝は三人の兄をさし、惟仁を勢のある鴨になぞらえ、田んぼの食物もあさり求めとってしまったように、惟仁は三人の兄をこえて皇太子となった、というものである。

当時、紀名虎の一族はどうしても惟喬を立てようとし、僧真濟をして秘法を修して祈祷させ、藤原氏は僧真雅を惟仁の護持僧として祈らせたという話がある。ちなみに僧真濟の姓は紀氏である。

また、藤原良房と紀名虎とが、相撲をとって勝負をつけたとも伝えられている。なんと単純な発想と、私は思わず苦笑した。「平家物語」や「源平盛衰記」にもすさまじい話がある。

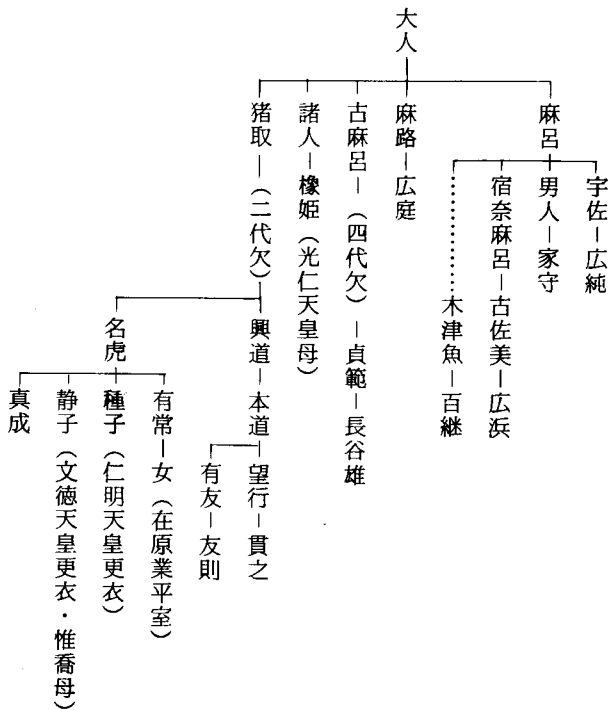
それでも文徳天皇は諦め切れず、この後も源信（嵯峨天皇の皇子）に相談している。信は天皇を諫め、惟仁に罪や落ち度がなければ、これを

廃する事が出来ないと奉したので、やっと思いとどまれたという。

外戚の力の差が惟喬の運命をコロッと変えてしまったのだ。

当時の貴族にとって、天皇の外戚となることはこの上もない名譽であった。貞観八年（八六六）摂政となった良房は、人臣摂政の初めての例を作ったのだ。しかし実質的には、文徳天皇の死によって九歳の惟仁が即位して清和天皇となった時点で、もう摂政であったと言っても過言ではなからう（この時、惟喬一五歳）。良房にとっては、政治を行う上に

奈良・平安時代の紀氏略系図（その一）



も何かと便利にもなっただろうから、最高の望みが得られた事になる。

天皇継承筆頭候補にありながら、母方が紀氏であるため、天皇外戚を固めつつあった藤原氏にその運命をはばまれた惟喬の哀しさは、最初から政治的欲望などなかったことにあると思う。赤銅色に跳躍する野心の持ち主などではなく、自然に親しむ優しい人柄であったと私は想像する。

### 渚の院

藤原氏の思うままになってゆく世の中に無常を感じた惟喬は、水無瀬と渚の院に別業（別荘）を設け、花見に鷹狩りと失意を慰めていた。私はどうしても渚の院跡をこの眼で確かめたくて足を運んだ。京阪電車の御殿山駅で下車して、旧村落の家並に混って新興住宅が群立している道を十分ほど歩くと、渚元町の渚之院会館がある。その裏手の保育所との間、ごくごく狭い空き地が目指す跡地である。なるほど、渚の院跡と刻んだ八〇センチほどの石碑が立っていた。そして、後世に建った観音寺の鐘楼だけがポツンと残っていた。往時を偲ぶすがは何一つ残っていない。

当時、この院には千本の桜がそれぞれに色を競い、中庭の梅もこよなく美しく、駒止め松などの名木もあったというから、相当豪壮な別業であったと思う。その頃淀川の川巾は現在よりもっともっとと広く、この院の真下まで水があり、往来する船が美しく水尾を見せていたと言う。反対にその淀川から望むと、院の丘に茂る樹々も、えも言われぬ風情を添えていたとか。

陰湿な皇位継承争いに破れた惟喬の気持ちは、この場所で随分救われ

たのではないかしらと、当時の景色を臉の中で描き想像してみた。

承平五年（九三五）、紀貫之が土佐国からの帰途、淀川をさかのぼって帰京した時、この一幅の絵を想わせる渚の院のたたずまいを土佐日記に描写している。当時、建物は残っていたかどうかは分からないが、ずっと後世に観音寺に改めたのだから、荒れてはいても貫之が見た時は、建物の一部ぐらいは残っていたのではないかと私は勝手に想像している。言わば、自分の先祖でもある惟喬の住んだ家という先人観もあり、感懐



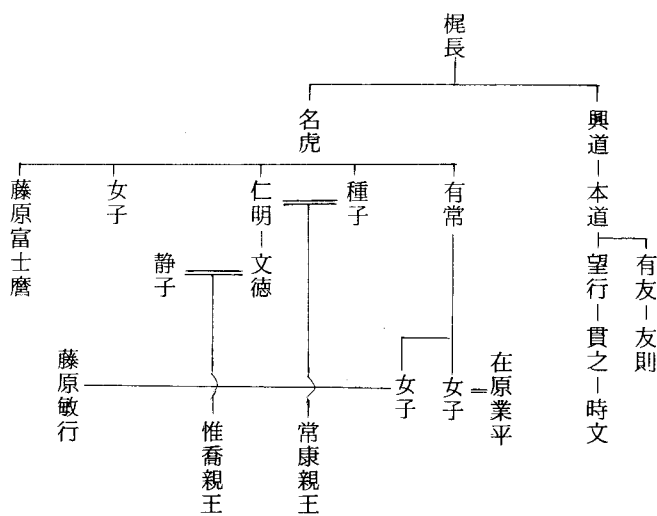
（大阪府枚方市渚元町「渚の院址」写真右）

も又ひとしおのものがあつたに違いない。

この素晴らしい環境の中で、惟喬とは特に親密な関係にあつた在<sup>あぢの</sup>原<sup>はら</sup>業<sup>なり</sup>平<sup>へい</sup>や、紀有常（惟喬の伯父）や、貴族や、他の文人達と共に遊<sup>あそ</sup>獵<sup>り</sup>に歌作りに興じた。

阿保親王の子である在<sup>あぢの</sup>原<sup>はら</sup>業<sup>なり</sup>平<sup>へい</sup>（平城天皇の孫）は、紀有常の女を妻としている。父阿保親王も、兄行<sup>ゆき</sup>平<sup>へい</sup>も配流の憂き目を経験している。しな

### 奈良・平安時代の紀氏略系図（その二）



りのある美意識を生きた武宮業平も、高貴な身分でありながら紀氏との繋<sup>つな</sup>がりのある点では、惟喬と境遇が似ている。二十歳の年下の彼を敬愛して右馬頭<sup>うまのかぶ</sup>としてよく仕えた心境も理解出来る。そして、

世の中にたえて桜のなかりせば  
春の心はのどけからまし

と歌っている。それは、世の中にもし桜が無かったら、桜の花が開くのを今か今かと待ち遠しく思ったり、又、風や雨に散ってしまうのでは、などど気にかかる必要もないので春の心はもつとのんびりするであろうと、悲運の皇子の胸のうちを桜花にたえて詠んだものらしい。

### 天の川

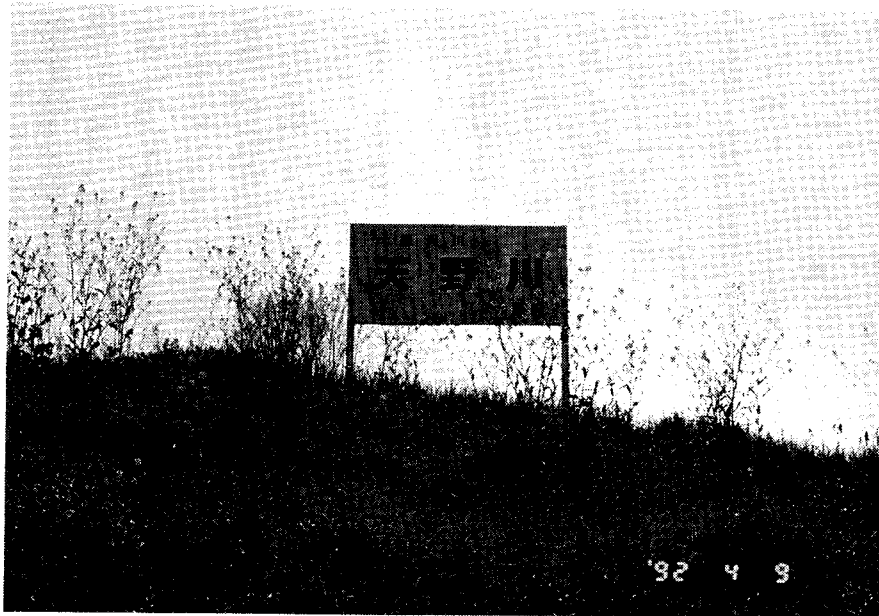
惟喬と業平はそんなわけでもとも気があつたらしく、しばしば近辺の交野ヶ原（現枚方市・交野市）へ遊獵に出かけたり、天の川のほとりで酒宴を開いたり、渚の院で夜明かして月見をしたり、酒を酌み交わして歌を詠んだりした。天の川で惟喬は、

狩りをして天の河原にいたるといふ  
心をよみて盃はさせ

と詠むと業平は、

狩り暮らし たなばたつめに宿からむ  
天の河原にわれは来にけり

と詠み、



## 天 野 川

ひととせにひとたび来ます  
君待てば宿かす人もあらしと思ふ

と有常が返し歌を詠んでいる。この夜、院に帰ってから月を見ながら歌遊びに興じた三人のことを『伊勢物語』八二段はくわしく書いている。この天の川には現在、かささぎ橋、禁野橋、天津橋がかかっている。天津橋には、中央のバルコニー部に高さ一六七センチ、幅一二〇センチのアルミ鋳物製の板がとりつけてある。それに光ファイバーを利用して、天の川・牽牛・織姫等を、白・青・赤・緑等さまざまな色のイルミネーションで照らし出し、ロマンチックな世界を醸し出している。当時の惟喬始め業平らが想像もし得なかつた橋に変身している。

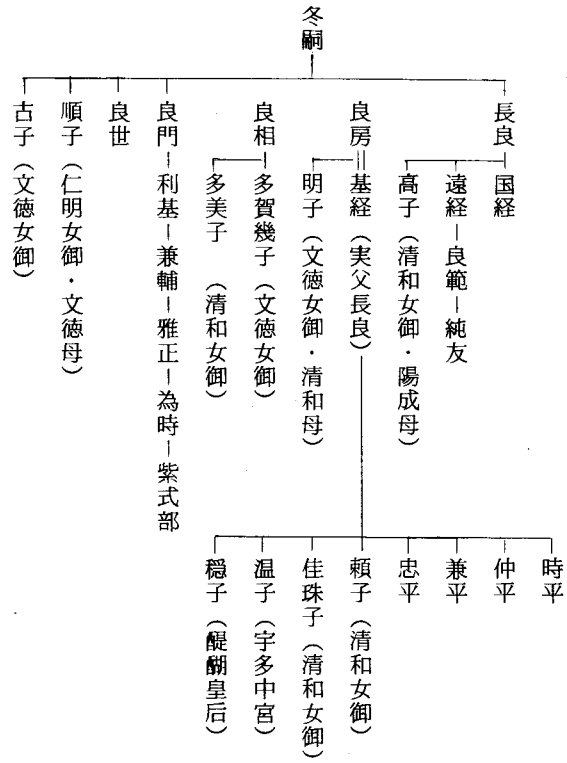
### 禁野

交野ヶ原（現、枚方市・交野市）の近辺一帯を当時は禁野と呼ばれていた。天皇や貴族達の狩猟地で、一般の者入るを禁ずるの意味である。この地を遊猟地にしたのは、京に近いことと、水辺の丘陵が起伏した風光明媚で、勿論、雉・鴨・鹿・猪が多かつたためである。現在、禁野という地名はそのまま残っている。

鷹狩の起源は五世紀の仁徳朝である。その後、一時廃止されたり、復活したりを繰り返していた。奈良時代までは遊びと考えられていたが、平安時代には武道として盛んになった。交野ヶ原では垣武天皇・嵯峨天皇など一四回も鷹狩りを楽しんでいる。



平安時代の藤原氏の略系図



雉塚

親王がいつものように狩りをして遊んでいられるとき、三つの足を持った白い雉が飛んで来て、どういはずみにかご自分の前で、その命を絶ったのでかわいそうに思い、薬師山の頂上に塚を造って葬ってやったという話がある。

その碑が現在、枚方市禁野町の和田寺にあることを知った。野次馬根性の私はじっとして聞かない。この寺の任職は歴史にくわしい人と聞いていたので、面白い話も聞かしてもらえるものと楽しみに出かけたが、その日は運悪く東京へ出張とのことで、問題の「三足白雉霊」と刻んだ碑のみ撮って帰って来た。裏の文字は残念ながら判読は難しかった。

安永二年（一七七三）に書かれた『河州交野郡禁野村医王山鎮守雉大明神因由記』によれば、「惟喬親王白雉の霊を祀る。雉大明神の神祠が建てられた」とある。

水無瀬

惟喬は渚の院と殆ど同時くらいに水無瀬に離宮を持ったらしい。夏は京都よりもずっと涼しく、滝もあり、四季を通じての景観も素晴らしい土地であったという。

水無瀬。この地名は古代から、水生野・水成瀬・水無瀬と変えて来た。淀川の流れと歴史の流れとが浮沈を共にして来たのだろう。その理由を私なりに想像してみる。

僧行基が神亀二年（七二五）に山崎津（水無瀬に隣接）に橋を造って

京に居る天皇や貴族達が禁野へ来る時は、鳥羽で乗船し、川を下り楠葉（継体天皇が居られた所）か渚あたりで上陸して交野へ入ったらしい。渚に別業を持っていた惟喬はその点大変便利であったと思う。業平らを連れて鷹狩に颯爽と出かけるガッチリとして長身のハンサムな惟喬の姿を、ひとりで臉に画いてみる私である。犬を走らせ鷹を放つて獲物を追う壮快なスポーツは、皇位継承のことなど、とつくに念頭を離して存分に楽しませたに違いない。

いる。恐らく度々の洪水に苦しむ農民の姿を見兼ねたのであろう。以後この橋を中心にして色々な事件が起きている。火事あり、秀吉と光秀との戦いあり、洪水のため橋が落ちたり、修復したりで、その都度都度なにかの形で水に異変が起きてこの地名を変えて来たのだろうと思う。

天皇や貴族達はこぞつてこの周辺の地に別業を建てている。天平三年（七三一）には行基が山崎院を建て、万事に派手好みの嵯峨天皇は立派な河陽離宮を弘仁五年（八一四）に建てている。水無瀬も遊猟の土地であり、交野ヶ原の中継地でもあったため頻繁にここを利用している。淳名天皇・光仁天皇も度々この離宮を訪れている。少し時代は下るが、後鳥羽上皇も離宮を建てている。

背後に丘陵が迫り、前面には淀川添いに低湿地が広がり、小動物や野鳥の宝庫とも言えるような狩猟場の水無瀬は、都が平安に移された時を機に別業地として賑わったとも言える。河陽離宮跡は現離宮八幡附近とされ、後鳥羽上皇の離宮跡地もはっきりしているのに、惟喬の宮跡は、京都府乙訓郡大山崎。大阪府三島郡水無瀬らしいとあるのみで、文書にもはっきり出て来ない。

業を煮やした私は自分の足で確かめるしかない、思い切つて現地へ赴いた。大阪駅から阪急電車に乗り換え水無瀬駅へ。さて、降り立つてもどっちへ向いて歩いてよいやら見当もつかない。まず、駐在所に飛び込んだ。

「大阪府立青年の家に歴史に詳しい先生が居られますから」と、丁寧にその位置を教えてくれた。青年の家のY先生は、「跡地の碑は聞いた

ことがありませんよ」と言いながら、「島本町史」その他を繰りながら時間をかけて調べてくれたが……。そして親切に関連事項のみを無料でコピーしてくれた。

ついでに一つ東寄りの大山崎駅にも降りて資料館に立ち寄った。ここは中世に秀吉と光秀が戦った場所であるから、その種の話なら色々の資料があつて調べられるが、こと平安初期となるとなかなかむずかしい。このY先生も、ロビーにある大地図に点灯していろいろ説明してくれた。けれど、嵯峨天皇に関する程度足跡も見えたが、私めが目指す場所は判然としない。業平らといつも行動を共にしていた惟喬は、水無瀬離宮は景色がよいのでここでは専ら歌を詠んで遊び、ほとんど宿泊のみに使っていたのだろう。この頃、山崎橋は騎馬のまま渡ることを禁止していたから、徒歩で渡ったか、それとも舟で淀川を渡り、ちょうど対岸にある渚に上陸し、交野ヶ原に遊猟に出かけたのではないかと思う。

その頃、京都の邸宅はまだそのままであるし、渚には立派な別業があることから、この宮はさして大きいものではなかったかも知れない。だから跡地が判然としないのでは……と自分で結論づける外方法はない。水無瀬で数日一緒に遊んだ業平は、例のように惟喬を京都まで送った。夕方京都の御殿で右馬頭なる業平に酒を振る舞った後、褒美をやらうと言つて、早く自宅へ帰らうと思つている業平をなかなか身辺から離さなかつた。そのお寂しそうな様子が気になつて業平は次の歌を詠んでいる。

枕として草引き結ぶこともせじ  
秋の夜とだにたのまれなくに

今は晩春で夜は短い時だから、長い夜のようにゆっくり出来ませんが、  
寝ずに一晩中お仕えしましよの意味らしい。

天安二年（八五八）、父文徳を失い、貞観八年（八六六）の二月に生  
母紀静子（名虎の女）を失っている。厚い帝寵を受けながらついに一介  
の更衣に終わった母静子の運命にも、万斛の涙をそそいだであろう。ち  
ようどそんな頃ではなかったかと想像する。業平を返したくなかった寂  
しさの刻は。

母静子の追善法要をその死後二年、貞観一〇年（八六八）に雲林院で  
営んでいる。雲林院には従兄弟にあたる常康親王が当時隠棲していた。

常康の母も紀氏の出で、仁明天皇の更衣、惟喬の母の姉である。

水無瀬神宮（祭神後鳥羽上皇）の社務所で聞いた話によると、その近  
くにある粟辻神社が惟喬親王を祀っているというのですぐ行ってみたけ  
れど、あまりにもちっちゃな祠で、これはどうも眉唾ものらしいと思っ  
た。近くの御所ヶ池は惟喬の御所から生まれたものだと言ってくれたが、  
私はこれも信用していない。

## 小野の里

貞観一四年（八七二）二月、上野守に任せられ、七月には四品彈正尹  
で、病気のため俄かに剃髪して出家。そして比叡山の西麓である小野の

里に陰棲した。法名を素寛といった。惟喬時に二九歳であった。その地  
名から、小野宮とも呼ばれていた。

貞観一六年（八七四）九月、清和天皇が惟喬に封戸百戸を増額して衣  
鉢の費（生活費）に当てさせる勅令を出している。これは、皇太子争い  
に勝って皇位を継承したから、気がひけたため償いをしたものと思う。  
けれども惟喬はこれをきっぱり辞退している。清和天皇は又あらためて  
封戸を受けるように勅令を出しているが、その結果は明らかでない。

右馬頭であった業平はある年の冬、雪を踏み分け踏み分けしながら、  
やっこの思いでこの小野の里を訪れた。何年かぶりに惟喬に会うのであ  
る。静かな山里で親王は寂しそうなもの悲しい様子であったとか。恐ら  
く死期が近付いていた頃だったのだろう。

忘れては夢かとおもふ思ふきや

雪ふみわけて君を見んとは

と詠んで号泣したとある。惟喬の返し歌は、

夢かとも何か思はむ

うき世をばそむかざりけむほどぞくやしき

あなたは夢ではないかと言っているが、驚くにはあたらない、今では私  
はもっと早く出家したらよかったと悔いているよ、という意味。

渚の院や水無瀬で過ごした楽しい想い出話に華を咲かせたらしいが、

そのときの惟喬の気持ちとしては、温かい慈母の懷に抱かれたような安らかなひとときではなかったかなと思う。楽しい刻を過ごしているうちに、夕暮れになってしまふ。公事のある業平は帰らねばならない。二人にとっては肺腑をえぐられるような苦しい悲しい別れであつたに違いない。

二九歳で出家してこの地に陰棲して、寛平九年（八九七）五四歳で亡くなるが、惟喬にとってどんなに寂しくて悲しい土地であつただろうと、その心境を推し量つてみる時、なにか胸衝かれる想いがある。

京都府の地図を広げてみると、小野という地名は沢山ある。いろいろの資料を調べていくうちに、惟喬が陰棲していた小野は、どうやら現在墓所のある京都市左京区大原上野町亀甲谷の辺りではないかと勝手に結論づけた。

どうしても一度その墓に参りたくて、八瀬大原行きのバスに乗つた。野村分かれのバス停を降りた時は、天気予報通りもうドシャ降りであつた。その上傘も飛びそうな風。足許は忽ちずぶ濡れになつた。さて、亀甲谷に入る道が分からない。向こうの方に大きい一軒家を見つけて走つた。そしてその軒へ飛び込んだ。ベルを二三回押したが応答はない。しばらく憎い雨足を見つめながら不安な刻を過ごしていると、いきなり玄関の戸が開き、

「なんだか人さんの気配がして、うちにお出やしたお人かと思つて。わたし今起きたんどつせ。一人暮らしいうもんは吞氣どっしゃろ」と、真新しい割烹着の似合う上品な女性が顔を出した。さりげなく時計

を見ると、十一時を指していた。目指す親王の墓を聞くと、親切丁寧に教えてくれた。

「四月半ばいうのに、今日はきつう寒うおすなあ。雨が上がるまで中へお入りやして掛けてお待ちやしたらどうどす。見たとおりの汚い所どつさかい遠慮はおへんえ」

言葉に甘え、中へ入らせてもらつていろいろ話しているうちに、年齢は八六歳、娘夫婦が山科に居ること、この家には五〇年も住んでいること等が分かつた。とりとめもない事を話しているうちに雨はいよいよやながら上がった。お礼をいつて暇を告げると、

「遠くからお出やしてお疲れどつしゃろ。お帰りにもう一遍寄つておくれやす。熱いおぶなど入れまっさかい。身体を温めてお帰りやす。ほんまに。なああんさん」

この老婆の暖かい京言葉には、京のぶぶ漬けは絶対になかつたと今も信じている。

四月でこの寒さ。業平が雪の中を訪れた時の比較おろしはどんなに寒かつただろう。

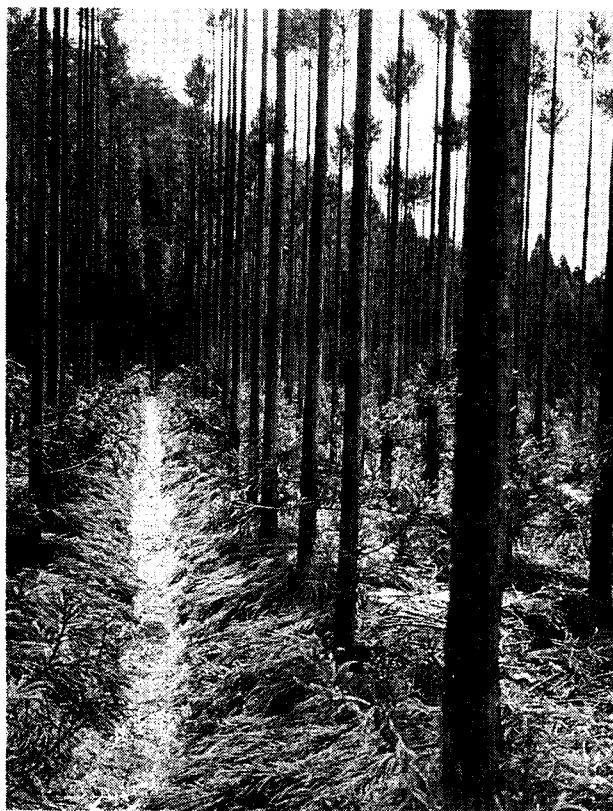
墓所の石段は相当高く、宮内庁の制礼は遙か上である。上り口の側にある山椿の赤が心なしかうるんで見えたのは強ち雨のせいだけではなかつたと思う。その一段一段に足跡を刻みつけるように登つた。ところどころに杉の実が落ちていてソツと拾わずにはおれなかつた。行き届いた掃除は私をホツとさせたが、詣でる人もあまりなさそうな五輪塔が、何故か寂しそうに感じられてならなかつた。立ち去り難い想いで墓の下に

(京都市山科区小野、惟喬親王の五輪塔 写真左)



眼をやると、真下は割合広く平坦な美しい土地であった。ひよっとすると、この場所に御所があったのではないだろうか、ひとり想像逞しゅうしてみた。その真下にとても美しい北山杉が見えた。まるで緑のしとねから天を衝くような木がいきなりニョッキと生まれたようで、こんな行儀のよい植林を見たのは始めてだった。よほど几帳面な人の仕事だろうと嬉しく思った。私は躊躇なくこれを惟喬杉と名付けた。

(惟喬杉 写真左)



杉林越しに広がるひなびた大原の里は、雨のせいもあってまるで寝ているような静けさであった。雨に煙る遙か向こうの連山が、まるで墨絵のようなたたずまいを見せて、旅先の私の心を和ませた。親王もこの素晴らしい景色にどれだけ心を慰められたことだろう。ずっと北の方に眼を移すと、金毘羅山と翠黛山が見えた。ふと建礼門院の日日にまで思いを馳せたひとときであった。

## 君ヶ畑

滋賀県永源寺町君ヶ畑には、惟喬に関する大きい伝説がある。

惟仁親王に皇位を譲ってから惟喬は世の無常を感じ、菩提の道に入るべく廷臣を連れてこの地の奥山の小松畑という所に住みついた。この山中には大木が多いので、杣人まきびとに器の木地を伐らせて轆轤うろこを発明され、盆・椀等の作り方を教えられたという。これが小椋六ヶ畑に住む木地師達の祖神と崇められた親王にまつわる伝説の骨子であるそう。非農耕民集団に多い権威仮託のための伝承ではないかと思う。そう思いながらもこの地の伝説もしっかり手繰り寄せたい気持ちで、またぞろ君ヶ畑を訪れることに決めた（平成四年五月）。

永源寺町の東北に位置するこの君ヶ畑には、永源寺役場前からバスは一日一往復のみ（現在は四往復）と聞いて、「コリヤ駄目」と諦め、息子の一日を束縛することに決めた。

左に永源寺ダムの吸い寄せられるような美しい水の色を愛で、右に鈴鹿山脈（西麓）の天を衝くばかりの樹々を見上げ、藁屋根の多さに驚きつつも心を和ませ、後部座席の眼はドライブ気分満点であった。途中、政所まんじょうという地名を見つけ、ここが茶の産地で有名な土地だと周辺の茶畑を見回した。守口市から二時間半ばかりで蛭谷に着いた。そこには惟喬を祀る筒井神社があり、境内に木地師資料館があった。管理人が留守で観ることはかなわなかったが、全国の木地師（一五〇人）がここに詣でて自分の自慢の作品を置いてゆくことを知った。盆・椀・こけし等の他に、木の薬研やげんまで寄贈してあるとか。



（惟喬親王尊像 写真右）

御池川に沿って、更にクネクネと曲りくねった山道を西南に走ること一五分。目当ての惟喬の墓所。素晴らしく大きい明神鳥居の側に、これまた大きい石碑があり、それには、  
惟喬親王御廟所筒井八幡宮日本國中轆轤師等鎮守とあった。  
その反対側に、惟喬親王の大きい座像があつて驚いた。『國史大辞典』に載っている親王像より遥かに美男子であつたので、私めの喜ぶまいとか。

禁令の箇条を記したあの制札には宮内庁の文字はなく、滋賀県神社庁とあった。菊の御紋と桐の御紋のついた石の門扉の向こうに立派な宝篋印塔が鎮座していた。その昔大勢の木地師達がここに集うて仕事していたという。千軒跡の碑もあり、御所の跡地にはこぢんまりとした銅板屋根の神社があったが、これは蛭谷にあった筒井神社の岐れかなと思つた。伝説は私の中からとうに追いやられて、冷え冷えとした山の空気に、平安初期を蘇らせた想いであつた。

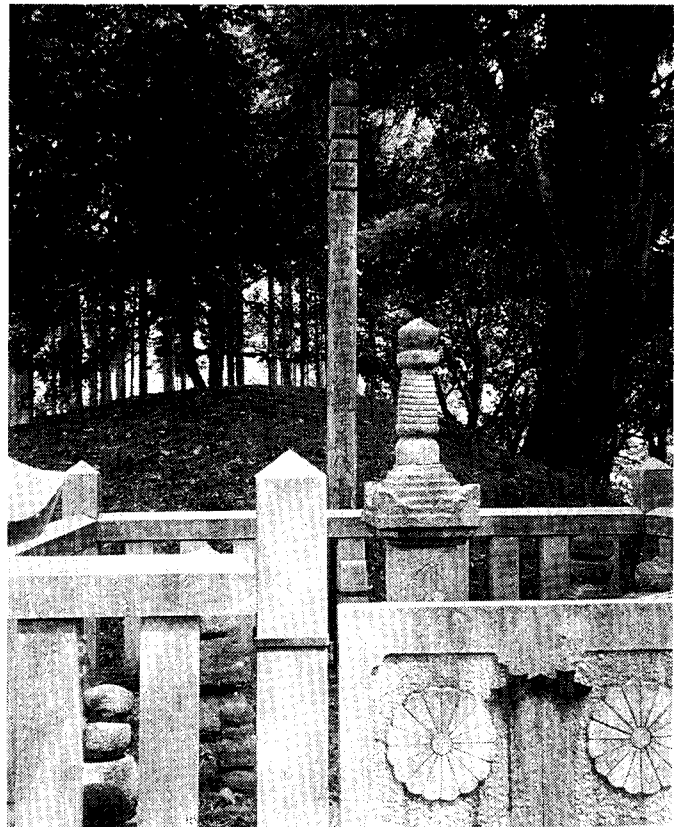
蛭谷から東北に二〇分ほどの位置に君ヶ畑がある。車を止めると三人の子供が走り寄つて来て「どこへ来たん」と聞く。来客の珍しい土地らしい。指さした校舎は割合大きく美しかった。現在全校生徒数たったの五人だという。そのうち四人は小椋姓、一人は瀬戸姓。後で役場に聞いたところによると、三六戸内十一戸が小椋姓であつた。頼んだわけではないが、親切な三人の子供はゾロゾロと道案内役を買つてくれた。

大皇器地祖神社の杉の大木が先日の台風で半分折れたこと、茶臼をはさんだ北側に清和天皇の勅令による宝篋印塔があること。その向うに高松御所と呼ばれている金龍寺がある事等を説明してくれた。そして子供達は惟喬のことを「親王さん、親王さん」と言っていた。

宝篋印塔は小高いところであつて、側には侍臣のものか小さい五輪塔が四つあつた。

金龍寺は平素任職はここに住まず、周辺の人達が留守居役を買つていて、当日はぐるりの草取りをしていた。この寺で、私は由緒書めいた古文書を手入することが出来たので以下紹介する。

(滋賀県永源寺町君ヶ畑、惟喬親王の宝篋印塔 写真左)

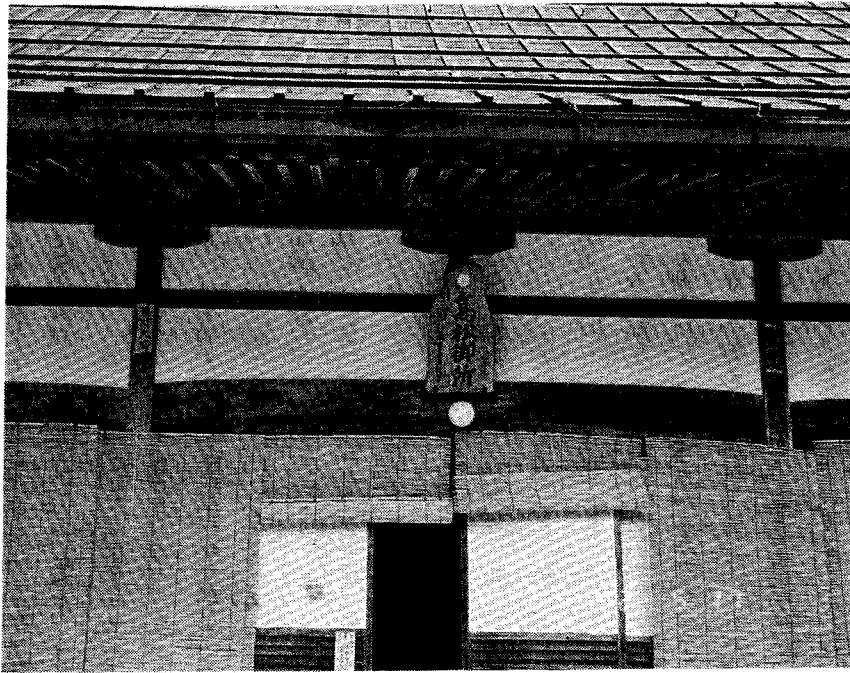


木椀元祖惟喬親王の神号は大皇大明神。

帝位に望みをなくされて、山水を愛してばんやり暮らしたいと出家された。小野の里に入らせ給いし後に当国小松ヶ畠に入御された。御名を算延(一名素覚)と改め小野宮、水無瀬宮と称し奉った。御詠歌に

世をいとう愛智の深山の呼子鳥

ふかき心をたれか知るらん



君ヶ畑 高松御所

自分のこれからの住居をここに決めようと言われたので、柴の庵の御殿を建てて藏皇殿と名付けた。当地では高松の宮と崇めた。そこで、邑の名を君ヶ畑と改め、郷を小椋と言った。清和天皇は親王へ御領地を附。詔して大皇大名神と送り名をされた。

ある時、木の実が落ちてその抜殻が器に似ているのを見られふと思いつかれた。そこで、大木を切つて来るように近臣に命じられた。柚人は天狗ヶ谷（君ヶ畑の北東で鈴鹿山脈のど真ん中）に入り、大きい椋の木を切つて差し上げたところ、親王は轆轤を發明され、侍臣と土地の者に、その轆轤を使いながら椋器の作り方を教示した。その御教示に従つて丁寧な木地椋を作り上げてお目かけると大変喜ばれて、その兩人に木地椋作りの長たるべき系図を与えた。一人は小椋信濃守久長。又一人は小椋伯耆守藤原光吉と名付けて御印書を下された。それよりこの地は木地椋器祖神の霊場となった。

元慶三年（八七九）鹿鳴き紅葉散りゆく様をご覧になって、急に悟りを開かれ、十一月九日侍臣を呼ばれ、「入寂はこの地に定めた故、たとえ今日より後余命があつても、今日のこの日を自分の命日とせよ」と言われたので、民部卿は京に上り、その事を清和天皇に奏上した。天皇は大変名残りを惜しまれて、急いで立派な社を建てて、白雲山と号し、遷宮し奉るべしと命じられた。

寛平九年（八九七）二月二十日、五四歳にて薨去された。清和天皇は勅使を以て宝塔を賜い、御廟の山を塔影山と改めさせ勅願寺御菩提寺等を定められた。光仙山専皇院、無量山般若院を建て、藏皇殿を改めて藏皇殿金龍寺と改名された。それより、一月三日・三月三日・四月九日・五月三日・六月十五日・九月七日・十一月九日、一年に七度神事を行いお祭りしている。



むつかしい文字を要約してみると、大体こんなことが書いてあった。こうして踏み込んでゆくうちに、あながち伝説ばかりではないような気もしました。

### 流亡伝説

交野ヶ原での遊獵の回数が多いだけに、枚方市には影見池・茄子作・



君ヶ畑 筒井神社

山長松山・鷹塚山等、地名にまで残っている伝説も多い。また、三重県員弁郡にも伝説がだんごにかたまって残っている。滋賀県のさきの君ヶ畑を行在所あまぎよにして、三重県度会郡河内村広の御所で薨じられたというのもある。国内各地を調べると伝説の数は枚挙にいとまがない。ご不幸であった御霊を慰めたいと思う多数のファンが、かくあれかしと願うてこうした伝説を作り上げたのであろう。親王の優しい色かげは即ち、伝説を作り上げた里人達の美しいこころ根であったかも知れない。

惟喬は終生四品である。何一つ実務を与えられず、親王中一番年上でありながら、末席にいた辛さには、耐え難いものがあつたと思う。父文徳が始め、皇太子にと思つていたほどの聡明な皇子であつただけに、三十歳に手の届く年齢になって、なおそうした屈辱に耐えるのは苦しかったと思う。藤原氏と紀氏との勢力の違いから、その渦中で一生を翻弄された惟喬の口惜しさは理解出来るような気がする。清和からの「封戸百戸」を断り続けた姿勢の中からは男の意地みたいなものが見え隠れして誠に深い。

なお、どの資料からも、彼の周辺の女性の話が全然出てこない。そのことが不思議でもあり、また余計哀れを誘うのである。終焉の土地小野の里（大原）に今は静かに眠れかしと祈るのみである。

始めは想像のよすがが……でもと軽い気持ちで調べ始め、そのうちどんどん夢中になっていくうちに深みにはまり、最後には、いっそペンにしてみようかと大それた気持ちに移ってゆく、そんな自分の心の動きに今は呆れている。まるでイブ・モンタンの「恐怖の報酬」のように。

# 追跡！幻の備後国大神神社

平田 惠彦

## はじめに

二年前（平成四年）の十月二四日、備陽史探訪の会は「郷土史初級講座 福山の信仰」を開催した。講師は神谷和孝名誉会長で、演題は「福山の信仰」だったが、内容は「備後国大神神社の比定について」ともいうべきものであった。

この中で神谷名誉会長は、大和国の大神神社について説明されたのち、備後国の大神神社をどこに比定すべきかについて話された。この時私は初級者の一人として講座に参加したが、自分なりに神谷説を検討してみても疑問を感じるところがあった。

浅学を省みず、その疑問についてまとめたのがこの文章である。が、なにせ今まで「歴史論文」なるものを書いたことがない。「突撃芸能レポート風」になってしまったことはご容赦願いたい。

まず神谷説を要約すると次のようになる。

①備後国大神神社の文献記録は「日本三代実録」の貞観三年（八六一）

十月廿日の条に「備後国正六位上大神神 天照真良建雄神並授二 從五位下」と、初めて見える。

②大神神社と神奈備信仰のかかわりから、初めに比定の候補地を二つ考えた。第一に深安郡神辺町の黄葉山（神辺山）で、第二に府中市の甘南備神社である。

③このうち黄葉山は、神にゆかりの名で記された形跡はまったくないので、候補から外した。次に、府中市甘南備神社は諸条件（背後の三室山、近くを流れる竜田川、式内社であることなど）から有力であると考えた。

④これを裏付けるために馬屋原呂平の「西備名區」を調べたところ「大神神社、祭神大己貴命、社地不分明、或白雨木」とあり、さらに「三代実録に載せらる品治郡大神神社、是石畳神社に当たるべし。此神社祭地分明ならざれども、本村の神社、他村に勝れて社数多き中、石畳の神社というは、高さ一間四尺に、方一間一尺五寸、石にて畳み上げたる計にて社なし。是を思うに和州三輪の大明神は、式に大神神社とありて大社なるに、神殿を建ずして山を以って神躰とす。此を以って見れば此神、石畳のみにて神と祭れるは、彼三輪に准して是を石

豊の神社、大神神社なるべし」と記されていて「大神神社」石畳神社」説を提出している。これは『三代実録』以外では初めての文献資料との出会いであった。

⑥そこで、福山市駅家町雨木の石畳神社を現地調査したが、確証はえられなかった。現時点では、備後国の大神神社は、甘南備神社か石畳神社であろうという推定の形で留めておきたい。

## 二

このように神谷説によると「甘南備神社」大神神社」あるいは「石畳神社」大神神社」である。

以下これについて私の考えを記すが、その前に大神神社についてよくご存知ない読者のために、この神社について簡単にまとめておく。

①所在地は現在の奈良県桜井市三輪である。

近辺には日本最古の巨大前方後円墳である箸墓（陵墓参考地）や、行燈山古墳（崇神天皇陵に治定）・渋谷向山古墳（景行天皇陵に治定）がある。

②主祭神は大神主神（別名大己貴神、大国主神。いわゆる地祇中の地祇）である。

③大物主神は、『日本書紀』崇神天皇十年の条所載の倭迹迹日百襲姫との有名なエピソード（『古事記』にはこの説話はない）通りならば、蛇体であり、この神の原初的人格は雷神（あるいは龍神）、すなわち雨を

支配するものであったろうと思われる。その後、軍事的性格や崇り神的人格をも持つようになった。また、醸造（酒）の神としても著名である。

④『日本書紀』崇神天皇の条に次のような記述がある。

国内に疫病多く、民の死亡するもの半ば以上になり（五年）、百姓の反逆するもの、流浪するものが出るようになったとき（六年）、天皇が卜占して神意を尋ねたところ、大物主神が夢枕に立ち「わが子大田田根子を以て、吾を祭らせたら、たちどころに平らぐであろう」といったという（七年）。これより大物主神の祭主は大田田根子となり、その子孫が三輪氏となった。

⑤祭主である三輪氏は、ヤマト王権の大王たちよりも古くからこの地を支配していたと考えられ、ヤマト王権成立において、あるいは成立以後も重大な役割を果たしたと思われる。

⑥大神神社の社殿は拜殿はあるが、本殿はない。御神体は三輪山（御諸山）それ自体である。

⑦三輪山中の神域は原則として禁足地となっており、辺津磐座、中津磐座、奥津磐座等で祭祀が行われてきた。また、これらの磐座からは古代祭祀の遺物も出土している。

⑧以上のように、大神神社は最も古い神社信仰の形態をよく現代に伝えており、「神奈備信仰の原点」「磐座信仰の原点」「古代信仰の原点」などといわれている。

では、神谷説の検討にはいる。

まず、神辺と黄葉山について考えてみよう。

通説では、神辺の語源は「神奈備」から来たということになっている。しかし、中世から近世にかけて、この地は「麓」呼ばれており（もちろん黄葉山の山麓にある集落の意味）、文献上、神辺という地名を中世以前に遡ることはできない。したがって、古代祭祀を示す語、神奈備から神辺となったという説には確証がない。

ただ、古代、神辺は吉備の穴海（安那海）・穴国として知られ、浅い海の沿岸であったろうといわれている。伝承によると、近世に入ってからでさえ、船で福山まで往復したという。また古代の山陽道も近世のよりもやや北よりだが、この地を通っていた。古代から近世にかけて交通の要所として開けていたことだけは認めてよいだろう。

次に黄葉山だが、吉野山とも呼ばれており、桜と紫陽花の名所として知られている。山上には、水野勝成（福山藩初代藩主）が入部当初居城とした中世山城・神辺城跡がある。ここからは山陽道（古代、中世とも）が一望の下に見渡せ、築城の条件としては絶好である。

この山麓には八幡社などいくつかの神社が存在するが、最も著名なのは北西の山麓にある天別豊姫神社〔注1〕である。これは『延喜式』神名帳に記載されている（いわゆる式内社）天別豊姫神社に比定されており、これは間違いない。そしてその主祭神は豊玉姫である。したがって、この神社は大神神社ではないと断定できる。

また、八幡社などの他の神社は、いずれも歴史が浅いものが多く、私も神谷氏と同じく、黄葉山には大神神社はないと考える。たとえ神辺の地名が神奈備からきていても、それは天別豊姫神社を祀る神奈備山であったからに違いない。

〔注1〕天別豊姫は山幸彦と結婚した海神の娘「豊玉毘売」のことである。神辺にこの神が祀られていることは、この地がかつて海に關係深かったことを暗示している。

〔参考〕

ここで、あとの議論にも必要なので、備後国の式内社をすべてあげておくことにする。

備後国十七座小並	多禰伊奈大伎耶布都神社、天別豊姫神社
安那郡二座小並	須佐能袁能神社
深津郡一座小	高諸神社、沼名前神社、比古佐須伎神社
沼隈郡三座小並	賀武奈備神社、國高依彦神社
鞆田郡二座小並	多理比理神社
品治郡一座小	意賀美神社
甲奴郡一座小	奴可郡一座小
恵蘇郡一座小	多可意加美神社
世羅郡一座小	和理比賣神社
三次郡一座小	知波夜比賣神社
	御調郡一座小
	三上郡一座小
	三谿郡一座小
	近比都賣神社
	蘇羅比古神社
	賀羅加波神社
	知波夜比古神社

#### 四

次に府中市の甘南備神社の検討にうつる。

この神社は、葦田郡の式内社・賀武奈備神社に比定されている。

『三代実録』には、神谷氏のレジューメの通り、貞観九年（八六七）四月八日の条に「授<sup>二</sup>備後國從五位上甘南備神社正五位下一」とある。

この地に『三代実録』では、元慶二年（八七八）十一月十三日の条に「備後國正五位下甘南備（神）正五位上。從五位下天別豊姫神從五位上」とある。『三代実録』以外の六国史を探しても、これだけしか甘南備神社についての記載はない（注2）。この二例だけで判断するのは危険かもしれないが、私は次のように考える。

先に示したように、備後國の大神神社についての記述は、『三代実録』の貞観三年の条に初めて見える。そのわずか六年後に、大神神社をわざわざ違った名の甘南備神社と記すことはないのか。現に元慶二年には、貞観三年の条の甘南備神社をやはりそのまま甘南備神社と記している。これから素直に考えると、甘南備神社は大神神社ではないという結論に落ち着く。

ただし、記載された三件とも、『三代実録』での巻数が違う（編集者が異なれば、異なる表記にする可能性はくはない）ので絶対とはいえないが、相当確度が高いと思う。

そこでこれを確かめるために私は府中を訪れた。

甘南備神社は本殿、拜殿、社務所とも非常に立派で、神楽殿、宝物館もあり、まず第一級の神社といってよい。ただ、背後の三室山は市の管

理がおろそかになっていられるらしく、荒れ果てていた。遊歩道には雑草がはびこり、とても歩ける状態ではない。休憩所（だったところといったほうがよい）の内部さえ雑草の天国であった。

三室会館を訪ねると、ご婦人が出ていらしかった。縁起についてお尋ねすると、これをどうぞと『甘南備神社御由緒略記』という小冊子を下さった。官司の所在をお尋ねすると、下の社務所にいらっしゃるといふことであった。

話をうかがう前に、由緒書に目を通すと、次のようであった。

#### 一、御鎮座の由来

（神さぶる千木仰ぐにもおもふかな

みむろの山の高きみいつを 加茂百樹）

遠く元明天皇和銅元年、備後の國に悪疫大に流行せし折、時の国守佐伯宿禰磨（注3）は、平素常に崇敬仕る出雲の國の美保の大神（事代主神）の御分靈を三室山に奉斎し、只管御祈禱申上げたところ、さしもの悪疫も日ならずして退散致したので、備後地方の民人は挙げて其の御靈験の誠に顕著なるに歡喜し、其の感謝報徳の誠心を結集して、いとも莊嚴なる御神殿を造営し、父神大國主神と少彦名神を合わせ祀りて、祭神を盛大に嚴修し奉りてより御神徳益々高く御神威日日新たにして、御社運益々興隆し給ひ、氏子崇敬者は日夜広大無辺なる御神徳に浴しているのである。（後略）

これによると、甘南備神社の主祭神は事代主神であり、島根県美保ヶ関みほの美保神社から勧請した事になっている。もしこの社伝が正しければ、甘南備神社は大神神社ではないと断定できる。問題はこの縁起が正しいかどうかである。伝承によるものなのか、文献によるものなのかを宮司にお尋ねすることにした。

宮司は小田さんという七十歳くらいの方であった。小田宮司の話をまとめると以下のようになる。

①パンフレットにある社伝は、『蘆品郡志』や『備陽六郡志』などにかかれてあるらしい〔注4〕。ただ、私自身は読んで確認したことがない。歴史書の正規の記録というよりは、伝承をまとめたものといったほうがよいと思う。多くの神社の縁起も同じだろうと思う。

②個人的には大神神社というより、やはり美保神社、出雲大社とのつながりが強いと思う。神社のすぐ下の町は「出口」といって、これは神々の出口という意味だ。入口はもちろん出雲大社である。また一の鳥居、二の鳥居と続く参道、そして参拝門、拜殿、本殿を結ぶ線を延長するところまで出雲大社につきあたるようになっていく。

③近くに「二本木」という地名もあるが、これは太古の祭祀を示すものだと思う。このあたりから、三室山を御神体として仰いでいたのではないだろうか。三室山からは、府中高校の故豊元国氏らの発掘により、祭祀遺物が発見されている。ただ現在は三室山が御神体ではない。

ここまで筆者は「甘南備神社＝大神神社」説に否定的な考えを述べて来たが、この説を完全には捨て切れぬほど、状況証拠は有力なものばかりある。まず、祭神は大国主神・事代主神・少彦名神の三神で、これは大神神社とはほぼ一致する。次に、背後の三室山には三輪山と同様に、約二千年前の祭祀遺跡及び「磐座」が随所に残っている。また、神谷氏のレジュメにもあるように、三室山は御諸山（三輪山の別名）に通じ、しかもきれいな神奈備型の山であること、すぐ近くに竜田川が流れていることなどである。このことは、小田宮司も本当に大神神社に似ていると話されていた。

しかしながら、総合的に判断すると、社伝の典拠がはっきりしないのが難点とはいえ「甘南備神社＝大神神社」説は疑わしいといわざるを得ない。

〔注2〕『甘南備神社御由緒略記』の「御社柄」には「淳仁天皇天平宝字四年從五位上に叙せられ」とあるが『統日本紀』にはこの記載がない。

〔注3〕『統日本紀』和銅元年三月十三日の条に「正五位上佐伯宿禰麻呂為二備後守一」とある。

〔注4〕『備陽六郡志』『蘆品郡志』『西備名區』『福山志料』とも由緒不明と伝え、この記事はなかった。たとえば『蘆品郡志』には「本社は出口町三室山に鎮座す、創建は和銅年中疾病の時、出雲国三保崎より勧請せしなりとあれとも確かからず」とある。

また、『西備名區』は「古老傳ニ出雲国三穂崎ヨリ御鎮座」と記したあと「祭神別ニ辨説アリ」と祭神に關し異説があることを示唆している。したがって、佐伯宿禰麻呂が備後に国司として赴任したと結びついた伝承と考えるべきであろう。

## 五

駅家町雨木の石畳神社はどうだろうか。

雨木は、福山市の最高峰である蛇円山〔注5〕の山麓の集落であるが、近辺には服部川が流れ、服部本郷、服部永谷の地名もあり、服部地区の一部と考えてよいと思う。

蛇円山には「くぐり岩」「船岩」「よろい岩」など、多くの巨石が存在し、磐座の材料にはことかかない。また、山の中腹では祭祀遺物が発掘されている。この点、御諸山、三室山などと同じ条件を満たしており、神奈備型の山であることもはっきりしている。

石畳神社はこの山の登山道に面して鎮座している。ただし、甘南備神社とは違い、決して大きな神社ではない。神社の入り口には石製の鳥居があり、これに「岩畳神社」〔注6〕と刻まれた石製の額がついている。鳥居をくぐって階段を登ると、四本石柱が立っており、そのひとつには「式内岩畳神社」〔注7〕と刻まれている。境内の両側には、腰掛け型の石、加工された丸形石（おそらく五輪塔の一部）などが転がっていた。その先に御神体の磐座がある。驚くほど巨大なものではないが、何枚かの岩を組み合わせて作った、明らかに人工の磐座（磐座には自然石をそ

のまま使っているものも多い）である。「広島県神社誌」によれば、現在この神社の祭神は「国高依彦命」で大物主神ではない〔注8〕。

ところで、地名の服部であるが、これは機織部に通じ、古代に渡来系の人々が住んだことに因んでいることが多い。であるならば、この地域の中心的な神社である石畳神社は、当初は、渡来系の人々によって祭祀されていた可能性が高い。

すると、次のような疑問がおこる。

大神神社の祭神は大物主神で、これは最も代表的な地祇である。その大物主神を今来の人々（渡来人）が、石畳神社の祭神として果たして祀るであろうか。一般には、やはり渡来系の神々（蕃神）、少なくとも天神を祀るのではないだろうか。

〔注5〕「蛇園山」とも表記する。標高五四五・八m。山頂には高麗神社（地図等にある高麗は誤記ではないだろうか）が鎮座する。

〔注6〕現在、一般には「石畳神社」と表記され「いしだたみじんじゃ」「いわだたみじんじゃ」とも呼ばれている。しかし、この額を素直に読むと、「いわだたみじんじゃ」となる。

〔注7〕この石柱の裏には「明治二十五年」と刻まれてあった。したがって、明治二十五年時点では「いわだたみじんじゃ」呼ばれていたと思われる。

〔注8〕『蘆品郡志』も「国高依彦命」としている。しかし、祭神（大物主神）は長い歴史の中で変わる事もある。

実は私には、神社関係に詳しい飯島さん（東京在住）という友人がいる。私は彼にこの疑問をぶつけてみた。すると「蛇円山という名の秘密」という小論を書いてこれに答えてくれた。

結論からいうと、「石畳神社」大神神社」説は有力である、というものである。非常に興味深い論考だが、全文だと長くなるので、資料を引用しての叙述部分を省略し、以下紹介する。

蛇円山という山を見たこともなく、単にその名から、使用された文字から、勝手な推論を吐くわけだが、蛇円とは、やはり、蛇がとぐろを巻いた様子を表したものであろうか。

蛇の円ときたら、どうしても、とぐろを思わざるをえない。

また、蛇のとぐろを巻いた姿は、出雲大社の竜蛇様の絵にもあるように、神体としての蛇の中でも最も神聖なものであったらしい。それは、蛇のとぐろを巻いた姿態が、円錐型をしていて、神奈備型の山を表していたからだ。

どっしりと大地に腰を下ろす円錐形の山―その山と同じ姿で、そこに住んでいる蛇、山から流れ出る清水の中を優美な姿で泳ぐ蛇、古代の人々は、そんな蛇に神の姿を見たのであろう。

冬眠から覚めた蛇に、生命の再生を見たて、脱殻から華麗な変身―復活を見たて、永遠なる神への信仰を深めたのであろう。

日本人は、あるものを何かに見たてることが好きなのである。神は

見えないものと分かっていても、見てはいけないものと知りつつも、不可視のままではいられない。

巨石に神が依りつくことから、巨石そのものが神となってしまうのも同様である。

蛇円山が神奈備タイプ(蛇)の山かどうか知らないが、こう言った名が付いたということ自体、やはり蛇信仰からきているものにちがいない。

蛇が御神体といえ、大物主神は、倭迹迹日百襲姫の話で、その姿は蛇体と知られているので、蛇円山とミワ信仰は無縁とは言えないと思う。蛇円山を御神体として、その麓に大神神社が建てられたとしても不思議はないだろう。

ただ、一体どんな人々がいつごろ、その山を蛇のとぐろから蛇円山と名づけ、大神神社を建てたかということだ。

現在、その場所には大神神社というのではないそうで、石畳神社というのが一応比定できるということだ。(中略)もう、蛇円ということから蛇のとぐろで神奈備型の山を象徴していることは探った。

ここでは形ではなく、字そのものを見つめてみよう。

『蛇』は『ヘビ』で、即ち『巳』||『ミ』である。

『円』はサークル、またはリングで、即ち『輪』||『ワ』である。これをつなげば、蛇円山||三輪山となる。

勿論、上古日本は、『蛇』のことを『ミ』とはいわず、『カ』または『ハ』である。それが疊語となつて、『カカ』、『ハハ』となり、山カガシと言ったりするようになった。



「蛇」―「巳」と考えられるようになったのは、干支が入ってきてからである。これは、奈良朝にはかなり広まっていたということ、この服部連の文武朝なら、特に渡来系の人々であってみれば、あたりまえのことだったにちがいない。

そこで、服部という渡来系の土地に、祭主である服部連の関係で大物主神を勧請し、その近くの美麗な山を御神体とし、蛇円山と三輪山に因んで名づけてもいいわけである。

それにしても、なぜ、三輪山とはっきり命名せず、蛇円などと含んだ名づけ方をしたのか。服部連は本家本元の祭主なのである。やはり、大物主神は地祇中の地祇であるし、渡来系の間人がわざわざ勧請し、あからさまに祀ることを憚ったのかもしれない。

こういうものを読むと、被説得力の強い筆者は、なるほどそうだったのかと、すぐ納得してしまう。ただ、疑問も残るのでそれについて書くことにする。

## 七

この問題を考える上で、ひとつだけ手掛かりがある。

岡山県の総社市に秦<sup>あま</sup>というところがある。高梁川<sup>たかひがし</sup>の中流に伯備線<sup>はくひん</sup>の豪<sup>たけ</sup>溪<sup>けい</sup>駅<sup>えき</sup>があり、その対岸が秦である。ここに秦・豪溪橋がかかっており、橋の秦側のたもとに、石畳神社がある。この神社は備中国下道郡<sup>ひくさく</sup>の式内社・石畳神社〔注9〕に比定されており、これは断定できる。

実はこの神社の御神体も巨石で、それもとてつもなく巨大な磐座である。高梁川の水面から、ほぼ垂直にそりたつ五〇mほどのひとかたまりの絶壁が御神体なのである。したがって、雨木のものとはかなり異なっている。ただ、上部はスフィンクスのようにも、鳥が羽を広げているようにも見え、人の手が加わっている可能性がある。

さて、筆者の知る限り、石畳神社と名のつくのは中国地方ではこの二社しかない。したがって、この関連性は十分に検討しなければならぬ。なぜなら神社名が同一ならば、多くの場合、祭神も同じだからである。

以下具体的な検討にはいる。

服部との共通点の第一は地名についてである。「秦」これは間違いない古代に渡来系の人々が住んだ地名だと断言できる。しかも、「秦」織り」を示している。同じ吉備の地なので、古代においての秦・服部相互間の人的交流は十分考えられる。

第二の共通点は、神社にはともに本殿がなく、巨石を御神体としていくことである。形態が違ふとはいえ、磐座を祀っていることの共通性はやはり大きい。

第三に問題となるのは、服部の石畳神社の石柱に「式内岩畳神社」と刻まれていることである。備後国には「岩畳神社」という式内社は存在しない。雨木はかつての品治郡であるから、式内社は前出の多理比理神社だけである。

「式内岩畳神社」としたことについて二通りの解釈が成立する。

ひとつは、地域の人々の間には、秦の式内社・石畳神社から祭神を勧

請したことが伝承として伝わっていた。だから「式内」と刻んだのだ、というものである。

この場合は、秦と服部の両神社の祭神が同じである。当然、秦の石畳神社の祭神が問題となってくるだろう。これについては後ほど述べる。

もうひとつは、石畳神社||多理比理神社である（または、事実はどうであれ、石畳神社||多理比理神社だと地元の人が考えている）ということである（注10）。この場合、石畳神社||大神神社をいうには、多理比理神社||大神神社であることを証明する必要がある。これについて少し触れたい。

備後国の大神神社が『三代実録』に現れるのは貞観三年（八六一）。一方『延喜式』の完成は延喜二七年（九二七）で、六六年しか離れていない。延喜式に載るほどだから多理比理神社がポツと出の神社であるはずがない。実際には、貞観三年時点でもおそらく多理比理神社はあっただろう。あえて多理比理神社||大神神社というのなら、この間に大神神社が多理比理神社と名を変えたということになるが、これは無理があり過ぎる。

さらに、通説では多理比理神社の祭神が、息長帯姫命（たひひりぎ）または多比理岐志麻流美神（たひりぎ）になっていることからみても、多理比理神社||大神神社は成立しない。

以上のみてきたように、秦と服部の両神社の関連を考える方が有力と思わざるをえない。

では、秦の石畳神社の祭神はいったい何であろうか。

実は、地元の伝承によれば、天日鷲神（あまのたじ）なのである（注11・12）。この神は『日本書紀』に作木棉者（やつくりのわた）と記載されている。

つまり、木棉（わた）で織物を作ったり、あるいはその作り方を教える神である。まことに秦・服部にふさわしい神だといえる。

「石畳神社||大神神社」説の成立もどうやら難しいようである。

〔注10〕通説には「石畳神社||多理比理神社」とするものはない。ただ多理比理神社が服部本郷の北、神子原（かみこはら）の地にあったという説はある。

〔注11〕天日鷲命は『日本書紀』には阿波国の忌部（いんべ）の先祖と記されている。徳島市二軒屋町（ふたのけんや）の忌部神社や東京都台東区竜泉（りゆうせん）にある有名な鷲神社などの祭神になっている。

〔注12〕祭神を「神石」（つまり巨石そのもの）とする説―『式内社の研究』他や「経津主命」とする説―『吉備郡神社誌』もある。

## 八

では備後国大神神社はいったいどこにあるのだろうか。

これにはとりあえず、現時点では分からない、確定できないと答えるしかない。文献資料があまりに少なすぎるのである。

例えば六国史では、私が調べた限り、備後国の神名・神社についての記述があったのは『日本書紀』と『三代実録』だけである。それにその記述も以下の七件のみである（見落としがあっても知れないが）。

①『日本書紀』卷七、景行天皇二十七年十二月の条

(日本武尊命が)「到二吉備一以渡二穴海一。其處有二惡神一」

②『日本書紀』卷七、景行天皇二十八年二月の条

(日本武尊命が)「唯吉備穴濟神。及難波柏濟神。皆有害心」

③『三代実録』貞觀二年(清和天皇)二月二十八日の条

「授 備後國正六位上大藏神。神田神並從五位下一」

④『三代実録』貞觀三年(清和天皇)十月廿日の条

「備後國正六位上大神々。天照真良建雄神並授二從五位下一」

⑤『三代実録』貞觀九年(清和天皇)四月八日の条

「備後國從五位上甘南備神。高諸神並正五位下」

⑥『三代実録』元慶二年(陽成天皇)十一月十三日の条

「備後國正五位下甘南備神正五位上。從五位下天別豐姫神從五位上」

⑦『三代実録』元慶二年(陽成天皇)十二月十五日の条

「授二 備後國天位隱嶋神從五位下一」

これらの条と『延喜式』神名帳の一七座、および『西備名區』の先ほどの記述だけから、埋もれてしまった備後國大神神社を見つけ出すのは現実的には難しい。したがって、これを確定するには中世以降の広範な文献を渉し、まったく新たな資料の発見が必要だと考えた。

## 九

そこで、とりあえず『備陽六郡志』を調べることにした。すると、寺

社とその除地(年貢免除地)の一覧が掲載されていた。時代は『三代実録』からかけ離れているが、当時の有名無名を問わず、ほとんどの寺社が掲載されていると思われるので、すべてに目を通すことにした。

八〇頁にわたって寺社名が延々と続く。数でいえば、なんといっても目につくのは「荒神」である。これは村落共同体的アイデンティティの象徴として祀る神だから、多いのは当然だろう。全国でも広島県や岡山県には特に多いといわれている。

また、「八幡社」も多い。これは武士(源氏)政権が長く続いたことと無関係ではないだろう。意外なのは「稻荷神社」で、神社数全国第一位の割には少なかつた。

字面が似ていて紛らわしいのは「大神」「天神」「大明神」で、これが出るたび、ドキリとする。目指すは「大神」だが、これがなかなか出て来ない。

全部調べた結果、『備陽六郡史』内篇卷十にたった一つだけあった。沼隈郡地頭分村(現在の福山市瀬戸町地頭分)に「小社 三拾三ヶ所」の一つ(十把ひとからげの一つ)として「壹畝 貳歩 大神社」とある。これによると、社地は約三〇坪。かつて『三代実録』に記載された大神神社としては、やや役不足ではなからうか。また「大神」「天神」が多いので、この誤植・誤記の心配もある。これだけでは大神神社だとの確信はとて持てなかつた。

そこで『西備名區』を調べることにした。すると沼隈郡地頭分村の項に神社名だけ「大神宮」とあった。さらに大正年間に編纂された『沼隈

郡誌」にも、社寺誌の瀬戸村「其他」の中に「大神社（宇根・山奥）」と神社名と所在地だけの記載があった。

以上により、「大神社」あるいは「大神宮」という神社が、沼隈郡地頭分にあつたことだけは確かである。これを有力候補としてあげるのは当然であろう。

ただ、古代と近世との穴をうめる文献がなければ、『三代実録』に記載された備後國大神神社だとの断定はもちろんできない。

## 十

地頭分の大神社を訪ねるのに地図を探したが、「宇根」という小字がない。しかし、現地に行つて聞けば分かるだろうと思つて行つてみたが、尋ねたどの人も知らないという。瀬戸公民館に問い合わせても、わからないという返事だつた。どうやら現在では死滅してしまつた地名のようである。

そこで、福山市民図書館に行つて相談することにした。いろいろ調べてもらったが、ちょうど参考書の専門司書の方がお休みで、わからないということだつた。しかし、「瓢箪から駒」というべきか、「犬も歩けば棒にあたる」というべきか。このとき、まったく新たな発見があつた。

開架室の司書の方が、平凡社の地名辞典『広島県の地名』で「大神神社」を索引で引くと二項目あつた、と教えて下さつたのだ。一つは前出の「石畳神社」関連である。ところが、もう一つは地頭分ではなく、庄原市の「丑寅神社」関連で出てくるのだつた。ここで著者は大失敗に初

めて気がついたのでつた。

いままでの近世期の文献調査は、基本的に『備陽六郡志』を出発点にしている。けれどもこれは、備北の三次・庄原近辺つまり旧浅野藩領については、当然のことながら触れていなかったのである。何ということか、まったくうっかりしていた。

『広島県の地名』の記述の典拠は「藝藩通志」と「比婆郡誌」であつた。さっそく、これを調べてみた。

まず、『藝藩通志』巻百二十四備後國三上郡四「祠廟」の項に、次のようにある。

良三輪神社 庄原村にあり、二神、同殿に祭る、もと千代丸と呼ぶ地にあり、慶安二年、池畔山に移す、舞殿、神庫、經塔、鐘樓、隨身門等あり、門の左に泉あり、里俗、靈泉と稱す、

また、これを受けて、大正元年に発行された『比婆郡誌』には、次のようにある。

丑寅神社 庄原にあり、村社にして伊弉諾尊、素戔鳴尊、吉備津彦命を祀り、三輪明神を相殿とす。もと庄原村河原といへる地にありし大神神社（貞観三年十月備後國大神神從五位下に叙すとあるはこれか）と、全新町といへるにありし伊弉諾尊及吉備津彦命を祀れる良神社とを、同村千代丸に移して両社二基を雙建し、（年曆不詳）その後天文

十八年九月、庄原李之進、山内隆通重修、寛文十年九月一日、今の地に移して一社に祭り、三輪丑寅の二社を稱へ來りしを、明治四年一社名となし三輪大明神を相殿とし、以て今日に至れり。通志には池の畔に移せるを慶安二年とせり。

『比婆郡史』の『藝藩通史』にない部分は、おそらく口承か社伝を元に記したものだと思われる。これによれば、三輪明神（大神神社）と良神社という別箇の神社であったときは、年代不明。千代丸に移してから天文十八年（一五四九）までは、大神神社と良神社が一ヶ所に二社並存の形で存在した。そして寛文十年（一六七〇）には社名を「三輪丑寅」と変えて二社名併記の一社となり、ついに明治四年（一八七二）に二社を完全に合祀し、一社名の丑寅神社としたことになる。そして、この河原にあった大神神社を、貞観三年の備後国大神神社に比定する説を提出している。

この河原の三輪明神の社殿は、現在では当然失われているだろう。したがって、この記事の比定通りだとすると、備後国大神神社は既に存在しないことになる。しかし、仮にそうであるにしろ、大神神社の比定候補として残しておく必要は十分あるだろう。

#### 十一

話は元に戻るが、「宇根」の場所の調査は、専門司書の方に申し送りしておく、ということだった。三日後、図書館から連絡があった。地頭分の「大神社」の住所は「福山市瀬戸町地頭分二三一八」（注18）にな

っている、ということであった。

どうしてわかったのですかと尋ねると、広島県の「宗教法人名簿」を調べたということであった。こういう発想は、私などは思いもよらない。まさにプロだと思った。ともあれ地頭分の「大神社」は現存しているということが分かった。

また、その場所は、図書館によくいらっしやる、地頭分在住の郷土史に詳しい山本昇氏から聞いて、住宅地図にマークして下さっていた。そのうえ、山本氏の電話番号まで尋ねて下さり、本当に頭の下がる思いであった。私は図書館まで赴いて改めて礼を言い、地図のコピーをとった。そして、早速山本氏に連絡をとり、お教えを請うことにした。

山本氏のお宅にお邪魔する前に、「大神社」を撮影することにした。地図を頼りに探し、近所のおばあさん（三島さん）に確認した。そのお話によると、いまでも七月二〇日前後の日曜日に、近所の者が集まって、年に一度のお祭りをする、という。ただし、神主さんは呼ばないで内輪だけ、ということ、祭神も不明ということであった。

神社は山道に沿って、右手の斜面の三〇mほど上方にあった。生い茂った深い草の向こうに粗末な祠が見える。石の階段がついているが、しっかりしたものではない。

登ってみると、祠の中に高さ二〇cmほどのごく普通の石が安置されていた。おそらく、これが御神体なのであろう。祠の左手には、不釣合なほど大きな石灯籠がある。これは、銘が入ってなかったが、かなり古いものように思えた。境内といえるほどのものではない。祠と灯籠だけ

でいっぱいになるほどの平地しかないのである。正直、これが『三代実録』に載った大神神社だとは思われなかった。

その後、山本氏を尋ね、お話をうかがった。研究内容のご専門は八幡信仰だということで、その話が中心であった。私は実のところ八幡社について、ほとんど何も知らない。祭神が応神天皇、神功皇后、仲哀天皇の三神（あるいは宗像三女神を入れて六神）の場合が多いこと〔注14〕源氏の守り神であること、神社数が稲荷社について多く、全国で二万五千（一説に三万）社ほどあることくらいの知識しかないので、専門的な話にはまったくついていけなかった。しかし、分からないながらも「大神神社」に関連しては、次のことだけは理解することができた。

①八幡信仰の成立は疑問が多いが、原始八幡信仰は大分県宇佐地方の単なる氏神から発生したと思われる。

②この地方神が全国的な広がりをもつに至ったのは、大和政権の支配を強化する宗教政策によるものと考えられる。

③その際、三輪氏が八幡神の祭主として大和政権から任命を受け、宇佐に下ったと考えられる。その後、全国に八幡社を勧請していく過程で、各地で大神氏が祭主となっていったのではないか。

④当所では福井八幡宮が承和元年（八三四）に創建された際、社家として大神朝臣氏あるいは大神小山田氏が入部したと思われる。

⑤したがって、地頭分の「大神社」は、おそらくこの大神氏の居所に自らの祖神を祭ったものだろうと考えられる。規模からいっても『三代

実録』に掲載された大神神社だとは思われない。

⑥なお、「大神社」は現地では「だいじんさん」と呼ばれているが、これは「おおみわ」の読みが難しいので転化したものだろう。

⑦また、文献にはないが、瀬戸町長和にも毘治谷大神社というのがあって、これも同じく大神氏が祖神を祭ったものだろう〔注15〕。

以上の山本氏の見解をどうこういうことはできないが、これら瀬戸町の大神社が『三代実録』にある大神神社とは思えないという点では私も同意見である。

ところで、「宗教法人名簿」には、他に四社の「大神社」の記載があった。このうち、三社は現地調査の結果、いずれも天照大神を祭神とする神社で、大神からきた大神さんであることがわかった。

したがって、ここでは箇条的にあげるにとどめる。

①沼隈郡沼隈町常石一〇〇（東組）の大神社

・創建不明（三〇〇年以上は経過。村上宮司による）

②尾道市浦崎町八一（広畑）の大神社

・伝承では平安時代の創建。（佐藤神主による）

③尾道市浦崎町三二七二の一（海老）の大神社

・明治になってからの創建。（佐藤神主による）

残りの一社は福山市藤江町一六三にある大神社で、その御神体は「石」である。祭神は不明である。ただ、地元の話では石をそれ自体であるという。

規模は長和の大神社と同程度である。伝承によれば、漁師が網を引き上げたところ、形のいい石がかかっていた。しかし、邪魔なのでこれを捨てて網を投げたところ、また同じ石がかかっていた。これより、靈験ある石としてお祀りした、というものである〔注16〕。

藤江町のこのあたりは、本庄重政による干拓地として知られている。近年までは塩田があり、この収入による長者も多くいたという。

実は、この地の古称も「ひじや」といい、瀬戸町長和毘治谷と同音である。距離もそれほど離れていないので、住民の移動があったことを示唆しているのではなからうか。いずれが古いかは断定できないが、おそらく、長和の方から勧請されたものと思われる。

〔注18〕「宇根」という大字はなくなっている。また、「沼隈郡誌」にあった「山奥」は「山奥にある」という意味ではなく、「山奥ヤマノオ」という小字である。

〔注14〕八幡社の総本社は九州の宇佐神宮（宇佐八幡宮）である。この祭神は八幡大神（応神天皇）、比売大神（いわゆる宗像三女神）多岐津比売命・市杵島比売命・多岐理比売命ということになっている）、神功皇后であるが、不可解なことがある。本来、神社における祭神の祀り方は、祭神が三柱の場合、中央に第一位の祭神、向って右に第二位、左に第三位となるべきであって、筆者の知る限り、まず例外はない。ところが、宇佐神宮の場合だけ、向って左に八幡大神、中央に比売大神、右に神功皇后と

なっている。これはいったい何を意味しているのだろうか。本論には直接関係ないが、興味深い問題である。

〔注15〕その後、この神社の祭祀を担当しておられる福井八幡宮の官司・長島孝明氏に確認したところ、祭神は「大國主命」で、縁起は不明ということであった。

〔注16〕この「何度すても網にかかる石」の伝説は、瀬戸内沿岸の神社（特に漁村にある神社）には広く分布する。

## 十二

さて、文献を調べていて、収獲はもう一つあった。大物主神あるいは大國主神を主祭神として祀った神社が比較的備後国には少ない、ということがわかったのである。

神様は全国的に有名である。しかも、出雲大社のある同じ中国地方なのだから、これを祀る神社が多くあってもよさそうに思う。だが実際には、小社（無神格の社）を別として、旧縣社・郷社はもちろんのこと旧村社クラスにさえあまりない。これはいったいどういうことなのだろうか。別のテーマとして考えてみる価値は十分ある。これほど大物主神を祀る神社が少ないというのに、備後国の大神神社はいろいろ勧められたのだろうか。

そう思ううち、私は何か不思議な胸騒ぎを覚えた。今まで見落としていた重要なことがある―そう直感した。あせるな、落ち着いて考えろ！その時、尊敬する郷土史研究の先輩・八木敏乘氏が話されていた言葉を

思い出した。

―神は人とともに移動する―

神社ばかりに目がいつて、この大原則を見逃していたのである。

全国的にみると、大神神社が勧請された地域には、「三輪」「美和」「三和」の地名だけでなく、「大和」「山門」の地名が残るところもある。大神神社とヤマト王権の密接なつながりを見ると、地方勢力を屈服させていく過程において、ヤマトから相当数の人間が大物主神の神を担いで進駐していったと考えてもよいのではないだろうか。

『大神神社史』は、「大神神社の分祀」の一章を設けて代表的な分祀社をあげている。これによると、広島県にはやはり一社もなく、山口県一社、島根県一社、鳥取県二社となっている。これを見る限り、中国地方への分祀は、それほど多いとはいえないようだが、例外があった。岡山県（備前・備中）の五社である。

備前・備中は古代吉備の中心地であり、しかも、古代製鉄・製塩の技術を寡占していた。造山古墳、作山古墳、両官山古墳などの巨大古墳をみてもわかるとおり、ヤマト王権に対抗するだけの実力を備えていたのである。

つまり、ヤマト王権にとっては、潜在的な仮想敵国といってよいほど脅威だったのではないか。当然、吉備の分断・弱体化をねらったはずである。それが、岡山県に五社という数字になってあらわれたのである。

このうち式内社が三社ある。

①美和神社 旧邑久郡西須恵村境三和ノ峯

②大神神社 旧上道郡四御神村

③神社 旧下道郡八代村官山

これらはいずれも社殿が現存し、祭祀も続いている。また、地名にはつきりと神社名称の影響が見られる（岡山県にはここ以外にも「三輪」「美和」の地名が数か所残っている）。この周辺に、三輪氏がある程度まとまった単位で移住して、しかも、その後土着したに違いない。これが、現在まで祭祀が絶えなかった最大の理由ではないか。

では、備後の場合はどうだろうか。

備後は「道の後」であり、吉備の辺境の地であった。吉備の勢力があまりおよばなかったためか、早い時期にヤマト政権の支配下に置かれたとみられている。

地名を調べてみたら「三輪」「美和」はもちろんのこと、それらしい痕跡もない。しかし、九世紀には確かに大神神社は存在したのである。これをどう考えるべきだろうか。

備後国の大神神社はいったい誰が勧請したのでだろうか。勧請した人間は確かにいた。だが、否としてその所在地が分からなくなっている。伝承としても、地名としても残っていない。備前・備中の場合と対照的である。何故だろう。それは、勧請した人間が長期間定住せず、去って行ったためではないか。そのような人間を想定できないだろうか・・・。

そう思ううち、はっとした。ひよっとすると、佐伯宿禰麻呂のように畿内から派遣された国司ではないのか。彼らは任期が切れれば帰ってしまうではないか！もしかすると、大神氏自身が備後に国司として赴任し、



大神神社を勧請したのではないか。いままで、何故こんな単純なことに気づかなかつたのか。私は急いでもう一度、人物索引から六国史を調べ直した。

すると……やはりあった！

まず、『文徳実録』齊衡二年（八五五）二月十五日の条に

外従五位下大神虎主<sup>おみ</sup>為<sup>なり</sup>備後<sup>びご</sup>後<sup>ご</sup>介<sup>け</sup>。侍醫<sup>じい</sup>如<sup>ごと</sup>レ故<sup>ゆへ</sup>

とある〔注17〕。また、大神虎主についての記載は何件かあるが、死亡記事が『三代実録』貞観二年十二月二十九日（八六〇）の条に

従五位下行内兼正大神朝臣虎主卒

とあり、そのあとに薨卒<sup>こうそつ</sup>伝<sup>でん</sup>（生前経歴）が次のように記されている。

虎主者、右京人也。自言。大三輪大田々根子之後。虎主。本姓直神。

成<sup>なり</sup>名<sup>な</sup>之後。賜<sup>たまは</sup>姓<sup>せい</sup>大神朝臣<sup>おみ</sup>。〔中略〕承和二年為<sup>な</sup>左近衛醫師<sup>さきんゑいし</sup>。

遷<sup>うつ</sup>侍醫<sup>じい</sup>。十五年授<sup>たまは</sup>外従五位下<sup>げいじゆゐごじゆげ</sup>。兼<sup>かみ</sup>參河掾<sup>さんごじゆげん</sup>。後遷兼<sup>のちうつかみ</sup>備後<sup>びご</sup>掾<sup>じゆげん</sup>。

（後略、波線筆者）

これによると、大神虎主は、承和十五年（八四八）に一度備後掾となり、その後、齊衡二年（八五五）に出世して備後介になっている。また

波線で示したように、大田田根子の子孫という強い自覚、あるいは誇りを持っていたことがうかがえる。

この人物が大神神社を勧請したのではないだろうか。それが仮に承和十五年（八四八）備後掾になった年だとすると、仁壽元年（八五八）に初めて位階を受けた〔注18〕比較的新しい神社となる。それで、式内社にならなかつたのかも知れない。そして、虎主の死後『三代実録』貞観三年（八六一）の条に初めて登場したというわけである。

大神虎主が備後国に一度でも赴いていれば、国府鎮護の意味から、また、手軽に参拜できるように、大神神社を備後国府の近辺に勧請したと考えられる。ならば、府中市あるいは神辺町〔注19〕のどこかにあった（ある）ということになる。

〔注17〕従五位下という官位は、備後国などの上国では「守」になるこ

とができる。「侍醫如<sup>ごと</sup>レ故<sup>ゆへ</sup>」とあるのはこのためだろう。侍醫兼任なので、遷任<sup>うつり</sup>と思われる。しかし、任地に配下の者（大神氏）を送り込み、大神神社を勧請しても不思議はない。また、

備後国の大神神の受けた位階も従五位下であったことは、虎主が勧請したことを暗示しているようにも思える。

〔注18〕『文徳実録』仁壽元年（八五八）正月二十七日の条に「天下諸神。

不<sup>な</sup>レ論<sup>ろん</sup>有<sup>あ</sup>位<sup>ゐ</sup>無<sup>な</sup>位<sup>ゐ</sup>。叙<sup>しよ</sup>正<sup>せい</sup>六<sup>ろく</sup>位<sup>ゐ</sup>上<sup>じやう</sup>。」とある。

〔注19〕備後国府の所在地は「府中説」「神辺説」の二通りある。数次にわたる調査により、市街から奈良時代の遺構が発見されてい

る府中市の方が有力だといわれている。神辺説は国分寺・国分尼寺跡があり、「方八町」という地名が残っているというのが根拠だが、国府・国衙らしい遺構は出土していない。

### 十三

仮に国府が神辺にあったとすると、ひとつ気になることがある。

神辺の国府比定地は、弥生集落遺跡の「大宮遺跡」と重なっている。この「大宮」の名称は、文字通り「大きな神社がある土地」という意味でつけられたのであろうが、ひよっとすると「おおみわ」から転化したのではないかと思つたのである。

そこで、神辺歴史民俗資料館に行つて尋ねることにした。

館長はおおむね次のように話された。

現在はここは湯野とよばれており、地名としての「大宮」は消滅している。大宮というのは、かつてこの近辺に八幡社があったため、現在、この八幡社は中条に遷座されている。したがって、大神神社とは関係がないのではないか。

けれども山本氏の話にあるように、八幡社の祭祀は、当初大神氏が受け持った可能性もある。したがって、国府による支配に関連して大神氏がこの地に来ていれば、その「大神」が転じて「大宮」になったと考えられなくもない。しかし、正直苦しい推測である。

ところが、その後再度資料館に行く機会があつて、これは大神神社に關係するのではと、次のような資料を教えて下さつた。それは、故高垣不敏氏が昭和三年八月一日付の『神辺町広報第28号』書かれた「湯野山王さん」という記事であつた。

湯野の山王さんはその地山王山の山巔に祀られており、大己貴神（オナムチノカミ）を始め二十一神を以て祭神とし、公式には日枝神社といわれています。（中略）この神は、比叡山に延曆寺を創建するに当り、日吉（比叡）の神たる大山昨神（オーヤワグイノカミ）を山下に遷し、新たに守護神として大三輪神（オーミワノカミ）大己貴神（を祀つて大比叡の神と称し、更にそれを唐の天台山（浙江省台州府）における山王祠に擬らえて山王と称し、且つ大山昨神以下の諸神をも同一神名のもとにおさめたものであります。（中略）また、三聖のうち大己貴神を大宮、大山昨神を二の宮、聖眞子を三の宮と呼ばれます。

もし、大神神社が神辺にあつたならば、逆に、国府⇨神辺説の有力な傍証になりうる！そういうことを、以前お話ししておいたこともあつて、館長はこの記事に「大三輪神」の名を発見し、注目されたのであろう。

しかし、山王信仰は比較的新しく、備後国大神神社との直接の關係はなさそうである。念のために現地に行つて調べると、長元二年（一〇二九）に日枝神社から分霊・勧請したという記念碑が建てられていた。残念ながら二百年ほど新しいのである。ただ、「大宮遺跡」の名称は八幡

社ではなく、この「山王さん」からつけられたようである。

元に戻ろう。実は、虎主が死亡した三年後に、虎主直系ではないが、もう一人の大神氏が備後国に国司として赴任していることがわかっている。『三代実録』貞観五年（八六三）の条に次のようにある。

從五位下行備後介小野朝臣國梁為<sub>レ</sub>守。外從五位下行左大史大神朝臣全雄為<sub>レ</sub>介

全雄はこの翌年に但馬介に転じ、貞観十年（八六八）には勘解由使次官になっている。

しかし、わずか一年の任期ではあるが、備後介になっているのである。これを見ても、この時期の備後国と大神氏の関係はかなり深かったということがわかる。そして、大神神社の祭祀も、少なくともこのあたりまでは盛大に続いていたであろう。

しかし、備後国の大神神社は「延喜式」神名帳には記載がない。六国史に記載されている備後国の神社全部が式内社となっているわけではない。だが、朝廷と極めて近い位置にあった大神氏が祀る大神神社が、式内社からもれたことは不自然に思える。このことは、既に九世紀末には、この神社の祭祀が廃れていたことを暗示しているのではないだろうか。

貞観五年（八六三）以後、大神氏と備後国の関わりも、正史から一切消滅してしまう。パラシュート部隊のようにやって来た大神氏が国府から去り、二度と戻らなかつた。もともと、備後にそれほど縁の深い神社

ではないのである。祭祀する人間が絶えると神社がどうなるかは容易に想像がつく。祭主が消滅するとともに神は立ち去るのである。たとえば、社殿が残されても、時とともに朽ち果ててしまう。このようにして、備後国の大神神社は歴史の深い闇へと消えていったのではないだろうか。結論を言うと次のようになる。

①大神虎主が備後国に大神神社を勧請したであろうという前提に立てば、大神神社はかつて国府近辺にあった。しかし、その後早い時期に祭祀が絶え、幾許かして社殿も消滅してしまった。つまり、現在、備後国大神神社はどこにも存在しない。

②もし①の仮説が間違いである場合、庄原市の「丑寅神社」が有力であり、大神神社の祭祀を受け継いでいる可能性がある。伝承とはいえ、かつて三輪明神と呼ばれた時期があったのは、この神社だけである。

③瀬戸町の大神社は、規模等から考えると、やや無理があると思われる。ただ、福井八幡宮の縁起と合わせて再度検討してみる価値はありそう

だ。  
④神谷説の甘南備神社、石畳神社は本論で詳述したように、大神神社ではないと断定してよいのではないか。今後、よほどの史料が出てこない限り、この結論はくつがえらなれないと思われる。

△ 参考文献 △

- ★レジュメ「備後に於ける大神神社について」 神谷和孝著  
★古事記 岩波書店・角川書店・小学館  
★日本書紀 創芸出版・吉川弘文館・小学館  
★統日本紀 岩波書店・吉川弘文館  
★日本後紀 吉川弘文館  
★統日本後紀 吉川弘文館  
★日本文徳天皇実録 吉川弘文館  
★日本三代実録 吉川弘文館  
★延喜式（神名帳） 吉川弘文館  
★六国史索引一〜四 吉川弘文館  
★甘南備神社御由緒略記 甘南備神社  
★備陽六郡志 宮原八郎左衛門直御編著（備後叢書） 東洋書院  
★西備名區 馬屋原呂平重帯編著（備後叢書） 東洋書院  
★福山志料 菅茶山編著 森山書店  
★藝藩通志 頼惟柔編著『藝藩通史』刊行会  
★蘆品郡志 蘆品郡自治会編 東洋書院  
★沼隈郡誌 沼隈郡誌編纂委員会編 臨川書店復刻  
★比婆郡誌 日野篤信著 比婆郡役所（芸備郷土史刊行会復刻）  
★大神神社史 大神神社史料編修委員会編 大神神社社務所  
★式内社調査報告第二二卷山陽道 式内社調査委員会編 皇學館大学出版社
- ★式内社の研究 第五卷山陽道・西海道 志賀剛著 雄山閣出版  
★日本の神々 第二卷山陽・四国 谷川健一編著 白水社  
★広島県の地名 中国新聞社  
★広島県大百科事典 中国新聞社  
★岡山県大百科事典 山陽新聞社  
★広島県宗教法人名簿 広島県総務部文教課管理係  
★広島県神社誌 広島県神社誌編纂委員会編 広島県神社庁  
★備後国府跡―推定地にかかると一九九〇年度調査― 府中市教育委員会  
★神辺町広報第28号（昭和三十一年八月一日） 神辺町広報課  
★神々の系図 川口謙二著 東京美術  
★神社の古代史 岡田精司著 大阪書籍  
★大神と石上 和田萃編著 筑摩書房  
★三輪山伝承 山中智恵子著 紀伊國屋書店  
★日本文化と八幡神 佐々木孝二著 八幡書店  
★大系 日本の歴史2 古墳の時代 和田萃著 小学館  
★日本の古代5 前方後円墳の世紀 森浩一編 中央公論社  
★日本の古代7 まつりごとの展開 岸俊男編 中央公論社  
★日本神話 上田正昭著 岩波書店  
★統・神々の体系 上山春平著 中央公論社  
★日本の神々 平野仁啓著 講談社  
★吉備の古代史 門脇禎二著 日本放送出版協会

# 国史跡 小早川氏城跡

## 沼田高山城——その遺構

末 森 清 司

### ◎沿革と概要

小早川氏城跡、沼田高山城（以下「高山城」と略記する）は、小早川四代茂平公が建永年間（一二〇六～一二〇七）に沼田庄に來住し、築城したと伝えられている。

小早川氏は、初代土肥実平から始まり、鎌倉幕府創建者、源頼朝の家臣として源平合戦において、実平・遠平親子が平家追討に活躍し、その戦功の賞として沼田庄を拝領した。

遠平の養子・三代景平は養父遠平より沼田庄地頭職を拝領するが、建永元年（一二〇六）、子茂平に譲る。茂平は相模国土肥郷より一族郎党を引き連れ來住。本郷塔の岡・中岡付近に家臣ともども居館をおいて、沼田庄の経営支配を進めた。

高山城は小早川氏の本拠城として茂平が築城し、以後一七代隆景が新高山城を改築して移住するまで三五〇有余年の間、代々栄えた。

高山城は標高一九〇m、広さはだいたい一六ha、周囲四kmはあろう。東に仏通寺川、西に沼田川で、両川が天然の壕の役目を果たしている。城山の山塊は岩が絶壁を成し、攻め難く守りやすい堅い要害になっている。城山は中央の広い谷を挟み、南と北に山稜があり、「複合連郭式中

世山城」の造りとなっている。

本郷側南山稜には東から南の丸（出丸）、犬丸（南の丸）、巖丸（千畳敷）、高の丸（権現丸）、太鼓丸、西の丸（出丸）の主要郭が連なり、堀切、帯曲輪・支曲輪・本曲輪・武者走りなどで囲まれている。

真良側北山稜は、東から扇の丸、出丸、本丸、戸石丸（二の丸）の主要郭が連なり、トヤの段、弩屋敷（堂「半」屋敷）の番所曲輪、それらを囲む支曲輪・帯曲輪・堀切が数多く築かれ、強固な守りとなっている。北山稜は、南山稜の曲輪と違って石積み遺構が多く築かれ、年代も新しい。

中央の谷地は広い面積となっており、東側に京屋敷、西方に馬場の地名が残る。

登城道は、大手道が船木堂谷から登る道とされ、標高一五〇mあたりに門跡（大手門）があるといわれているが、今は分からない。搦手道は北山稜より真良へ下る道である。鎌倉期の大手道は塔の岡から南山稜へ登る道と思われる。搦手道は西の丸から堂谷へ下る道だったように思われる。

井戸は今も湧き出ているのは一ヶ所。中央の谷、巖丸の北裾の大杉の

下、浅いが立派な石組の井戸で、どんな早懸かんざにも枯れたことがないという。別名若宮の井戸という。

以上が城跡の概要である。建永年間、茂平公築城より三五〇有余年間の貴重な史跡も、今は雑木、矢竹、雑草が生い茂り、その遺構も荒れ果てて見る影もない。

城跡 三原市高坂町真良。一部、豊田郡本郷町。

JR本郷駅より北へ歩いて約三〇分。

### ◎高山城跡曲輪の名称(地名) 堂(牢)屋敷の段について考える

高山城跡「北の丸」の北方の屋根上に「堂(牢)屋敷」と地名の記された段(曲輪)がある。その由来と、城跡の遺構上においてどんな役割を果たした段であったかを探ってみたい。

「堂(牢)屋敷」と地名の記されている段は、高山城の真良側北山稜に連なる「北の丸」から、比高差約五〇m下った斜面から北へ向ってのびる山稜の屋根につくられている。

標高約一三六m

段(曲輪)の長さ 約五五m(南北に)

幅 約一〇m〜一五m

この段は二段または三段に区画されていた(仕切られていた)様に見える。「堂屋敷」と記されている一面は、長さ約一八m、幅約一〇m。面積は五〇坪ぐらいだろうか。

その北側に仕切られたと思われる段は、長さ二五m、幅約一五m。面

積は一一〇坪ぐらいだろうか。この段は中央部が径約八m。丸くなって少し高くなっている。標高約一三七m〜一三八mだろうか。

段の斜面は崖状に削切して急峻にしてあるが、石積みの遺構は無い。段の南側、背面にあたる「北の丸」から斜面下に幅二m前後の堀切があったと思われるが、現在は埋まってしまつてその跡らしき形態をとどめている。今は真良搦手道より、犬走りと帯曲輪を伝つてこの段に入る道となつている。

堂屋敷の曲輪から山稜が左右に別れて連なっている。左側、船木板屋ふねいた谷の北へのびる尾根と、右側、真良搦手の谷の北へのびる尾根。この両尾根上には、堀切・曲輪が築かれており、高山城の城の遺構である(外城の遺構)。

### ☆「堂(牢)屋敷」の名称について

「堂(牢)屋敷」と記されている地名であるが、地元の人「ドヤトキ」といつておられる。地名の伝えは残っていない……。この地名について聞いてみてもつぱら要領を得ない……。

- 堂があつたんじゃ(四ツ堂の様なもの)。
- 御堂(寺)の様な建物があつたんじゃ。
- 牢屋(牢舎)が建つた……。
- 座敷牢のある屋敷があつたんかの。
- 人質を幽閉しつたんじゃ。
- 敵方の捕虜を居住させていたんじゃ。

●お寺でもあったんか……。

以上、各自いろいろなコトバが出てくるが……。城郭のうちとして考えると、地形・場所的にみて、上記のコトバは、すべてあてはめにくい様である。そこで「堂(牢)屋敷」「ドウヤシキ」「ロウヤシキ」「ドヤシキ」という言葉の意味を調べてみた。

使用辞典は『広辞苑』(岩波書店)、『日本国語大辞典』(小学館)、『大辞源』(角川書店)である。

「堂屋敷」

「堂」

●たかどの

●おもてごてん。公事を行う広く高い御殿。

●昔、土を高く盛ってその上に造った南向きの大きな部屋。

●北側の小部屋を室という。

●衆人の集まる建物。

●神仏を祭る建物。

●「屋敷」

●家屋の敷地。

●家屋を構えた一面。

●家を造るべき場所。

●武家屋敷の略。

●「牢屋敷」

●牢屋の敷地。

●牢屋を構えた一区画の土地。

この字も場所・地形的にみてあてはめにくい。牢屋ならもっと奥深い場所とか、逃亡しにくい段に設置されると思うが……。

「ロウヤシキ」(ろうやしき)

城に関係する文字をあてはめてみた。

「楼」

●遠くを見るために城などにつくられる高いやぐら。

●城楼。望楼。

「楼屋敷」

●楼のある建物があった一区画。

●楼を構えた一区画の土地。

●高い建物があった場所。

●楼を建て、番所において見張りの番人(兵士)が詰めていた場所。兵士(番人)の宿舎もあった。

場所・地形・城の遺跡・曲輪の様子からみて一番あてはまる文字と思われる。

「ど」

なお、三原高校所蔵『古高山城絵図』には番所と記してある(注一)。

「ドヤシキ」(どやしき)

地元の人が伝えるコトバから「ド」「ど」をいう字を調べ、城に関連するものを記すと次のようになる。

「弩」

●石弓、大弓。

●武器のひとつ。

●投石具として、基本的には弓の反動力を利用とした構造をと

り入れている。

・竹や木や金属の張力を利用して矢・石などを打ち出す強力な弓の一種。兵一人で操作できるものから大型の矢を射出するものまであった。

#### 「弩屋敷」

- ・弩器具を収納する庫があった。
- ・弩器具を備えた屋敷。
- ・弩器具を備えた番所、宿舎などの建物のあった一区画。
- △番所、宿舎があり、武器として弩などの特殊な武器が備えてあった場所▽
- ・弩士（石弓の射手）の宿舎または屋敷があった。

#### ☆堂（牢）屋敷の段の場所について

「ドヤシキ」の「ド」にこだわって城に関連する「弩」をあてはめてこの段（曲輪）の場所をみると。

真良側北山稜に連なる主要部の北西部に位置する。この段の東（真良側）、西（船木側）に城下を固める武士屋敷を構え、家臣団の居住する谷がある。

この谷を包括する役目を果たす山稜が堂屋敷の段を中心にして左右にのびており、この山稜尾根に堀切・曲輪がいくつもつくられており、堂屋敷の段はこれらの曲輪の要（中心部）にあたる。両方の谷を連絡する連絡がこの段に通じている。高山城の北側の山稜は、高さは低いが入り組んだ谷が多くあり、このあたりの備えも必要である。

以上の事から「堂屋敷」の段を察すると、

- ・番所が置かれていた。
- ・警備する番人（兵士）がいた。
- ・居住（番人の寝泊まり）する建物があった。
- ・見張用の楼が建っていた（場所は「堂屋敷」の段の北側の小高い段）。
- ・戦の時は弩手が詰めていた。
- ・戦の時、防衛線の陣所であった（これは天文一三年（一五四四）尼子国久が高山城を攻めた時、この段からの山稜が高山城の防衛線であり、尾根・曲輪にすべて冊を築いて旗・幟を立て、防戦したと思えるからである）。
- 等々が考えられる。

#### ☆この段の飲料水について

番所があり、建物があったり、番人・兵士がいる事となると、水の必要がある。この飲料水は、段の西側の谷へ約五〇m弱下ると、板屋の谷の奥にあたり水が湧いている。今も枯れる事なく湧いており、その心配ない。建物の中に水ガメが用意されていた。私らが子供の頃は、遠くはなれた所から井戸水をくんで運んだものである。

#### ☆まとめ

地名の伝え、曲輪の位置を・地形など、以上の事から「堂屋敷」の段についてまとめると次のようになる。



堂（牢）屋敷は、高山城真良側北山稜の「北の丸」北東部より比高差約五〇m下、距離にして約八〇m余のところより北側へのびる山稜の尾根につくられた曲輪である。

この山稜は段の先方より左右に別れており、左は板尾根谷、右は真良侍屋敷の谷を包括する背となっており、山稜尾根にはいくつもの曲輪と堀切がつくられている。

東と西の谷は武士屋敷が置かれ、家臣団が居住していた。この曲輪は両方の谷からの通路でもあり、備えとして常時警備する番所が置かれていたが、番所的な警備だけでなく、船木、真良の武士屋敷の谷とそれを包括する山稜上に曲輪・堀切などを築いて一体化させている。つまり、高山城の本丸、戸石丸、北の丸などの北山稜に連なる主要部の北側の前方的防衛線上の砦の様な形であり、城としては攻められ易い北側の弱所を強固に固めて敵からの攻撃に対する備えとしたものと思われ、戦などのイザといった時は、指令所的な陣所にもなった様に思える。

曲輪には、番所・宿舍・楼・兵器庫などの建物があつたとみられるが、それらの遺構をとどめる礎石などは今は分からない。

平常は小人数の番士で見張り、警備をしていた様に思えるが、緊急の場合とか、戦の時は兵士・弩士が谷の武士屋敷などから駆け付けて守りを固めたのではなからうか。

台戦となつて、東と西の武士屋敷の谷を敵から攻め込まれ、破られて谷より攻め登る敵兵に対して、この曲輪が「石落としの段」（石弓の段）の役目を果たす。谷から攻め登る敵兵に対し、この段より弓石を投射す

る最適の位置でもある。

以上のように、この堂（牢）屋敷は多様な役割を果たす曲輪である。

（注一）江戸時代初期、三原浅野氏の命によって直接調査されたものを

三原図書館初代館長、沢井常四郎氏の意志により昭和初期原図より影写されたもの。原図は広島市吉島町にあった三原浅野家の別邸「万象図」の蔵で原爆により焼失。

#### ◎高山城 弩と曲輪について

新高山城内二の丸の西方に「石弓場」「石弓の段」と伝える曲輪がある。二の丸から北の丸へ続く山稜の尾根上の馬背状の削平して段とし、谷から敵兵が登ってくるのに対し、この段より石弓を投射して敵を防ぐ備えと伝える。

高山城には名称は残っていないが、これにそっくりな遺構の段がみられる。おそらく新高山城を築いた時に高山城のこの遺構をまねたものと思える。弩はこの「石弓場」「石弓の段」に利用された武器具ではなからうか。単に下から登ってくる敵兵に対し、石を転がして落とすだけでなく、勢いをつけた石を投射する方が殺傷力が強いし、敵方にとっては驚異であろう。

もうひとつ。高山城には真良武士屋敷の谷から登る「水の谷道」（真良ヨリ三尺道）と搦手道に「石落とし」？の遺構が残る。

敵が道を攻め登って来た時、この遺構から石を落とす仕掛けだけでなく、弩を使って石を投射する壇（段）と思うのだが、つまり一種の「弩

壇」で、単に石を転がし落としたのではなく、弩や大弓などを利用した守りの曲輪(段)と思えば、充分納得出来ると思えるのだが……。

高山城の「石弓の段」と似た遺構は、太鼓丸の所にある段(西の丸との間)、弩(楼・櫓)屋敷(堂「牢」屋敷)の段など。「石弓場」の遺構に似た曲輪は各所に見られる。

### ◎高山城 北側支尾根の外曲輪の遺構

#### 真良側北山稜主要部の守備曲輪(出城)

高山城について次の様な文章がある。

高山城は峯が二つに分かれている。これは實際城にたてこもる場合に、谷をはさんで戦力が二分されなければならない事を意味しているだろう。この山は南面の形が非常にすぐれており、又前面には複雑に入り組んだ丘をすえているから、ここに適切な施設を置けばおそらく南方からの敵には、難攻不落であろう。

しかし、二つの峯に分れており、北方の峯は南方ほどには峻厳ではない、と思われる事が弱点であり、いわば城としてまとまりに欠ける所がある。(以下略) 石井進著『日本の歴史12 中世武士団』

高山城真良側北山稜の主要郭群は北方からの攻撃に対しては弱い。山の斜面もゆるやかで高さも低い。城を強固にするためにも弱点を補い、施設を造って備えをする必要がある。この施設の備えが、ドヤシキ(堂

「牢」屋敷・楼屋敷・弩屋敷)段から東西にのびている支山稜の尾根上に築かれた堀切と曲輪である。

ドヤシキの段の先端斜面より東西に尾根が分れて支山稜となり、東側は真良武士屋敷(搦手口)の谷の北側へ、西側は板屋谷の北側へと共に谷の北面を包括するようにのびており、その先端は仏通寺川岸、菅川岸である。この支山稜の尾根上にいくつもの堀切と曲輪が築かれて、高山城の北方側の外城・砦・出城・外曲輪(郭)的な役割を果している。この山稜尾根上につくられた堀切・曲輪には、石積み(石垣)の遺構はひとつも見当たらない。すべて削平・削切りである。

造られている堀切は、大体、幅3mくらい。深さは当時2m以上あったと思われるが、今はほとんど埋まったり崩れたりして、○・5m〜1m弱である。

この山稜に堀切や曲輪を造った年代は分らないが、南北朝以後室町期にかけて北山稜の主要部が一応整備された後、戦後期に入り、天文の初め頃、急遽築かれたように思える。高山城内の主要部のようにしっかりとした曲輪の造りではなく、急造りの粗<sup>あら</sup>っぽさが感じられる。尼子氏の備えにしたのだろうか……。

### ◎堂(牢)屋敷の段より東へのびる支山稜尾根の堀切と曲輪

△絵図面参照の事▽

堂屋敷の段(曲輪)より東へのびる支山稜は、真良武士屋敷の谷(城内石の丸)の北側を包括する様にのびて、その先端は仏通寺川岸である。

同屋敷の段からの全長は約四五〇m有余で、尾根の背幅は大体七m前後である。堂屋敷の段の先端を東に向って尾根を下ると、約五m〜六mくらいは崖状であるが、あとは割合なだらかである。この尾根は①堀切までちよつとした曲輪状になっている。

#### ☆Aの背尾根の段

長さ約三八m余。背尾根は幅約七m〜八m。先端は約一・五m〜二mの比高差で、その下に①の堀切がある。

①の堀切は、幅が約三m。深さは約〇・五m（当時は相当深かった）。堀切は尾根をすっぱり切っており、長さは約一〇m〜一二m。

Bは上の段と仮に名付ける。平坦で、一見してしゃもじ形の段である。長さは約二八m。幅は六m、広い所で約一〇m。面積は八七坪くらいか。下の段との比高差は約六m〜七m、先端は崖となっている。

②の堀切は幅三m以上。深さは一・五m以上。北側の斜面に残る深さは三m以上。長さは二〇m以上。この堀切が一番よく原形を残している。

③の堀切は曲輪を斜めに切った様に掘られている。幅は三m弱。深さは約〇・五m〜一mであるが、当時は相当の深さと思われる。長さは約一五mはあると思われる。

④は②と③の間にある土塁である。三角形の土塁で、三角の先端部は約一m。土塁の高さは一mで、南側の斜面近くは四m以上の幅となっている。

⑤は③の堀切の東側にある土塁でこの段の中央部を盛り上げている。

高さは約〇・五m〜一m。幅は二m〜三m。長さは六m以上はある。

Cは下の段。仮に「堀切の段」とでも名付ける。段の長さは約一四mか。幅は約六m〜七mである。南側に二m下って犬走り⑥（帯曲輪）がある。幅は約一m。長さは一五m〜一六mはある。

Dは下の段から堀切④までのびる下り背尾根である。背幅は六〜七m。堀切④までの長さは約一四〇mか。背尾根にわずかに溝状の道の遺構が残る。

④の堀切は深い。一・五m〜二mはある。幅は約三m〜四m。長さは二〇mはある。この堀切は、今は真良下「二の谷」から船木鶯谷への間道の峠となっている。ここに電柱が立っているので場所はすぐ分かる。

Eはこの山稜が分かれて北へのびる支尾根になっている分岐点上にあり、曲輪状になっており、見張台を置いた所の様に思える。

Fは山稜先端部への尾根である。この先の尾根は曲輪状になっており、民家が建っていたが、今はない。竹やぶになっている。当時は先端部にあたり、見張番の屋敷が番所の様なものがあつたと思える。この下が、本郷から仏通寺へ行く街道で、仏通寺川岸でもある。

EとFの北側斜面には帯曲輪や腰曲輪の段が三段〜四段建っている。また、溝状の武者走りに似た遺構も残っている。

堂（鶯）屋敷から東側支山稜尾根上に築かれた遺構には石積み（石垣）は無い。尾根部を削平して斜面を削り切つたりした曲輪と堀切である。また、この支山稜は侍屋敷の谷を包括して、谷を守る形となっている。

### ◎堂(鸞)屋敷の段より西北船木へのびる支山稜尾根の曲輪群と堀切

△絵図面参照の事▽

一堂(鸞)屋敷の段より西北方向の船木、菅川岸へのびる支山稜は、船木板屋の武士屋敷のあった谷の北側を包括する。この支山稜は、堂屋敷の段から全長約二八〇mで、尾根の幅は狭い所で約四m余、広い所では一五m以上もある。

支山稜尾根上には、三区画に仕切られた曲輪があり、それぞれ堀切で仕切られた各曲輪が一区画の独立性をもった様に築かれている。この曲輪群が、山稜の守りと同時に、谷の待屋敷、高山城の本丸・二の丸・北の丸等の主要部の守りとして出城(外城)、砦、城の前衛防御帯といった役割を果す曲輪群である。

この山稜に連なる堀切・曲輪の遺構には、高山城内の主要部から比べると、石積み(石垣)は見られず、粗削りな造りの様にも見受けられるが、真良仏通寺川岸までのびる山稜ともども全体の曲輪配置としては立派であり、一見の価値は充分にある。

この尾根の曲輪に至るコースは、真良の搦手道から堂屋敷の段を通り西北へ、つまり、船木方面に向って尾根を下る。船木の境界標が足元に打ってあるので、それを目印に下っていくと、尾根上の曲輪に着く。

もうひとつは、船木板屋谷に入り、川上菊松氏宅の上にある荒神社の所から裏山の道を登り、左方面に道をとって斜面を突っ切って行くと、下の曲輪の切通しへ出る。分かりにくい場合は、JRの鉄塔が立っているから、それを目指して登ると良い。鉄塔が立っている所は下の曲輪の

両端である。

堂(鸞)屋敷の段を西北の方向、船木方面へ向って尾根を下る。尾根を約八〇m下ると左側に、幅二m余の帯曲輪に着く。◎の帯曲輪である。この帯曲輪を一〇m余下ると右上に段がある。①の段で、長さは約一〇mか。幅は五m前後。堀切Aの土塁も兼ねている。弓射場・投石場の役目もする段とも思える。

### △上の曲輪▽

上の曲輪群は堀切AとBに仕切られた曲輪で三段になって鶯谷に向って造られている。この曲輪の長さは堀切AとBの間で約二二mある。

Aの堀切は、幅は約二m、深さ一m余り。長さは八m以上はある。

①の段はこの曲輪の上段で、長さ約一四m。幅は約四mで、Aの堀切に近づくほどせまい。

②の段はこの曲輪の主要郭①の段より二m下る。幅は広い所で約一二m。上の段の前方は約八mで、上の段を北東側(鶯谷方面)へ囲む様に造られている。

この段は射場の役割をすると思われる、左側の帯曲輪や前方の堀切に敵が来た時、二の丸の段より弓射する様につくられたと思われるが……。

この曲輪群の左側(板屋谷側)側面に幅三m弱の堀状の曲輪がある。武者走りの段③の一種と思われる、溝(堀状)の深さ約一m、幅約一・五mで、谷の斜面側が土塁状になっている。

板屋谷からの敵が斜面を登って来た時の尾根上の曲輪の備えとなる、

または敵の迷い道の役目を果すこの帯曲輪は、上の方は途中で消えるし、(行き止まり)下に下っても行き止まりとなる仕掛けである。

Bの堀切は幅約一・五m、二m。長さは七m弱。深さは約一m。堀から②の段への高さ(比高差)は四m以上あり、崖状である。この堀切は③の帯曲輪(武者走り)につながっており、先にのべた様に、板屋谷から斜面を登り帯曲輪を伝って来た敵方がこの堀切へ迷い込む、またはさそい込む様になっていて、②の曲輪より弓射する…と考えられる。また、鶯谷からの敵もこの堀切へ迷い込む様になっている。

④の段は背尾根である。幅四m弱、長さは約二四m。鶯谷側の斜面は削り切り。板屋側は③の帯曲輪がある。

⑤はこの背尾根上にある土塁。幅約四m、長さは七m弱で、Cの堀切の土塁である。

#### ▲中の曲輪▼

中の曲輪は四段の小曲輪(段)から成り、CとDの堀切で仕切られた曲輪群である。この曲輪の中心は⑤の段で、太鼓の様に丸い形の段である。径(長さ)は一〇mはある。Cの堀切との比高差は五m以上はある。この段がナゼ丸く築かれているのか、楼台だったのか、のろし台だったのか、今の所はつきり分からない。

⑥の段は舌状で、長さ約六m、幅は⑤の段を半分囲む様に造られている。⑥の段より約二m下である。

⑦の段は⑥の段より約一・五m下っている。長さ約六m、幅約七m。

舌状である。⑧の段は⑦の段より約一m下。長さ八m、幅は広い所で約六m。先端部は四m弱の舌状中の曲輪の最下段で前方はDの堀切で、比高差は約四m、崖状になっていたらしいが、今は崩れ登り易い斜面となっている。

この段の右側(鶯谷)斜面約六m下に土塁とも曲輪ともつかぬ段がある。Dの堀切の土塁を兼ねる帯曲輪を中の曲輪の備えとして腰曲輪状に造る途中中止した様に思える。

「中の曲輪」の全長は約三五m。幅は四m、二mである。この曲輪は、山稜の中央に位置する前後に深い堀切で仕切られている。山稜の斜面は天然形状であるが、一部手を加えて急峻な崖としている。

石積みみの遺構は見当たらず、礎石なども分からぬ。今は曲輪の段の形も崩れつつある。

#### ▲下の段(堀切の段)▼

下の曲輪は全長約四五m、幅約七m、二m。段上に三本の堀切が掘られ、堀切の段とも名付けるか……。

⑨の段は「しゃもじ」の形状で、先端部は丸くなっていて面積も広い。段の長さは約三〇mで、丸い部分の長さは約一二m、一三m。

この段のHの部分は、長さ約一二m、一三m。幅は五m、六mか。馬背に近い形になっている。

この段の広い面積を要している前側の円状部に物見楼か見張番所小屋の様な建築物があったか。ここは下の街道のすぐ上に当るし、船木と平

野部も良く見えるし、板屋・鶯の両谷の要所的な場所にもあるし、番所的な曲輪とみても差支えなからう。

三本の堀切は、Dが幅3m弱、深さ約1m、長さは一五m以上。

Eは幅が3m余、深さ〇・五m、長さ約一〇m。

Fは幅が3m余、深さ〇・三m、長さ約一〇m。

④の土塁は幅約3m、高さ約1m。

⑤の土塁は幅3m弱、高さ約〇・五m。

EとFの堀切はほとんど埋まっている。

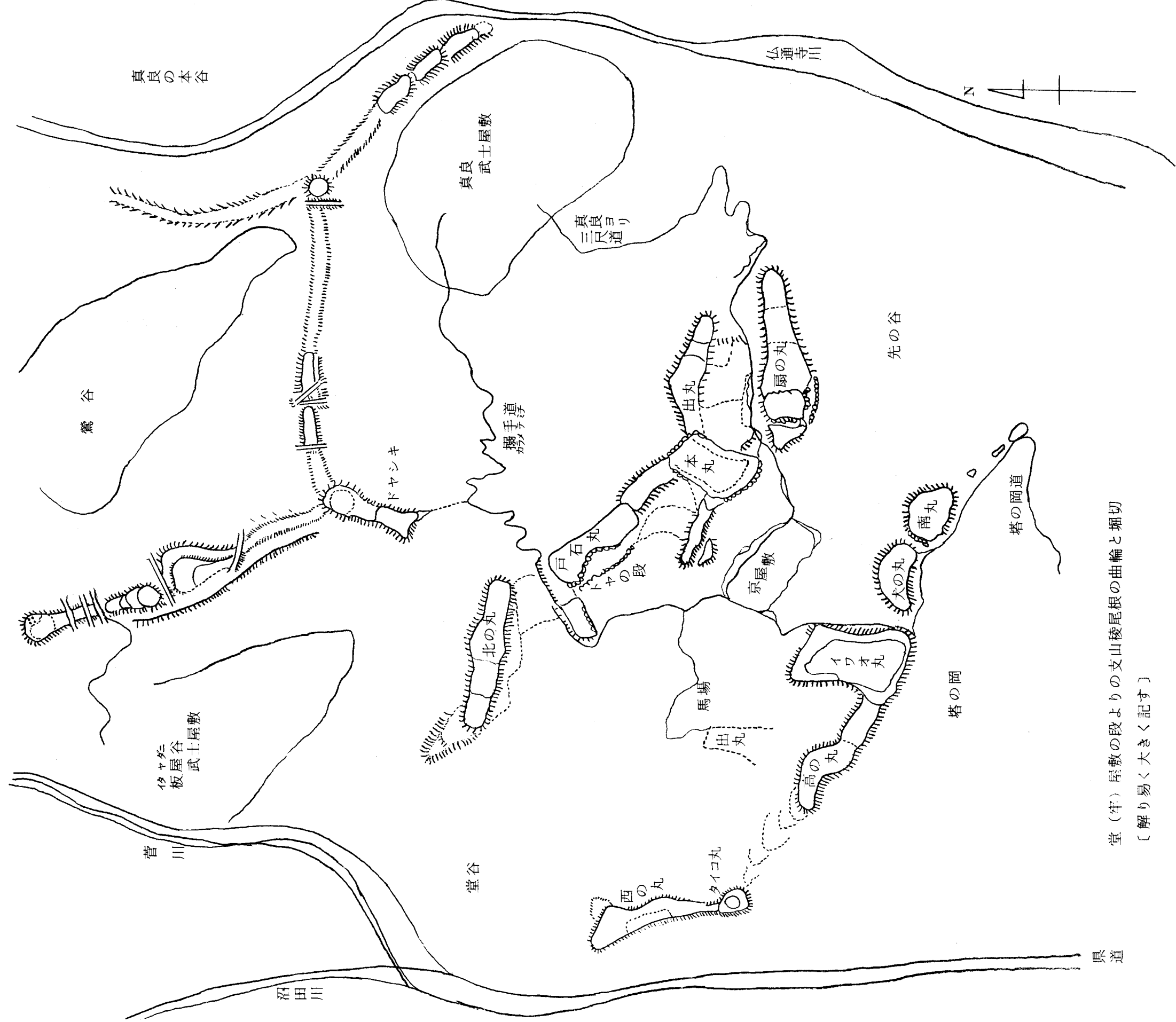
「下の曲輪」の標高は六〇mぐらいだろうか。この段の板屋谷側は傾斜がゆるい。約五mなだらかな傾斜になって急峻な斜面になっている。先端は段状になり、当時の遺構はこわされており、鉄塔が建立されたりして形状は変わっている。

鶯谷側は天然の形状のままであるが、一部に人工の手により削切した様に見受けられる。この段も石積みは見られない。粗けずりな造りの曲輪の様に見られる。

以上が真良側北山稜の「北の丸」「戸石丸」「本丸」「扇の丸」等の出要部と東西の武士屋敷の谷の守りとして、北側の「出城」「砦」「外城」といった役目の、防御線の曲輪と堀切の遺構である。

この山稜の曲輪と堀切が築かれた年代は分からないが、戦国期初め頃であろうか。年号でいえば、天文初期頃だろうか……。

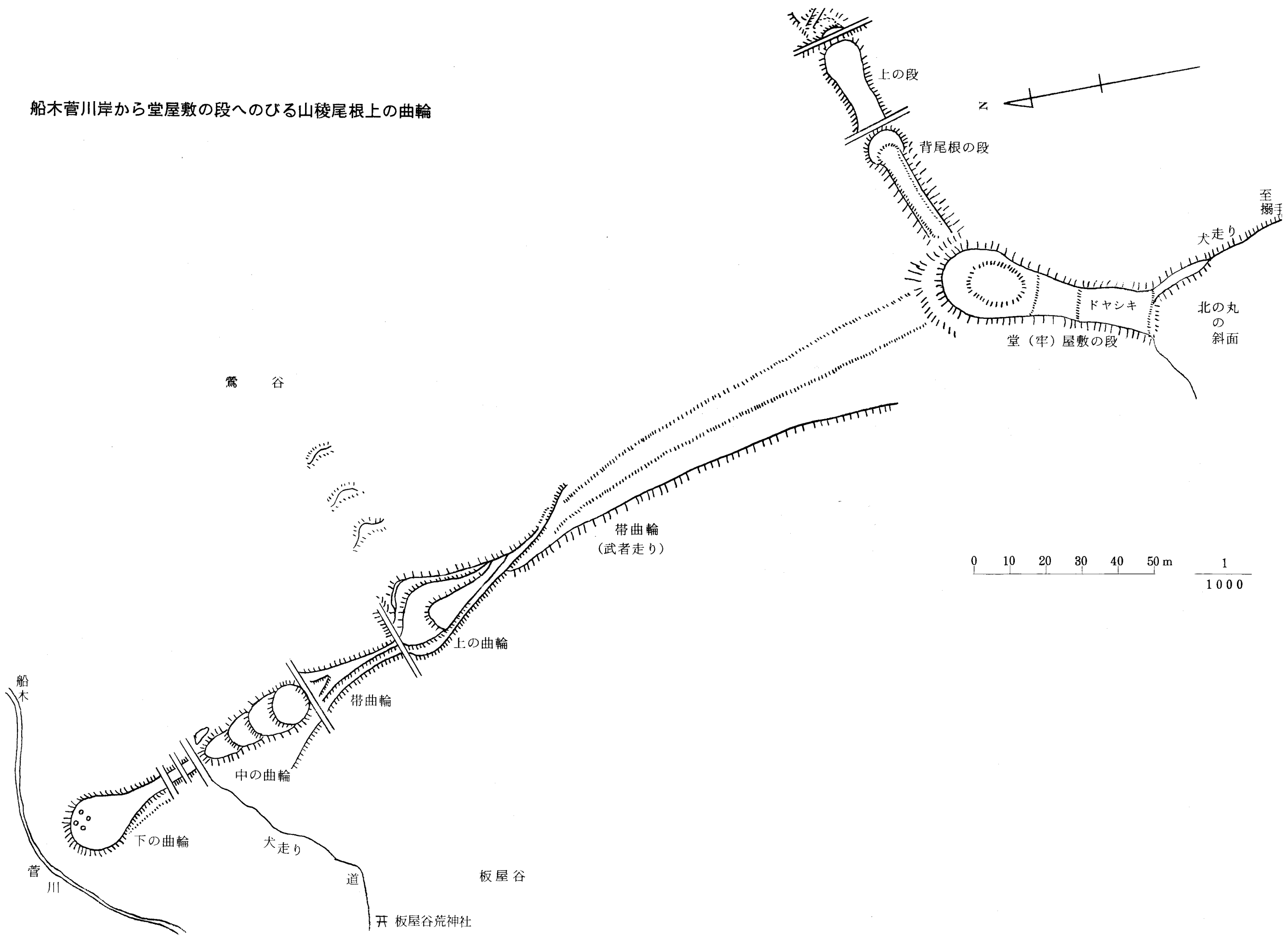
この山稜の遺構が役立ったのは、天文一三年（一五四四）一〇月、尼子の襲来の時であった……。



堂(半)屋敷の段よりの支山稜尾根の曲輪と堀切  
 [解り易く大きく記す]

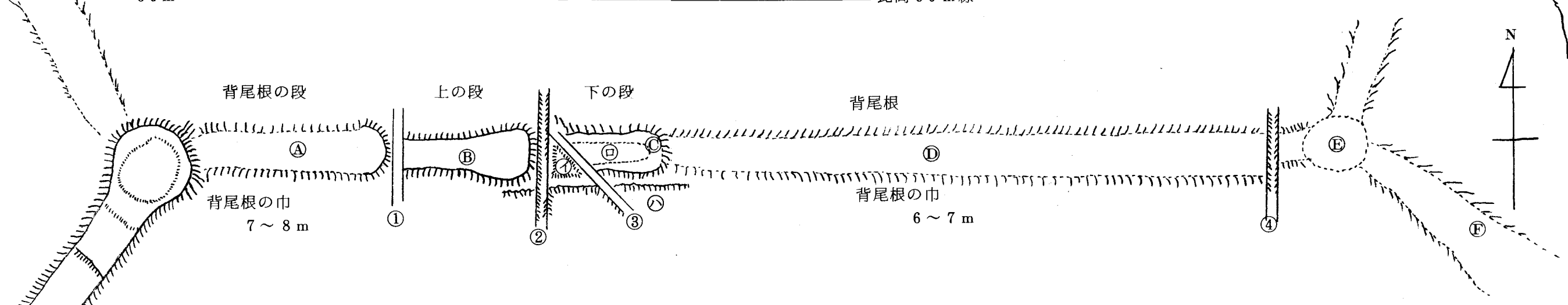
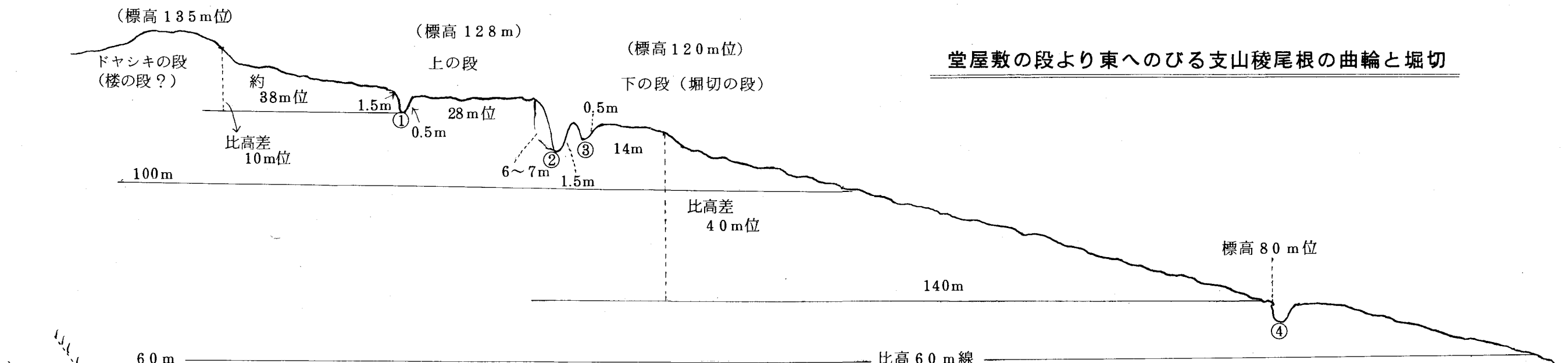
高山城曲輪略図

船木菅川岸から堂屋敷の段へのびる山稜尾根上の曲輪





堂屋敷の段より東へのびる支山稜尾根の曲輪と堀切



①の堀切  
 深さ 0.5 m 位  
 巾 2~3 m  
 長さ 10~12 m

②の堀切  
 深さ 1.5 m  
 巾 3 m  
 長さ 20 m  
 北側の深さ約 3 m

③の堀切  
 深さ 0.5 m 位  
 巾 2~3 m 位  
 長さ 13~15 m

④の土塁  
 高さ 1.0~1.5 m  
 三角の先端 1 m 位  
 広い所 8 m 位

④の堀切  
 深さ 1.5~2 m 位  
 巾 3~4 m  
 長さ 10 m 以上  
 土塁の高さ 1 m 以上

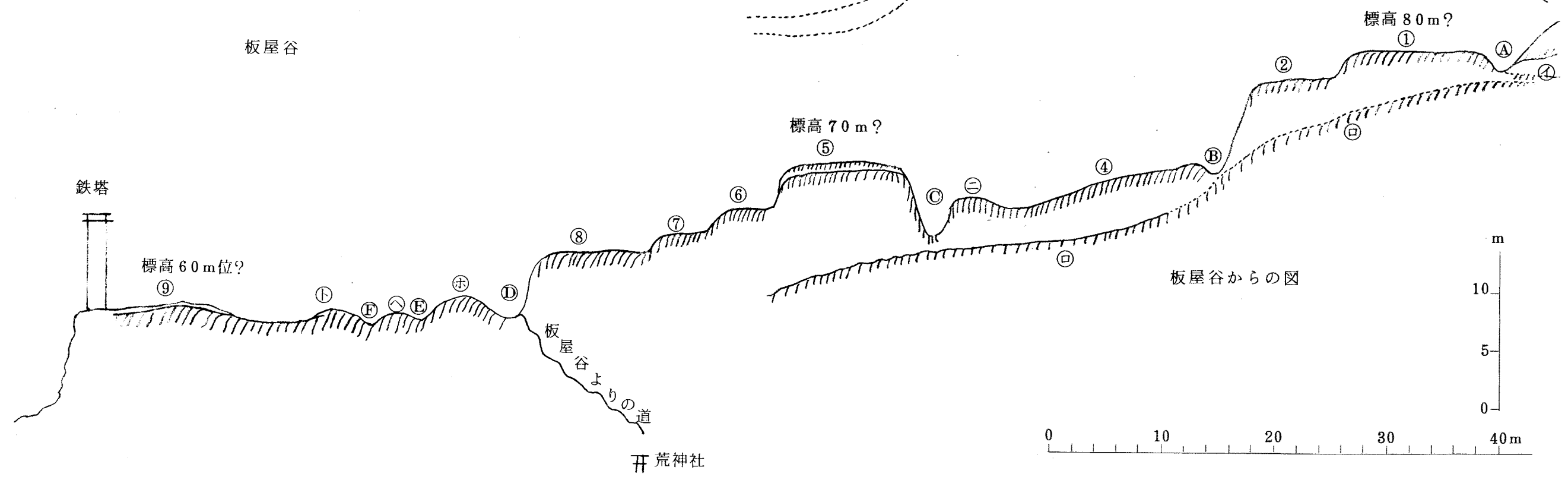
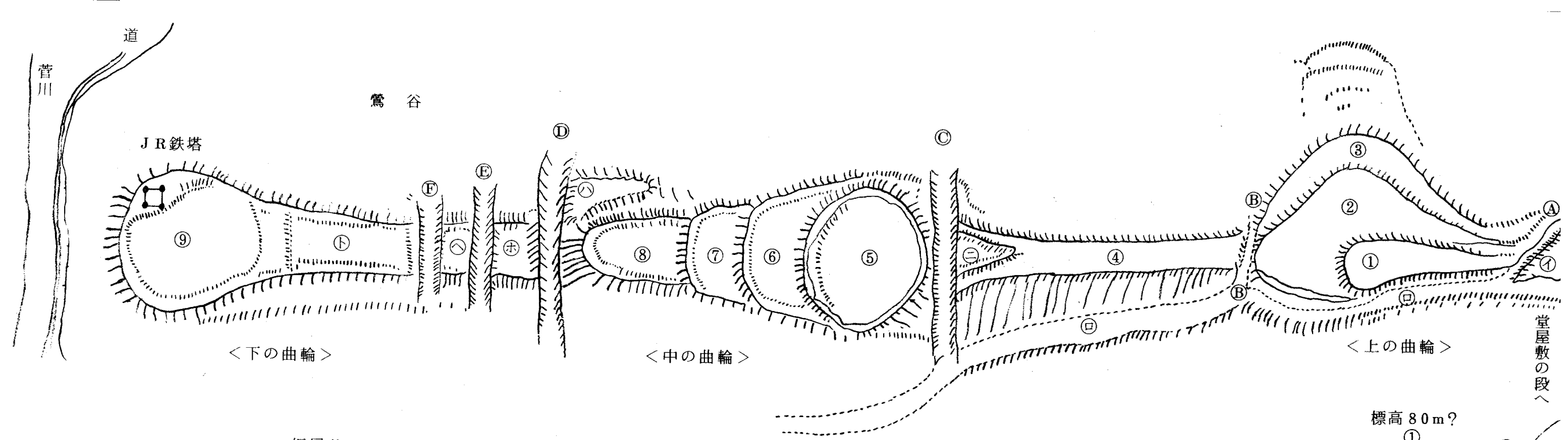
1  
 1000

背尾根の段と堀の高さ  
 約 1.5 m

上の段  
 巾 6~10 m 位  
 長さ 28 m 位  
 上の段と堀の比高差  
 7~8 m

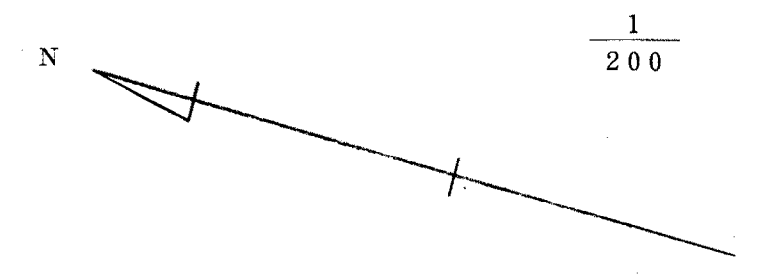
下の段 (堀切の段)  
 巾 6~7 m 位  
 長さ 14 m 位

⑤の土塁  
 高さ 0.5 m 位  
 巾 2~3 m 位  
 長さ 6~7 m 位



船木菅川岸から堂屋敷の段へのびる山稜尾根上の曲輪部

全長 約140m弱、3区画に分れ、堀切で仕切られている  
 高山城北側の出城（外城）の曲輪と堀切



## 編 集 後 記

発行が遅れに遅れてしまったことをお詫びします。

当初の予定の2倍近い原稿が集まり、さらに、提出が遅かったものもあって編集に手間取ってしまったのです。しかし、その甲斐あって、内容については、近年まれにみる素晴らしい論文・論考・随筆を収めることができたと自負しております。

どうかひとつひとつをじっくり味わって読んでいただきたいと思います。そして、来年はみなさまに『山城志』第13号に登場していただくようお願いいたします。

(磐座亭主人)

---

備陽史探訪の会機関誌

——山城志 第12集——

1994年12月24日

編集 備陽史探訪の会  
〒 広島県福山市多治米町5-19-8  
発行 TEL(0849)53-6157

印刷 塩出印刷株式会社  
広島県福山市引野町1-26-7  
TEL(0849)41-0970(代)

---